die and locus

ナナエ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｄｉｅ　ａｎｄ　ｌｏｃｕｓ

【Ｎコード】
Ｎ０４４７Ｖ

【作者名】
ナナエ

【あらすじ】
破面や藍染らとの戦いが終わり、世界に平和が舞い戻った。黒崎一護はその際、霊力を完全に失い、ただの高校生になる。以後、朽木ルキアや阿散井恋次を初めとした死神は、一護に会うために現世へやってくることは二度と無かった。
そして戦いの終わりから四年。現世も尸魂界も、多少の違いはあれど平和に過ごしていた。そこへ、全死神に衝撃の事実が突如として伝えられる。

『黒崎一護が　死んだ』――――と。

No matter how hard I try, I can't be

我々は

限界を知る故に踏みとどまる

その先に希望があると知ったなら

そのまま走り抜けるだろうに

No matter how hard I try, I can't be

長身の男から数メートルの間隔で、ちょこちょことついて歩く子供がいる。その更に後ろには、異様な雰囲気の二人組が歩いており、何も無いこの世界において彼等は極端に目立った。

「ネ…ネル……？」

躊躇いがちに発せられた声だが、もう数え切れないほどの呼びかけである。

彼女は振り向かない。小さな足を、懸命に前に進めている。

しかし、前を行く男の足が止まると、ネルもピタリと止めた。

「……」

彼はネルを尻目に、舌打ちをしてから再び歩を刻み始めた。

無論、少女の足も動き出す。

「一体いつまで、こうやってついて行くんでヤンスか？」

ドンドチャッカの問いに、ネルは答えない。

「なぁ、帰らないか？　楽しくないだろう？」

随分長いことこうしてきていて、初めて口にしてみた。二人としては、相手は子供といえども正真正銘のネリエル・トゥ・オーデルシュヴァンクの、かつて従属官（フラシオン）として仕えていた身だ。あまりネルの言動や行為を批判したくはなかった。

しかし、今、ついていっている相手は、限りなく恐ろしい彼である。寧ろ従属官として二人が不安になるのも、無理のない話だった。

ここでネルが頷いてくれれば、ホッと息をつけただろうに、彼女はペッシェの言葉に対し、首を横に振った。

「ネルは……十刃（エスパーダ）っス」

ギクリ、とペッシェとドンドチャッカが顔を強張らせる。一度、ネリエルの霊圧を感じたときから、ひょっとするとネルが元に戻ったかと思っていた。ただ、ネルを見つけた段界で、彼女は既に子供の状態だったので、どの程度まで記憶や能力を取り戻しているかは

皆目見当がつかなかったのだ。ゆえに、突如としてこのような科白を吐かれては、動揺するしかなかった。
そして、彼女はわずかだが、記憶を取り戻していた。自らが、かつて十刃であったこと。ペッシェ・ガディーシェとドンドチャッカ・ビルスタンが、自分の従属官であったこと。ノイトラ・ジルガが常に自分につっかかり、それを軽くいなして説教じみたことを口にしていたこと。
ただし、思い出したのは本当にごく僅かだ。
そうした事実があった・という、その程度のことしかわからない。自分はノイトラに何を言ったのか、自分の番号は一体いくつだったのか。そもそも、自分の名がネル・トゥでないなら、本当の名は何だったのか、一切思い出すことはできていない。
時々、自分で思う。
目の前でノイトラが死んだとき、自分は無意識にも彼の名を呟いていた。それが悲しみを含んでいたのか、それとも嘲りか、はたまた別の感情か。記憶が戻っていて、意識もはっきりしている状態で、ノイトラが死んだのを見た時、自分は一体何を思うのだろう、と。
「だから俺についてきてんのか？」
鬱陶しそうな瞳で振り向いた。
「う……ぅ……」
ネルは小さく震えた。彼の霊圧は、未だ大きく、重い。
「俺が十刃だから、一緒にいれば何かもっと思い出せるかもしれねぇ。そういうことだろ？」
「そそ…そんなんじゃ、ないっスよ……だ、だ、だって……あなたは、ネ、ネルを…助けてくれたっス…も、もし…ネルが、で、で、できる、ことが、あったら……したくて…」
何とも苦しい言い訳だ。
グリムジョー・ジャガージャックは、ネルを見据えたまま、口を開いた。
「じゃあ、とっとと消えろ。目障りなんだよ」

ネルに背を向け、歩き始めた。
しかし、グリムジョーの背を追って、ネルは再び歩き出す。ペッシェとドンドチャッカにしてみれば、これほど肝を冷やすことはない。相手はあのグリムジョーだ。いつ殺されてもおかしくはない。

グリムジョーは後悔していた。
死神達が虚圏を去って間もない頃、ネルが最下級（ギリアン）大虚に襲われているのを目にしたのだ。傷が癒えたので（彼は、ぎりぎりまで虚圏に残っていた井上織姫の舜盾六花によって大方治してもらっていたが、存分に動けるまで回復するのを待っていた）、その場を去ろうとした矢先のことだった。
彼自身、どうしてあのときネルを助けてしまったのかは分からない。考えるより先に身体が動いていた、といえば妥当なところか。
少なくとも、脳裏にあのオレンジ頭の死神が浮かんでいたことは否めない。

『こっちのセリフだ。動けねぇ奴になんで斬りかかってんだよ…！』

ノイトラに斬られかけたとき、あの死神は、自身もボロボロだったくせに迷わず自分を助けた。妙に、目に焼きついた。
あの死神に影響されたのだ。
もっと強くなりたい。でも、どう強くなればいいのか分からない。初めてこんな簡単なことで悩んだ。簡単に見えて、難しい問題だった。その一つの答えが、あの男。奴の、心だった。だが、彼は人間で、自分は虚。その間には、埋めることのできない穴がある。
初めてだったが、自分の弱さに呆れるばかりだった。
黒崎一護の姿がちらついて、どうしてもネルを殺せない自分がいるのは、冗談でも何でもなかったからだ。

また、足を止めた。後ろの気配も、止まる。
小さな霊圧の揺れ方で、またペッシェとドンドチャッカが狼狽しているのが分かった。

今の自分に、ネルを殺すことはできない。だが、鬱陶しいのも事実。
彼は絶対に殺さない。自分のことも殺さなかったくらいだ。ならば、彼だったらどうやって、この状態を打開する？　黒崎一護。あの死神は、多分、受け入れようと努力するだろう。相手がどのような者でも。認めた者なら、皆。

ならば、

「疲れた」
無造作に、言葉を投げてみる。
後ろの霊圧がすごい勢いで跳ね上がったので、相当驚いたのだろう。無理も無い。こちらから話しかけたことなど、こうして虚圏を当てもなく彷徨い始めてから、未だ嘗て一度もなかったのだから。
さぁ、自分がこう言った。彼等はどうする？　首だけを後ろに向けて、様子を窺った。
ネルがドンドチャッカの口から、戦闘用霊蟲のバワバワを出させているのを見た時は、さすがに吐き気がした。
「グ、グ、グリムジョー……様……」
震える拳を、握りなおす。
「……ば、バワバワに……」
重く、溜息を吐き出す。やはり人間と虚の感性は、違うのだろうか。
なんとかして追い抜きたい。そのためにも少しでも近づこうと思うのが、間違いなのだろうか。
「……乗らねぇぞ」

シュン、とネルは俯いてしまい、バワバワも低く鳴いた。
なんとか心を開いてみようか、と思ったのは本当だ。それでもし、強くなれるなら。ただ、グリムジョーは嫌だった。
あの、ドンドチャッカの口から出てきた生き物に乗るというのが、何となく。

＊　＊　＊

尸魂界の時間は、いつもと同じように流れていた。
藍染との戦いから四年。当然ながら、瀞霊廷は完全に落ち着きを取り戻しており、以前どおりの日常である。
この四年の間に、色々なことが変化していた。
空席であった三番隊、五番隊、九番隊の隊長位には、それぞれ阿散井恋次、瑠璃谷夜光（るりのたにやこう）、檜佐木修兵がついていた。副隊長は、三番隊と五番隊は状態維持で吉良イヅルと雛森桃で、九番隊には朽木ルキアが入った。ちなみに、六番隊の副隊長は、それ相応の力を持つ死神が現れていないため、空席である。
瑠璃谷夜光は、二年前に新たに入ってきた死神だ。彼女は日番谷冬獅郎に次いで天才肌をもつ者で、霊術院を飛び級で卒業し、あっという間に隊長位にのぼりつめたのである。

九番隊隊舎の一室で、ルキアは文机に向かい、書簡紙に筆を走らせていた。浮竹十四郎に書いているのだ。彼女は恋次達同様、虚圏での戦いが評価され、九番隊の副隊長位につくことになった。初めは義兄の六番隊隊長・朽木白哉が反対したが、さすがにあの戦いの後での意見は認められず、また一般隊士の階級を背負っていたルキ

アが昇進となるのは当然のことだった。
無論、席官ですらなかった彼女が副隊長になってからの忙しさは、尋常ではなかった。故に、十三番隊へ行く暇がなく、こうして書簡を送ることにしているのだ。
これを書き終えたら、ルキアはすぐに仕事に行かねばならなかった。忙しくも、これが今の日常だ。

やはり、ずっと、尸魂界の時間は、揺るぐことなく流れている。

バタバタと廊下から足音がしたので、ふと顔を上げる。筆を止めると同時に、襖が開けられた。檜佐木である。
「おお、いたか、朽木」
「檜佐木隊長…？　どうされたのですか？」
ぽかんとしている彼女に、檜佐木は困った顔つきで頭を掻いた。
ルキアは、この時間帯だと彼が出版担当の一般隊士と共に、瀞霊廷通信のための原稿をチェックしているはずであることを知っている。
「いや、なんか、緊急隊首会らしくて、すぐに行かねぇといけなくてな」
「緊急隊首会……？　…随分、久しぶりですね」
「そうだよな。ま、お前も頑張ってるし、そんな目立った異常事態はねぇし、きっと大したことじゃねぇさ。俺がいねぇ間、隊のこと任せていいか」
「分かりました」
言うと、檜佐木は瞬歩でその場を去った。
緊急隊首会など実に久方振りだった。藍染との戦い以降、緊急隊首会が行なわれたのは、因幡影浪佐の霊骸による事件が起きたときの一度、二度程度だ。ここのところ、そのような事件は起きていなかった。それだけに尸魂界の警備も厳重になったということなのだろう、現に隊長、副隊長、席官の仕事は四年前と比べてべらぼうに

増えた。だから彼女は、現世へ派遣されることも全くなくなった。行くならば、もっと下級の隊士だ。

（……そういえば…）

ふと、死神代行・黒崎一護のことを思い出す。人間であるにも関わらず死神の力をもち、また虚の力ももっていた彼に、ルキアも尸魂界も、数え切れないほど幾度も救われた。そんな彼に、随分長いこと会っていない。否、一護は藍染と戦う際に用いた最後の月牙天衝“無月”により、死神の力はおろか、霊力を全て失っている。会うことは、出来ない。

あやつ、元気でやっておるのだろうな……。

溜息を吐き、再び筆を手にとって、書簡紙に最後の一文を書き添えると、丁寧に折り畳む。書簡を懐に入れると、小走りで部屋を出た。

廊下を歩いていると、少し遠くから、何やら懐かしい霊圧を感じることに気付いた。丁度自分の行く先の方だ。

角から姿を現したのは、四楓院夜一だった。

「夜一殿…！？」

心底驚いた様子で、ルキアが瞳を瞬かせる。

四年間、彼女が尸魂界に来たことはほとんど無く、相変わらず現世に身を落ち着けていたのだ。隠密機動に戻ってきてくれと二番隊隊長・砕蜂が初めの一年ほどはしばしば現世に出向いたが、結局最後まで頷かなかったと聞いていた。

長かった髪はバッサリと切られ、短くなっている。肩につくかつかないかの瀬戸際だ。

「お久しぶりです」

ルキアが頭を下げると、ウム、と頷く。

「お主も元気そうじゃな。それに九番隊の副隊長とは、昇進したのう」
「い、いえ」
躊躇いながら首を横に振る。
夜一の表情が、変化していないのだ。ずっと、妙に険しい顔つきで、ルキアのことを見つめている。
「あの……私に、用が…？」
「ああ」
ルキアは、髪を手で少しはらった。彼女の髪は夜一と正反対で、今は腰あたりにまで伸びている。
暫しの沈黙があり、夜一は疲れたように息を長く吐き出した。
「……その様子では、まだ、知らぬのじゃな」

自分が、まだ、知らない…？

「何を…ですか？」
一度、ギュッと固く目を瞑ってから、意を決したように口を開く。

「一護が、死んだ」

難しい単語は、使われていない。知っている単語しか使われていない。
だが、ルキアにはその言葉の意味を、すぐに理解することができなかった。

「……え…？」

――――一護が、死んだ？

正常に流れていた時間が、

狂い始める。

No matter how hard I try, I can't be

一護が死亡した、というところからスタートの長編小説です。
四年の間に色々なことが変化していますが、このことによって今までとは比にならないような変化が生じていきます。
尸魂界は勿論、現世や虚圏もです。地獄は…書くは分かりません。

恋次を五番隊隊長にしなかったのは、一応理由があります。雛森にはお姉さん的な人が必要かな、と思った結果、オリキャラの夜光にその役を担ってもらいました。吉良は恋次がきっと奮い立たせてくれます。そう信じてる。↑

また不安定なものになってしまいますが、よければお付き合いくださいませ。

No matter how hard I try, I can't be

交通事故。
たったのその四文字の出来事が、一護の命を奪っていった。
普通なら、彼だったら容易に避けられたろう。たかが居眠り運転だ。長く虚や破面といった敵と戦ってきていた彼が、力を失ったとはいえ、避けられないはずがなかった。
だが、クロサキ医院に行ってみれば、その理由は明白だった。
妹の夏梨と遊子は、涙ながらに井上織姫や石田雨竜、茶渡泰虎ことチャドに訴えたのだという。“自分達のせいで兄は死んだ”と。

つまり、一護は妹達を庇って死んだのだ。彼女らがいたから、一人で避けることなどできなかった。だから。
彼の友人や家族が、この事実を受け入れるには、あまりに突然すぎてあったことは否めない。現に、受け入れられている者は皆無である。

「ルキアっ!!!」
バン、と襖を開けた。部屋の中の文机に向かって、固まっているルキアが目に入る。恋次の手が、僅かに震えた。
「――――聞いたんだな……」
微動だにしない彼女に、顔を歪める。“心ここにあらず”とは、まさにこのことだ。自分とて、緊急隊首会でこの話をされたとき、眩暈を覚えた。衝撃的であったのは皆同じだ。一護が死んだというだけで充分ショックを受けるに値する。しかし、彼女がこうにまでなってしまうのは、更に付け足された内容の方に原因があるのだろう。
ふいに肩をつかまれ、恋次は驚きつつ振り向く。

「…！」
襖を閉めて、向き直った。
「檜佐木先輩…」
彼もまた、複雑そうな顔をしていた。
「阿散井、今日のところは帰ってくれ」
「で…でも！」
「まだ吉良に話してないんだろ？　朽木が気がかりなのは分かるが、お前は三番隊の隊長だ。そっちを優先しろ」
最もなことを言われ、黙り込む。
ルキアの部屋の襖を、横目で見た。
「朽木には、落ち着いたら三番隊に行くように俺から言っておく」
恋次は、何も言わない。無言で頭を下げると、隊首羽織を翻して去っていった。

喉が渇いた。しかしどうしても、湯呑みに手を伸ばすことはできない。その余裕がなかった。
「…びっくりですよね…。あの、一護が……」
十番隊副隊長・松本乱菊が、呆然と呟く。それに十番隊隊長・日番谷冬獅郎も首肯した。彼も同じ気持ちだ。たしかに、何てあっけない死に方だろうとは思った。だが――――、
「松本…俺の話の本題は、黒崎一護が死亡したことじゃねぇんだ」
「え…！？」
顔を上げる。大変驚いた様子である彼女に、内心嘆息した。自分も隊首会の場で、一番隊隊長兼総隊長・山本元柳斎重國から同じ具合に話を切り出され、このような反応を見せたからである。
「黒崎は四年前に力を失って、今はもうただの人間の魂魄に成り下がってんだ。だから、死んだら俺達のよく知る輪廻に入るはずだ」
魂魄の輪廻――――。
それは、真央霊術院で最初に習う基礎学だ。

普通の死した者の魂魄は、“整(プラス)”と呼ばれ、未練がなければ即尸魂界に送られる――いわゆる「成仏」というものだ。未練があっても、そんな魂魄を「魂葬」することが死神の役目である。

生前悪事をはたらいた者は、尸魂界に来ることは許されず、地獄に送られる。そこで永久に、その悪事を責められ続ける。彼等のことは、“咎人(とがびと)”と呼ばれている。

地獄に送られた魂はともかく、尸魂界に送られた魂の方は、後に現世へと転生する。

また、虚(ホロウ)と化してしまった整においてもそれは同様だ。死神が斬魄刀で彼等を斬ることで、死後の罪を洗い流して尸魂界へと送られる。生前にも罪を犯した虚の行き先は、言わずもがな。

「“はず”って…当たり前じゃないですか」

「当たり前の……“はず”なんだ」

机の端に積み重ねていた書類の中から、一枚をひょいとつまむ。執務室の外が少し騒がしくなってきているので、この話は広まってきているのだろう。

「現世担当の車谷善之助は知ってるな？」

「朽木の後任ですよね？」

ああ、と頷く。

「さすがに四年も経つと、慣れてきたらしくてな。今じゃなかなか手際よく、虚の殲滅も魂葬もこなしている。その情報をまとめたものなんだが…」

机の上を滑らせるようにして、その書類を置いた。乱菊はすぐに手にとり、文字に目を走らせる。初めは憮然とした顔つきであったが、彼女の表情は見る間に変化していった。尸魂界に送られた魂魄の名の羅列を、舐めるように見る。気のせいだと思い、幾度も幾度も往復した。

やがて、乱菊は恐る恐るといった具合で書類から顔を上げ、日番谷を見た。彼の顔を見ても、戸惑っている状態であることは一目瞭然だ。

「どういう……ことですか…？」
「分からねぇ」
日番谷は静かに首を横に振った。
書類の中に、「黒崎一護」という名は、記されていなかった。

その夜中。
ルキアは瀞霊廷の中を適当に歩き回っていた。特別どこかへ行こうというわけではないが、眠りにつくことなどできなかったのである。
この時間になると、あまり死神の姿はない。せいぜい各隊舎の入口に、警備の者が一人二人立っている程度だ。
所々で灯されている火の、パチパチという音が、辺りが静かな分異常にはっきり聞こえた。

三番隊隊舎の入口から少し離れたところまで来て、そういえば近いうちに恋次のところへ行くよう、檜佐木隊長から言われていたな、と思い出す。
今は時間が時間なので入りはしないが、いつ来るか悩んだ。恐らく恋次の用件は、一護のことだろう。しかし自分は、もう少し一人でそのことについて頭の整理をしたかった。
ずっとその場で足を止めていると、三番隊隊舎を警備する死神の一人がルキアに気付き、半ば慌てた様子で頭を下げた。まぁ、このような時間に副隊長が外をうろうろしていることはあまりないので、慌て驚くのも当然だ。
「お疲れ様です、朽木副隊長」
「ああ…」
声を出すだけで、何だか元気が吸い取られていくような錯覚に陥る。
そのとき、隊舎から一人に死神が出てきた。

「阿散井隊長！？　お、お疲れ様です！！！」
思いもよらぬ隊長の登場に、下っ端死神は土下座でもしそうな勢いで挨拶をした。対し、恋次は軽く手を挙げる。
「おう、お疲れ。警備もそこそこにさっさと休めよ」
「はい！　ありがとうございます！！」
そこで恋次が前に視線を戻すと、暗がりの中でぽかんと口を開いたまま立っているルキアをとらえた。
こちらも負けじと驚いた様子で暫し口を開き、息を吸い込んだ。
「…よう。ルキアじゃねーか」
「…どうしたのだ、こんな夜中に」
肩を竦めて答える。
「俺は、なんとなく寝れねぇから、瀞霊廷の見回りでもって思っただけだ。オメーこそどうしたんだよ？　まさか、こんな時間に三番隊に来たとかじゃねぇだろ？」
「当たり前だ。…私も貴様と似たようなものだ。意味は無い」
顔を背けるルキアを見つめ、頭を掻く。目を合わせて喋らない辺り、まだ気持ちが落ち着いていないらしい。無理もない。ややあって、口を開いた。
「……お互いに用事がねぇなら…少し、話さねぇか？」
ピク、と彼女の肩が動く。
この言葉を待ち望んでいたのか、それとも恐れていたのか。それは恋次には分からなかった。
沈黙が流れ、やがてルキアは歩き出した。
「おい、ルキ」
「場所を変える」
聞いて恋次は、ルキアが話をすることを承諾したとみて、後を追う。
「何処行くんだ？」
「丘だ」
目を細めた。彼女の言う“丘”とは、まだ流魂街で過ごしていた

頃、共に生きていた仲間達の―――否、“家族”の墓を作った場所に他ならなかった。

『えぇ！？　じゃあ、彼の魂魄は現世にも尸魂界にもいないということですか！？』

吉良の言葉に、重々しく恋次が頷く。

『ああ…総隊長の話じゃ、一護は尸魂界の恩人ってことで、車谷が全力を尽くしてあいつの魂魄捜索にあたったらしいが、確認できなかったんだ』

思わず、溜息が漏れた。

隊長になって三年以上になるが、まさかこのような事態が発生するとは思っていなかった。正直、藍染との戦いが終わって、油断していた。

隊長というのは、こういうことを直に伝えられ、それを自分の中で言い聞かせるより先に隊士に伝えねばならない。そしていち早く策を練って、隊を動かさねばならない。個人の情が入ってしまうと、それは成せるはずがない仕事でもあった。だから、割と初めのうちは、隊長格は恐ろしいほど冷徹な雰囲気を醸し出す。

副隊長と隊長の間に、ここまでの高さの違いがあるとは信じ難かった。いつも淡々とこなしていた白哉のことを考えると、やはり彼は自分の目指す人だと感じる。

『…阿散井隊長……』

吉良は迷ったように瞳を泳がせる。

『それって…彼の魂魄が虚に喰われた、と考えるのが、普通じゃないでしょうか…？』

恋次が目を見開く。

『だって…彼の魂魄は消失したということでしょう？　だとしたら、考えられるのは』

『吉良っ！！！』

名を叫ばれ、吉良は口を閉じる。灯台だけで照らされた部屋は、

夕方となると既に薄暗かった。
『……仕事、まだ残ってるので。これで』
会釈すると、吉良は隊首室から出て行った。
遠ざかっていく足音を聞きつつ、恋次は歯を食いしばって、自分の身体が震えるのを必死に抑えた。

盛った土に木の棒を刺し立てるだけ、という簡素な墓を眺めて、恋次は深く、溜息を吐いた。
「…夕方は、そうやって吉良には怒鳴っちまったけどな…。考えたことなかったんだ。あいつが虚に喰われて消えた、なんて」
ルキアは墓前で手を合わせ、目を閉じたまま尋ねる。
「一護が事故に遭った周辺で、虚の出現はなかったのか？」
「夜一さんには聞いてねぇんだろ？　隊首会でも、オメーが聞いたことと全く同じことを聞かされただけだ」
「つまり、分からぬということか…」
「そうだな」
合掌をやめると、立ち上がって恋次に向き直った。彼の羽織っている隊首羽織の白さは、この夜空の下でも充分に明るく見えた。
「恋次」
「ん？」
もう、決めた。恋次と話していて、決意が固まった。後悔はしたくないのだ。
「私は、死神をやめるかもしれぬ」
突拍子もないことを言ったので、彼は一瞬遅れてから「はぁ！？」と叫んだ。
「今の私は九番隊の副隊長だ。軽率な行いをして良い身ではない。しかし、今回ばかりは私は、自分で調べねば気が済まぬ。それに、この事件、何かあるような気がする」
丘の上は高いので、下にいるより風が強い。
ルキアの長い黒髪が、風になびく。

彼女にはどうしても、信じられなかった。あの一護がただで死ぬとは思えない。何か裏がある、そう思った。そう、信じていたい。確証がない今は。

「勝手に行動を起こせば、罷免を唱えられる可能性は高いだろう。だから…」

「じゃあ、俺も行くぜ」

ルキアが恋次を凝視する。

彼は腕組みをした。

「俺だって、いくら誰に言われても信じられねぇんだ。一護の野郎はこのくらいじゃ死なねぇ。何かあったんだ・って、それしか考えられねぇ。だから、俺もお前と一緒に現世に行く」

「な…何を言っておるのだ！！！」

怒鳴る彼女に、恋次は自嘲気味に笑った。

「…隊長の俺がこんなことしたら、俺はどうなるんだろうな？」

「っ」

責めようとした言葉を、取られた。隊長の貴様がそんなことをすれば、と言おうとしたのだが。

瀞霊廷の方を振り返った。ここからでも、双極の丘の先端くらいは見える。ただ、この時間だと、暗いのでいつもに増して見えにくい。

「処刑とか、な」

ビクリ、と身体が震えた。

たしかに、副隊長ならともかく、隊長のそういった勝手な行動は、最悪の場合処刑となる。隊長は各隊での絶対の存在。だからこそ、勝手なことをしたときの刑は重い。

「……〜〜っ…」

ルキアはもう一度、恋次は尸魂界で待っているよう言おうかと思ったが、彼の性分を知っていたので諦めた。彼は、一度言い出したら聞かないのだ。自分と少し似ている。自分だって、納得のいかないことは自分でなんとかしていきたいのだ。でないと、永久に後悔

し続けることになる。
止めよう、止めようと思っていた自分が、何だかとても愚かに思えてきた。
「……案ずるな、恋次」
「あぁ？」
「仮に処刑になろうと、今度は私がお前を必ず助けに行く」
ニッと笑って、恋次を見上げ、胸を張った。
「一護と共に、必ず」
呆けた恋次だったが、やがて彼も不敵に笑い、「おう！」と答える。
闇に染まっていた世界に、朝日が差し込み始めた。

No matter how hard I try, I can't be

ルキアと恋次の「副隊長」「隊長」をつける言葉はすごく書いていて違和感があります。
そもそもルキアは席官でもなかったのに副隊長になるって。
さすがにそこまでの飛び級、普通ありませんよねぇ…。
そこは目を瞑っていただきたいです。いい加減ですみません；

No matter how hard I try, I can't be

吉良は重い足を隊首室の方へと向けて運んでいた。
まだ、怒っているだろうか。だがそれは、自身の軽率な発言によってのことであって、自業自得だった。

――――彼の魂魄が、虚に喰われたと考えるのが、普通ではないでしょうか。

分かっていたはずだ。信頼する者が、最悪の事態でいなくなるということを一番恐れているのは紛れもない恋次自身であることも、全て。だから、わざわざ思い知らせる必要などないだろうに、自分は深く考えもせず、あのような取り返しのつかない言葉を口にしてしまった。
謝らなければ、謝らなければ。そう考えながら布団に入っていたら、気付けば朝になっていて。一睡もしていないのだが、自分のあの言葉を受けて恐怖感が一層大きくなったであろう彼のことを考えると、どうということはなかった。
隊首室の前までやってくると、深呼吸をする。
謝らなければ、ならない。相手が自分の上司であるということではなくて、かつて同期であった、友達として。
「……阿散井くん」
声をかける。返事はない。
「……阿散井くん？」
少し声量をあげてみたが、やはり返事はない。それほどに怒っている、ということだろうか。怒り心頭に発していたとして、そこで部下から呼び捨てだと、火に油を注ぐようなものだろうか。改めて、言い直す。
「…阿散井隊長！　吉良イヅルです！」

しかし、これもまた返事はなかった。眉根をよせて、イヅルは襖に手をかける。
「…失礼します」
開けてみると、中には片付けられた書類の束があった。それを見て、驚く。恋次が朝には書類を全て終えているなど、これまでに一度もなかったことだ。寧ろ、彼はコツコツやるタイプ。毎日十枚から二十枚程度を終わらせて、イヅルに提出するよう申し付ける。それが、たった一日でこんな…。
「っ！！？」
イヅルの目が見開かれる。彼の瞳がとらえたもの。それは、書類の束の陰に畳んで置いてあった。――――三番隊の、隊首羽織……。
「これは……」
もう随分前のこと。藍染惣右介が本性をあらわした、双極の丘。反膜（ネガシオン）に包まれて、空へと消えていった、元三番隊隊長・市丸ギンの後姿を、思い出す。
ドクリ、と心臓が脈を打った。
「吉良！」
ふいに呼ばれ、振り向く。隊首室の入口に立っていたのは、檜佐木だった。
「檜佐木さ…、檜佐木隊長……」
「阿散井はどこだ？」
有無を言わさない調子で尋ねてきた。
狼狽えながらも、イヅルはそっと、手に持っていた隊首羽織を見せる。
「ちっ…！　あいつらっ……！！」
顔を顰め、拳を握り締める。
「…あの、うちの隊長に、何か？」
しかめっ面のまま、檜佐木は懐から取り出した。――――九番隊の、副官章。
「これ…！」

「……朽木も、いねぇんだ…」
イヅルもまた、苦虫を噛み潰したような顔をした。

＊　＊　＊

ある交差点の歩道にあったガードレールは、見るも無残なひしゃげ方をしており、原形のほとんどを留めてはいない。丁度その内側に立つ電信柱も、強く何かが擦れたような跡が残っていた。
これで、まず、半信半疑であったことが、一つ解明される。
「……嘘じゃ、ねぇな…一護が死んだ・ってのは」
ルキアは小さく頷いた。
電信柱の下に置かれた、複数の花束。そのうちの一つには、メッセージカードが添えられていた。

“元気でね。　　井上織姫”

何度も消して書き直したのだろう、文字の下が黒ずんでいる。
死んだ者の魂は尸魂界に行く。
輪廻の実態を知る数少ない人間からの、精一杯の言葉。ただ、ごく普通の者からすれば、死んだというのに「元気でね」とは、なんてメッセージだと認識されてもおかしくはない。つまり、この花束は多分、その輪廻の実態を知る人間数名が一緒になって置いたものであろう、ということだ。
「……よし。いつまでもここにいても仕方ねぇ。石田んとこ行こうぜ、ルキア」
織姫は未だに一護の死のショックから立ち直ってはいないだろう。石田やチャドにしても同様だが、彼等ならまだ話を聞くことができる気がした。
「…ああ」
彼女は白い花弁を撫で、赤髪の死神を追って踵を返した。

石田の霊圧を探ってみると、この早朝から、彼はコンビニへ行っているようだった。そちらへ空を駆けていく最中、ルキアはポツリ、と言う。

「……一護は」

「…知らねぇぞ。何処にいると思う・って訊かれてもな」

恋次は、こうして走っているときに、無駄にバタバタという風に煽られる音がしないことに、何となく違和感があった。たった、四年。たった四年でも、隊首羽織に慣れていたらしい。着た当初は、「邪魔」と言ってしばしば脱いでいた。イヅルに怒られながら、幾度も強引に着せられていたが。

ふとルキアに目をやってみると、彼女も左袖に副官章がないのがどこか心もとないらしく、本来なければならないはずのそれをつけていたところを時折見つめている。

三番隊隊長と九番隊副隊長が、揃って何をしているのだろう。

いつしかの十番隊のように、三番隊自体が潰されることになったらと思うと、気が気ではない。それでも恋次は、こちらを選んだ。だから、もう尸魂界に戻ったら、少なくとも死神ではいられないだろうと感じている。それは今共にいるルキアも同じだ。

それで、いい。ずっと後悔することになるより。自分で行動するのが、やはり彼等は性にあっているのだ。後悔しない為ならきっと、頑張れる。

ただ、考え事をしながら走っていたら、空を飛ぶ鴉（カラス）に顔面衝突され、ルキアに「莫迦者が」と言われたのには、赤面するしかなかった（いつもなら怒鳴って誤魔化すのだが、このときのルキアはこれまでになく蔑んだ目でこちらを見ていたので、本気で凹んだのである）。考え事をするのも、自分の性にあわなかったりする。多分隊長として失格のレベルで。

数分して、二人がコンビニの前にトン、と降り立つと、中から石

田が出てきた。彼は一瞬驚いた顔をしたが、何となく予想でもしていたのだろうか、少し呆れ顔で笑った。
「…やあ、久しぶりだね」
恋次は彼が手にもつコンビニ袋を見やった。分かりにくいが、かつて日番谷先遣隊として現世へきたときに、一角と弓親が多く買っていたものとよく似ているように思う。十中八九、コンビニ弁当だ。
彼の視線に気付いた石田が、苦笑した。
「……別に、自分で料理を作る余裕もないわけじゃ、ないよ」
想像していたことをピタリと当てられ、眉間に皺を寄せる。
「大学で授業を沢山とっていて、今日は暇がなくてね」
無音の時が流れ、ルキアは口許に笑みを作った。
「…変わらぬな、石田」
髪型も分け目が違うというだけで、強いて言うならほんの少し伸びた程度。眼鏡もとくに変化はない。新調したのだとすれば、同じものを購入したのだろう。それを、指で押し上げる仕草も、四年前と相違なかった。
「そう言う君達も、本質は変わってないさ」
肩を竦め、僅かに笑う。
そこで、道行く人やコンビニの店員が、不思議そうな瞳をこちらに向けていることに気付く。
傍から見れば、石田は誰もいないところに話しかけているのだ。
「――――行こうか」
石田が先立って歩き始めたので、その後ろに続く。

つれられて来た場所は、見覚えのない公園だった。
二年前に、子供の遊び場が極端に少なくなり家々が建つことに関して、地方で話し合いが催されたらしく、その末作られた公園らしい。
たしかに、最近の子供は家の中でゲームばかりで、外で遊ばない

ことを小学校などは問題視しているが、その遊び場である空き地や公園が潰されてしまう上でのそれは、子供にとって理不尽だ。
さすがにこの早朝、公園で遊んでいる子供は見られない。石田はベンチに腰をおろした。どぎついピンクで彩られたそれは、何となく目障りだった。
ルキアはグルリと公園を見回す。
「どうかしたかい？」
「いや…私は、弓沢児童公園しか知らなかったのでな。…あそこと比べて、少し小さいと思って」
弓沢児童公園は、一護とルキアが出会ってまだ間もない頃、“死神とは何たるか”について、少々揉めたところだった。
「あの公園は、二年ほど前に取り壊されて、今じゃ駐車場になってるよ。数少ない、この辺りの公園だったから、それが原因でここが作られたんだ」
大して変わらない石田と話していると忘れそうになるが、現世でも余念という月日が経っている。その間に、知っていたものはなくなり、また新しいものが作られている。
尸魂界でさえ、四年で隊長や副隊長や席官が変わっているし、世界の安定にも何かしらの変化がある。時間の概念は全く異なるはずなのにこれでは、現世に劇的な変化があるのも、考えてみれば当然のことだった。
「石田…」
恋次が心配そうに声をかける。心なしか、彼はとても疲れているように感じられた。
「――黒崎はどうしてる？」
二人は口を閉じた。
「わざわざ、言いに来てくれたんだろう？　黒崎が死んで、きっと君達が近いうちに来るだろうとは思ってたよ。…で、どうしてるんだ、あのバカは？」
――――違う。

一護のことを、彼が今どうしているのかということを、話しに来たんじゃない。寧ろ、こちらが訊きたいくらいだ。
「……すまぬ…」
とっさに初めに出た言葉は、謝罪だった。
それを耳にして、石田の目が見開かれる。彼はこういった察しがいいのだ。
「…何か、あったのか？」
「いねぇんだよ」
恋次は石田の目を見て話すことができなかった。
足元に視線を落としていると、雀が二、三羽いることに気付く。雀達は、死神の姿が見えるのだろうか。
「…いねぇんだよ。一護の奴。…現世(こっち)で死んでから、アイツの魂魄は行方不明なんだ」
「そんな…！　どういうことなんだ！？」
ベンチから腰を浮かせ、詰め寄る。
恋次は眉間に皺を寄せながら返した。
「知らねぇよ！　俺達は捜す為にこっちに来たんだ！」
「君達の仕事は、現世の魂魄を尸魂界に送ることだろう！？　それでどうしてそんな！」
「うるせぇな！　仕方ねぇだろ、何処にもいねぇもんはいねぇんだから！」
「仕方ないだって！？　そんなの、死神の管理が甘かっ」
「やめろ二人とも！！！！！」
ルキアの怒声が響き、二人はハッとする。雀達が、一気に飛び立っていった。
彼女は鋭く二人を睨みつけ、低く声を発した。
「……騒いでも、一護は見つからぬ。焦るのは皆一緒だ、石田」
暫く瞳を彷徨わせ、小さく、「…すまない」と恋次に謝罪する。
「貴様もだ、恋次。我々は喧嘩をするために現世に来たのではない」
「……そう、だったな…」

恋次も視線を落として、曖昧に頷く。
二人はそろって、やりきれなさそうに歯噛みした。
ルキアとて同じだ。彼女も充分不安だし、焦っている。最悪の事態を考えていないわけでもない。でも、それで一護が見つかるわけではない。ならば冷静になって、少しでも早く見つけることが一番だ。
「…石田。何でもいい。一護が事故に遭った周辺で、何か不自然なことはなかったか？」
ベンチに座りなおし、石田は腕組みをして考え込む。
強めの風が吹き、ブランコが揺れて、キィ、キィと、錆びついた音を立てる。
ふと、石田が顔を上げた。
「そういえば…三日間くらい、虚が少し多めで、僕や井上さん、茶渡くんに襲い掛かってきたことはあったな」
「虚が？」
「ああ。でも、黒崎に近づいた虚はいなかった。あいつはあの戦い以来、霊力をめっきり失っているから、虚の標的にもされなかったんだと思う。それに、多めといって、一日ニ、三匹ペースが四匹程度になっただけだし、そんなに関係があるとは思えない」
手を顎にあてる。
「…いや、何もねぇよりはずっといい。一見関係がなさそうでも、あるかもしれねぇし」
恋次の言葉に、ルキアが頷く。
彼を見つけるには、きっとどんな些細な事も見逃してはならない。
「ありがとう、石田。何か思い出したらまた教えてくれ。我々はもう暫く現世にいるつもりだ」
「わかった。……これからまた、聞き込みかい？」
恋次はガシガシと頭の後ろを掻きながら頷いた。
「まぁな。手がかりもねぇし」
「…じゃあ、井上さんには……」

ルキアは静かに微笑んで見せた。
「案ずるな。私達も、まだ井上のところにまで行く気はない。少なくとも、落ち着くまでは――――」
「いや…逆だよ」
石田の言葉に、彼女は怪訝そうな顔つきになる。
彼は、二人を見上げた。強い顔を、していた。
「今日中に、井上さんに、黒崎のことを教えてあげて欲しい」
隣りに置いていたコンビニ袋を手に、立ち上がる。
クイ、と中指で眼鏡を押し上げた。
「勿論、茶渡君のところにも。…こういうことは、下手に気遣われるよりも、早めに教えてもらったほうが、整理しやすいんだ。死神の君達がどうなのかは、知らないけどね」
少し戸惑ったが、二人は顔を見合わせ、その後、頷いた。

＊　＊　＊

前のように、常時帯刀許可は出ていない。彼女の斬魄刀は部屋の隅に置かれた木箱にしまわれていた。
隊首室に戻ってくると、夜光は木箱の蓋を開けて、自らの斬魄刀を取り出し、こないだ洗ったばかりの赤い紐を鞘の部分に括りつけ、それを襷掛けにした。背に負った斬魄刀は、案外重い。死覇装の襟を正して、隊首羽織の端を一寸つまむと、ピンと引っ張って皺を伸ばす。二本の髪紐を外して、もう一度二つに結い直した。
「…桃？」
襖の向こうから感じた霊圧に、声をかける。
ビクリと驚いたように身体を震わせたが、恐る恐るといった様子でその襖を開いた。
「す、すみません…十二番隊からまわってきた書類を渡そうと思って、来たんですけど…隊長、なんだか忙しそうでしたから…」
五番隊副隊長・雛森桃の隣りには、書類の束があった。

夜光は、ゲッと顔を顰める。
「…いーよ、それ。飛梅で燃やしといて」
「ええ！？　な、何を言ってるんですか！？」
「だって、十二番隊でしょ？　あそこから回ってくる書類、まともなの来たことないじゃん」
「そ、それはっ！　……まぁ…」
本当はフォローをしようと思って声を張り上げただろうに、結局賛同の方へと転換した彼女に、微笑む。
鼻から空気を吸うと、畳の匂いが混じって肺に満ちた。
雛森は、夜光が斬魄刀を携えているのを目にして、眉を顰める。
「……どこか、行かれるんですか？」
「うん、ちょっと現世にね。…不本意だけど」
柄頭を拳で軽く叩き、“あの糞じじい…”ととんでもない悪態をつく。
そんな彼女に雛森は苦笑するが、その顔を俯かせて小さく、
「そう……ですか……」
呟いた。
夜光はニッコリと笑い、言う。
「何？　あたしがいなくならないか、心配？」
雛森がかつて、藍染からとんでもない裏切りを受けたことは、他の隊長達から聞かされていた。だから大事にしてやって欲しいと幾度も言われた。とくに、日番谷には。
「だーいじょうぶ！　あたしの帰るところ、淋しいことにここしかないから」
その言葉に、雛森は半泣きで頷いた。
「じゃあ、行ってくるね」
夜光は隊首室から外へと、瞬歩を使って去った。

No matter how hard I try, I can't be

隊長・副隊長の位になっても結局すごく自由な恋次とルキアなのでした。

学校の友達にも指摘されたのが、「やっぱり吉良と檜佐木って苦労するキャラクターなんだね」ということです。うん、実際この二人が苦労する設定って書きやすい。書きやすい！（黙れ。）

夜光に関しては、未だなんとも…。
一応モデルとしている人物は現実にいますので、キャラが崩壊していくことはないと思いますが、初めはやっぱりちょっとなぁ…。
それとこの長編の初めの方では、あまり好感をもてない人も多いかもしれません。ちゃんと設定あるんですけど。

一護はまだなかなか出てきません。
主人公が出てこないって…（笑）↑
気長にまってやってください…っ！

No matter how hard I try, I can't be

チャドは、机の横に立ててある写真立てを手にとった。
空座第一高等学校の、卒業式の写真である。慣れ親しんだメンバーが、皆笑顔で、涙目で、そこに映っている。中心には、卒業証書の筒を手にもった一護がいる。ただし、彼は迷惑そうだ。隣りの浅野啓吾が、大泣きしながら肩を無理矢理組んでいるからかもしれない。
「……一護…」
先程のルキアと恋次の様子からして、状況が全くもって芳しくないのはすぐに分かった。信じられなかった。でも、二人の顔はそれが事実であることを、否が応でも理解させる。
チャドの口から、吐息がかすかに漏れた。

「はっ……はっ……はっ……」
未だ興奮が冷めないらしく、息を切らせている彼女の目の前に、織姫は冷たい麦茶の入ったコップを置いた。
「たつきちゃん……」
「……ごめん、織姫…そこの、花瓶…割っちゃって……」
先ほどまでそこにあった花瓶は、今現在ゴミ袋の中にある。花は、大きめのマグカップに生けなおした。
有沢竜貴は、下唇を噛み締めて小さく震えた。怒りで震えているのか、恐れか。どちらにしても、彼女はとても辛そうに顔を歪めている。大学の帰りに、一護の突然の死で落ち込んでいるであろう織姫を慰める為、わざわざマンションを訪れたのに、自分がこんなことになってしまうなどと思っていなかった。
来てよかった、と思う反面、来なければよかったとも思う。
つい数分前、ここにルキアと恋次がやってきた。二人はたつきが

いることは予想をしていなかったらしく、初めは意外そうに眉を上げていた。

――――丁度いい…今、茶渡のところにも行ってきたところだ。有沢も聞いてくれるか？

死神のルキアと面と向かって話すのは二度目だった。一度目は、藍染との戦いの後、一護が長く眠っていた間にクロサキ医院を織姫と訪れたときに、少し会話した。そのとき、黒崎一護の今までのことを全て聞いた。だから、死神が何なのか、自分達がしょっちゅう町中で目にするバケモノは一体何なのか、全て理解した。無論、織姫や石田、チャドが普通の人間でないことも。

あのときのルキアは淋しそうだったが、どこか穏やかだった。すぐにその感情を汲み取ることができた。

しかし、今回はその真逆。とても深刻そうなものであると予期し、織姫と共に二人の話を聞くことにした。

そして、知った。死した一護の魂魄が行方不明である、と。その理由は未だ分からず、最悪虚に喰われている可能性もあると。

その言葉を聞いたとき、たつきは思わずルキアの左頬を力強く殴ってしまった。聞いているのが、堪えられなくなったのだ。

――――たつきちゃんっ！！

――――ルキア！！

派手に吹っ飛んだ彼女は、その後ろにあった花瓶にぶつかり、そのときにそれは粉々になった。あとは、この仕打ちに対し怒鳴ろうとした恋次を制し、「すまぬ」とだけ謝罪の言葉を述べて、二人はいなくなってしまった。本当は、もっと話をするために、わざわざ織姫が大学から帰ってくる、こんな遅い時間を狙って来たのだろうが、仕方ないことだった。

「あいつに、限って、そんなこと、あるわけ、ない…」
歯を食いしばり、拳を力強く握り締めた。
肩を震わして、テーブルを力強く殴りつけた。大きく揺れ、コップから麦茶が零れる。
「一護っ……！！」
織姫も俯いた。無意識のうちに、手が、震えた。

空座第一高等学校の屋上で、ルキアと恋次はそれぞれ少し離れたところに座っていた。
恋次が心配そうに彼女を見やる。ルキアの左頬は、僅かに赤くなっていた。空手のインターハイに出場し、準優勝にまでなった（本人曰く、準決勝の前にあった事故で片手を怪我していなければ優勝していた）記録のある女からの拳骨は、恐ろしく痛いものだろう。それでも彼女が涙目にすらならないのは、肉体的よりも精神的な痛みが今は強すぎるからだ。
「……また、明日、な。もう一回、井上のとこに行こうぜ？　結局、今の状況を俺達が教えるだけで、情報を集められなかったし…有沢、だっけか？　あいつも、多分今度は大人しく聞いてくれるだろ」
明るく声を出そうと努めるが、自分でも呆れるほど暗い声であることはよく分かっている。ルキアは彼の気遣いに気付いているのだろう、「そうだな」と辛そうに微笑んだ。
恋次はルキアに歩み寄り、しゃがむ。
「っていうか、まじで赤けぇな…大丈夫かよ？」
「当たり前だ。人間ごときの力に負けるものか」
と言いつつ、彼女は少々涙目だ。今更になって痛み出したのだろうか。
そのとき。
「ルキア副隊長、恋次隊長」
二人は思いもよらぬ声に、立ち上がり、振り向く。

彼女は、月を背に、大きな桜の木の上に立っていた。
肩につくくらいの茶髪を二つに結っている死神。月光を反射する、白い羽織。
恋次は顔を顰めた。
「夜光……！」
彼女の青眼が、二人を見据える。
「用件は言わなくても分かるよね？」
「帰還命令、だろ？」
「今のところは」
厳しい表情でこちらを見ているルキアに気付き、溜息を吐く。
「ルキア副隊長もそう。修兵が、困ってた」
突然自分の所属する隊の隊長の名を出され、ルキアは少し戸惑っていた。
「あたしもさ、正直こういうこと任されるの嫌なんだよね。必死に昔の仲間を捜してる二人をつれて帰れ、って」
すると、長く息を吐き出す。
改めて開かれた夜光の瞳は、真剣みに帯びている。
恋次は引き攣った笑みを彼女に向けた。
「…俺とルキアは見つからなかったって、報告してくれねぇか？」
「冗談。護廷大命、それも第一級厳令だよ？　このイミ、分からないわけじゃないでしょ？」
じり、と恋次とルキアは、厳しい顔つきのまま僅かに後ずさった。どうやら、大人しく尸魂界へ戻る気は毛頭ないらしい。
手を腰にあて、呆れたように首を横に振った。
普段は夜光も、恋次とルキアのことを“隊長”“副隊長”などと余所余所しく呼ばない。自分が隊長になってから、この二人にはすぐに馴染んだ。一護のことも、稀に話で聞いた。だが、到底信じることはできなかった。人間が死神になって、隊長以上の力をもつなど。
自分で見たものしか信じられない、それが夜光だ。ただ、ルキア

と恋次、この二人それぞれのことは信じられる。普段、どのような者なのか見てきているから。故に、できるなら、穏便に済ませたかったのだ。
「……じゃあ、もう仕方ないなぁ…」
鞘から斬魄刀を引き抜く。
恋次の頬を、冷たい汗が伝った。
「…夜光…！　分かってくれ！」
彼の後ろから身を乗り出し、ルキアも叫んだ。
「私からもお願いします！　夜光殿、どうか見逃してはくれませぬか！？」
夜光は無表情で、その言葉を聞く。
「私達は、あやつを…！　黒崎一護を見つけねばならないのです！」
「見つけたら、処刑でも何でも受ける！　そう誓う！　だから、ここは退いてくれ！　頼む！！」
必死になって二人は叫んだが、そこで夜光は、斬魄刀を横にゆっくりと持ち上げた。
「夜光……殿…？」
「うん。二人の決意はよく分かった」
二人がホッと息をつくが、彼女の言葉は続いた。
「でも、それ言う相手……あたしじゃなくて、総隊長にしたら？」
そして、桜の木の太い枝を蹴ると、猛スピードで二人に迫った。
恋次とルキアは慌てて左右にそれぞれ避け、抜刀する。夜光が追走し、斬魄刀を振り下ろした。それを、恋次は斬魄刀・蛇尾丸で受け止めた。刀と刀がぶつかり合い、火花が散る。
「くっ……夜光…！」
「そんな目しても、ダメなもんはダメだよ。さっさと戻って。しっかり話せば、総隊長もちょっとは話を聞いてくださるかもだし？」
聞いてくれるわけがない。
死神や魂魄の一つ二つのために、隊で重要となる隊長副隊長の自由行動を許すような人ではない。それに、護廷十三隊を統一する者

として、そのような人であるべきでもない。
「はあああぁぁあ！！！」
横合いからルキアが斬魄刀・袖白雪で夜光に斬りかかった。夜光は素早く蛇尾丸をはじき返すと、袖白雪と自らの斬魄刀をかち合わせる。
「どういうつもり？　ルキア」
“どういうつもり？”。
その言葉には、多くの意味があった。ルキアがここまで頑張って、四年も前に世話になった人間を捜す必要があるのか。そして、他隊の隊長に斬りかかることの重さを知っていながら、どうして斬りかかってきたのか。
「申し訳ありません、夜光殿…！　ですが、私達は…」
「帰れねぇんだよ！」
恋次が背後から蛇尾丸を振るう。夜光はそれを瞬歩でかわした。
ここまで頑なに拒否されるとは、思っていなかった。それだけに残念である。本当は、二人を連れ戻すのに斬魄刀など不要とさえ思っていたのだが――――。
「…もー…めんどくさい……」
斬魄刀の切っ先を二人に向け、瞳を細める。
「――――『希(のぞ)め、』……」
彼女の斬魄刀が、パープルに光り輝く。二人は身構えた。
「『霜天に坐せ！“氷輪丸”』っ！！！」
突如、夜空に響き渡る声。
驚いて構えをとき、三人が天を仰いだ。遥か上空から、身体をうねらせながら氷の飛龍がこちらに向かってくる。
「恋次！！」
ルキアが叫ぶと、恋次は我に返って夜光との間合いをとった。丁度その間に、龍が突っ込む。瞬間的にそれは形を失い、高校の屋上が白い冷気に満ちた。互いの視界が遮られ、これを機に二人は瞬歩でその場から離れる。

冷気の中、二人の霊圧が瞬時に離れたことに気付く。白い冷気にまぎれて逃げ出した恋次、ルキアそれぞれの霊圧をとっさに探ったが、あの二人もそこまで迂闊ではない。どちらも完全に閉じており、どこへ逃げたかを特定するには無理があった。

夜光は僅かに歯軋りをすると、斬魄刀を鞘に収めた。チン、と音がすると同時に、日番谷が隣りに現れる。

「逃がしたか……」

「……日番谷…」

彼は氷輪丸を軽く振るうと、鞘に収める。

首を回して辺りを観察するのが、恋次もルキアも、姿を認められなかった。

「悪りぃな、瑠璃谷。俺がもっと狙いを定めて放ってりゃ、捕らえられた」

彼女の方を見ずに侘び、息を吐く。周辺が氷で覆われているので、それは白く塗られた。

日番谷のおろされた前髪が、夜風に吹かれて揺れる。

「……行くぜ。尸魂(むこう)界に戻って、もう一度出直す」

足を前に進め始めた瞬間、彼の肩を掴んで無理矢理振り向かせた。とくに何の感情も抱かず、日番谷は「何だ」と尋ねる。

夜光は眉間に皺を寄せたまま、言った。

「…何したか、分かってるわけ…?」

「取り逃がしたんだろ」

ふざけんな、と呟いてから、彼の翡翠の瞳を睨み付けた。

「……わざと外して、わざと逃げ道を作ったでしょ」

語気を強め、共に肩を掴む手にも力を込めた。

彼は無表情のまま、その手を払い除ける。

「さあな」

夜光から視線を外し、改めて斬魄刀を抜いた。

穿界門を、開いた。

＊　＊　＊

廃ビルの中から天を仰ぎ、漸く安堵の表情を浮かべた。
「帰ったみてぇだぜ」
「そうか」
こちらも肩から力を抜いた。
確信があったとはいえ、尸魂界からの命令が来るのは予想より遥かに早かった。これだと、あまり時間をかけている余裕はないかもしれない。
「……恋次、どうする？」
「どうする・ったって…」
困ったように手を額にやる。
「仮に、一護が戻ってきたらと思って、見つけやすいように霊圧を少し流してたが…こうなると、そうもいかねぇし…」
何せ今さっき、夜光と日番谷の二人が自分達を連れ戻しに来たのだ。彼等には、できるなら自分達の居場所を教えたくはない。
「だが、いつまでもここに隠れているわけにもいかぬだろう？」
「そうなんだよなぁ…」
腕組みをし、汚れた壁によりかかった。
だが、今出て行くのはあまりにも危険な気がした。先ほども、てっきり夜光一人だと思えば、であったのだ。実際は、あの二人の他にも誰かが潜んでいる可能性もある。浦原商店へ行ってみるのも一つの手だが、尸魂界がそちらにも何か手を回していたらと思うと、容易には近づけなかった。
月光に照らされた廃ビルの中は、不気味な色でコンクリートを染めている。
「……おかしいと、思わぬか」
「あ？　何が」
手元を見つめながら、
「手がかりが無いに等しいことが、だ」

と言った。
それに対し、恋次は怪訝そうな顔をする。
「そりゃあ…四年経ってて、多少の接点はあってもそれぞれ疎遠になってたからだろ？　だから一護の身の回りの事情を知る奴は少ねぇし、突然の事故だったんだから、ほかに気を配る余裕もねぇ」
肩を竦めた。
「ありそうなことじゃねぇか」
「だとしてもだ」
ルキアは立ち上がり、恋次に歩み寄った。
「手がかりが無さ過ぎる。不自然なほどにな」
そんなこと言われてもな…。
恋次は腕組みをし、また月を見上げた。こちらの気も知らずに、それは美しく輝いていて、無性に腹が立った。
「じゃー…明日、井上んとこ行く前に、クロサキ医院行ってみるか？　あいつの親父と、妹に話を聞く」
「…考えた、それも。だが…」
妹二人など、自分達のせいで兄は死んだと思っている。その彼女等に、一護のことを質問するのは酷な気がした。
「……なんかよォ、こうなると、人の情って、邪魔だよな」
恋次の言葉に、ルキアも「全くだ」と頷くしか、なかった。

No matter how hard I try, I can't be

インハイに出た女の子の拳骨って痛いでしょうね。
多分ルキアの歯とか余裕で折れたんじゃないかっていう。
いやそんなこと書いたらなんかもうギャグになっちゃうので赤く腫れるってだけにしましたが。

やはり隊長・副隊長ということだけあって、尸魂界もあまりのんびりはしてくれません、残念ながら。夜光が派遣されたのにはきっと何かしら理由があるんだと思います。

夜光は冷たいですけど、これは一護を知らないからこそ、なんですよね、多分。
自分でも分からないけど、キャラクターって個性があるのでオリキャラでも実は動かしにくかったりします。頑張りたいと思います…！

No matter how hard I try, I can't be

翌日の昼。太陽が一番高いところにある時間帯に、織姫は自宅のマンションへと戻ってきた。階段を上がりきったところで動きが止まったのは、まさか昨日の今日で来るとは思っていなかったからだろう。４０３号室の前に、恋次が胡坐をかいて座っていた。

彼はこちらに気付くと、顔だけ向けて僅かに口角を吊り上げた。

鞄の中をあさり、大学に提出するものであるレポートをテーブルの上に出す。

恋次は部屋の中を見回してから、腰帯から斬魄刀を抜き取って脇に置き、座った。

「帰ってくんのは、昨日みてぇに夜だと思ってたがな」

何となくレポートを見ると、そこに“カウンセリング”という文字が印刷されているのが分かった。

聞いた事もない言葉に、恋次は眉を顰めて首を傾げる。

「あはは…今日は、午前中しか授業いれてないの」

「へ～…その“だいがく”ってのは、人間は行く奴が多いって聞いたが…そんないい加減でいいんだな」

真央霊術院では、時々やってくる長期休み以外は朝から夜まで授業だった。現世学や魂魄の輪廻といったものを初めとする知識から、剣術・白打・鬼道の戦闘術と、死神になるためにはやることが呆れるほど沢山ある。

「じゃあ、午後はどうするんだ？」

携帯を取り出して、カチカチと操作する。

「バイトだよ！　高校のときにパン屋行ってたんだけど、それを継続してるの」

「……ばい、と…？」

携帯をパタンと閉じて、テーブルの上に置く。
織姫は苦笑した。
「えーっと…お金を貰うために、とりあえず仮で店員にしてもらってるの」
「へぇ。じゃ、あんまりのんびりしてっと、時間になっちまうな」
レポートの束をトントンと揃え、クリップで端を止める。それをクリアファイルに入れて、鞄の中に戻して顔を上げた。
「それなら、大丈夫。今、店長さんにメールしたから！」
「……は？」
よいしょ、と正座し直して、テーブルを挟んで恋次を真っ直ぐに見つめた。
「今日、お休みします・って」
織姫の雰囲気がさっきまでとは打って変わって、真剣そのものであることに気付く。
恋次も座りなおした。
「……昨日はごめんね」
「俺じゃなくて、ルキアに言えよ」
殴られたのは、俺じゃあなくてあいつだ。
最もな発言に、少し笑った。考えてみれば、たしかにそうである。
「…それで、朽木さんは？」
「あいつは、クロサキ医院に行った」
家族から、一護の話を聞くために、ルキアは一人でクロサキ医院へと向かった。昨日と同様にまた共に行動しようかとも思ったのだが、現世で死神二人がうろつくのはかなり目立つ。もう尸魂界でも、二人の行動に関しては問題視されているとみて、間違いないだろう。そうすると、現世ではあまり目立つ行動は控え、かつあまり動かないようにするしかなかった。
本当はもっと派手に動き回って情報を収集したいのだが、尸魂界に連れ戻されては元も子もない。だから、恋次は帰りが遅いだろうと思われた織姫の家に早くから来ていた。

（俺が行くと、親父の方はともかく、妹達から無理矢理一護のことを聞き出しそうだから自分が行くっつってもなぁ…）

――――貴様のその顔で、悲しみに暮れている一護の妹のところへ行くつもりか？

今更だが、あんまりな言葉ではないだろうか。全てを否定された気分である。というか、多分、全てを否定された。

ルキアも辛いくせに、彼女は自分が一番辛くないと考えているところが、強がりな彼女の欠点だ。

クロサキ医院、と聞いて、織姫も表情を曇らせた。たしか、一護が死んで割とすぐそこに訪れたのは、石田とチャドと、そして織姫だ。“自分達のせいで兄が死んだ”ことを聞いたのは彼等だ。一番悲惨な状態の双子の妹を目にしているだけあって、心配なのだろう。

「酷かもしれねぇが、俺達にも時間がない」

眉を顰める織姫から一瞬視線を外し、息を吸う。

「…一護のことは、昨日言ったとおりだ。あいつは今、どこにもいねぇ」

「…うん」

「それで俺達が聞きてぇのは、一護が死んだ日の周辺で、何か妙なこととかなかったかだ」

「妙なこと…？」

瞳を彷徨わせ、一護が死んだ頃の記憶を必死に手繰り寄せる。そういえば、高校時代の皆で集まっておしゃべりをしたが、それはもっと前の話し。織姫と一護が会ったのは、二、三週間も前だ。大学の方向が正反対で、会うような機会がなかった。気が向いたら遊びに行ってみて、いれば話すし、いなければ諦めて帰った。

ふと、虚のことが頭に浮かぶ。丁度一護が死ぬ数日前から、少し襲われる回数が増えていたような…。だが、いや前からあんなものかと思いなおし、結局振り出しに戻る。

「…井上、無理しなくていいぞ…？」
恋次の言葉に、泣きそうになりつつ俯く。
「うぅ……ごめんね…」
そこで、テーブルの上に無造作に置いた携帯が目に入る。そして、ハッとした。
「携帯！」
「は！？」
「うん！　黒崎くんが…っ…」
まだ、言うのは抵抗があるようだ。
「…死んだとき、か？」
「あ、う、うん、そう……ごめんね…」
「気にすんな。それで？」
「そのときに、携帯が数分だったけど、通じないときがあったの」
「本当か！？」
携帯が通じない。それは、今までの情報には一切ない、新しいものだった。情報を聞き出すことで精一杯の彼等にとって、どんなものでも新しい情報が入ってくると気持ちが高ぶる。
「たつきちゃんと話してるときだったから、間違いないと思う」
これはあとでたつきにも確認したほうが良さそうだな、と一人頷いて、それから寒気がした。何せ昨日、彼女の力の強さを目の当たりにしているのだ。死神の恋次は、“いんたーはい”が一体どういうものなのか知らないが、少なくともルキアの吹っ飛び方を見れば、相当痛いのは言うまでもなかった。
「阿散井くん、こういうのはどうかな？」
「何だ？」
「一回、石田くんと茶渡くんも呼んで、もう一度話し合うの。何か出てくるかもしれないよ！」
恋次は、暫し言葉を失う。たしかに、それならきっと思い出す事もあるだろうし、全員の話を整理しやすいからいい案ではある。どうせルキアとも夜には例の廃ビルで合流する予定だったから、そこ

から最短距離でここへ来ればいい。
しかし、彼女は大丈夫なのだろうか。ずっと一護の話をするのは、辛いだろうに。
「…いいのか？」
「うん！　じゃあ、二人にはあとでメールするから、朽木さんと夜に来てよ！　早速今から、買出しに行ってくるから！」
最後に、妙な言葉が続いたことに気付く。
「買出しぃ？　なんでまた」
「も～、何言ってるの？　みんなで集まったときこそ、お鍋でしょ！」
それを聞いて、恋次は顔を歪ませた。
たしか日番谷と乱菊が彼女の家に泊まったとき、乱菊は美味しそうに織姫の作った手料理を堪能したらしいのだが、哀れなるその上司は、最初に口にして以来、クロサキ医院にご飯時だけ転がり込んでいた。夏梨がしばしば誘っていたし、遊子も彼が来るのを楽しみにしていたので、あまり不自然には思われなかったものの、その真実は乱菊と織姫、夏梨、遊子以外の全員が知っている。
彼女の鍋、ときくと、とんでもなくグロテスクなものを想像してしまう。実物もきっと、当たらずとも遠からずだ。
「な……鍋…」
思わず呟くと、織姫は満面の笑顔で頷いた。
「で…でもよ、あの…みんな、好みとか、あるんじゃ…」
だから食事はなくていいのではないか。
恋次は必死にそれを伝えようとするのが、「大丈夫！」という言葉が飛んでくる。
「闇鍋だから！」
危険度倍増。
「ようかんとか～、ドーナッツとか～、卵焼きとか入れるの！」
何をどうしたら、そんなものを入れようと思うのか。
今から考えるだけで、胃が痛いような気がしてくる。

「あ！　鯛焼きも入れてみたらどうかな！？」

プツン。

「鯛焼きは鍋に入れるもんじゃねぇエエェェェ！！！！！」

鯛焼きファンとして、一思いに叫んだのだった。

ルキアは、夏梨と共に一護の部屋にいた。双子揃って霊力が高まっていたので、遊子も死神である彼女のことは見えるのだが、堪えられなくなって自分の部屋へと戻ってしまったのだ。父親の一心は、どういうわけか在宅していなかった。

「…すまぬ。あやつのことがあって、まだ日が浅いのに……」

「いいよ、別に。ルキアちゃんは一兄の恩人だし」

そう言う彼女の声も涙で濡れていて、瞳は充血していた。しかし、どんなに辛くても話を聞く覚悟があるところは、兄とそっくりだ。

「それで、一兄の魂の行方、まだ掴めてないの？」

「ああ…手がかりもなくてな。…事故に遭った日、何か違和感があったりしなかったか？」

「違和感、か…」

あの日のことを思い起こす。

日曜日で、久しぶりに家族で何処かに行こうということになった。だが、急患が入ってきたので、一心は来れなくなった。いつもなら手伝う為に、クロサキ医院へと戻るのだが、一心はついでの仕事もあるから、三人で行って来いと言ってくれたのだ。

――――そして…。

「っ…」

哀しげに顔をゆがめた夏梨を見て、ルキアは慌てた。

「す…すまぬ！　やはり、早すぎたな…」

小さく頷く。

ゆっくりと立ち上がると、ふらついた様子でルキアに近寄り、抱きついた。
「ひっ……うっ……うぅっ……！」
しゃくりあげる夏梨。小さい背を、ルキアはあやすように叩いてやった。
彼女も、今ではもう高校生だ。だが、兄と違い、何だかとても脆い。
（……莫迦者が……）
泣きじゃくる夏梨を抱きしめてやりながらも、ルキアも泣きそうになっていた。
殺しても死にそうにないのに。そういう人間なのに。あんなに強かったのに。
（…莫迦者が……！）
まだ、人間の一生としても、時間はあったはずなのに。
（皆を残して…死におって…！）
責めても仕方がないのだけれど、責めずにはいられなかった。
いくら考えても、彼はまだ、死ぬべきではなかったから。
黒崎一護は、まだこの世界で、必要とされているのを痛感したから。
自分が壊れてしまわないように、夏梨のことを、もっと強く抱き締めた。

＊　＊　＊

一番隊隊首会場。山本元柳斎重國総隊長の正面に、二人の死神がいた。女性の、少々長い茶髪を二つ結びにした五番隊隊長――――瑠璃谷夜光と、男性の、銀髪で、四年前とは異なり前髪をおろした十番隊隊長――――日番谷冬獅郎である。ちなみに、本日は隊首会ではなく、彼等二人が個人的に元柳斎から呼び出しを受けたのだ。
「では、阿散井恋次三番隊隊長、朽木ルキア九番隊副隊長は、抵抗

し刀も抜いた、と？」
「はい。尸魂界に戻る気はなさそうで、恋次隊長は処刑も覚悟しているとのことでした」
夜光の言葉を聞き、元柳斎は唸る。日番谷に目を向けた。
「瑠璃谷の応援へ向かったと聞いたが、五番隊隊長が言っているのは真か」
「間違いないですね」
淡々とした物言いに、夜光は激昂しそうになるのを何とか堪えた。
その代わり、彼女は肩を竦める。
「日番谷隊長のおかげで、取り逃がしたんですけどね」
「ぬ…？」
一度視線を外されていたが、こちらに改めて向けられた。日番谷は一切動じることなく、こちらもまた肩を竦めてみせた。
「俺のミスです。申し訳ありません」
「おぬしが失態を犯すとは。強く反抗されたとみてよいのかな？」
頭を振った。
「逃げ足が速かったんです。俺も焦ることはあります」
夜光が睨んできていることに気付いてはいたが、彼は気付かない振りをした。
「…しかし……隊長、副隊長が揃ってこのような身勝手な行動をすることは許しがたい」
「総隊長、もう一度あたしに行かせてください」
間髪入れず言った。
「それなら、俺も」
「あたし一人で、行ってきます」
日番谷が夜光を見ると、彼女もこちらをじっと見ていた。
目が合ったのを確認すると、夜光は改めて口を開く。
「日番谷隊長は、十番隊の隊務で忙しいと思いますので」
ここで下手に反論すると、後で立場が悪くなる――――。
それを悟った日番谷は、腕組みをして目を閉じる。

「じゃ、その言葉に甘えて、今回はお前に任せるぜ、瑠璃谷」
ニッと笑う。
元柳斎は二人を見比べ、静かに頷いた。
「では、阿散井恋次三番隊隊長及び朽木ルキア九番隊副隊長の帰還を、瑠璃谷夜光五番隊隊長より要請するものとする！」
コォン、と、隊首会場の中に、元柳斎の叩いた杖の音が響いた。

No matter how hard I try, I can't be

織姫の鍋はきっと凄いと思います。
アニメの「ちょこのみ焼き」は激しく気になった。
でもあれは多分望実が普通に食べていたので大丈夫。

鯛焼き好き設定の恋次ですけど、アニメではあまり触れられませんよね。原作でも。「カラブリ＋」とかファンブックで取り上げられる程度です。
でも個人的に、鯛焼きにあつくなる恋次が大好きです（笑）

No matter how hard I try, I can't be

織姫の鼻歌に、ぐつぐつという音が被る。これ以上増えなくてもいいのに、彼女はキッチンでまだ何かをやっているらしい。

テーブルの周りを囲むようにして座っているのは、石田、チャド、恋次、ルキアの四人だ。汗を流し真っ青になっているのは、四人全員が該当する。

「……阿散井…」

石田に睨まれ、恋次は鍋から目をそらさず答えた。

「何だよ…？」

「一体何があってこうなった…？」

無言である。

彼等から怒りや恨みといった思念が込められた視線をぶつけられたが、恋次とて被害者の一人だ。

ルキアが鍋を見つつ、ごくりと唾を飲み込んだ。

「…何を入れたら、この色になるのだ…？」

泡を浮かばせては消えていくその鍋の中は、面白いほどに紫一色だ。ルキアは紫といえば、葡萄か茄子かしか思いつかないのだが、いずれの色とも異なっている。

“毒々しい”というより、鍋の中身そのものが最早“毒”だ。

「完全に、罰ゲームだな…」

チャドも冷や汗を流している。鉄骨などを受け止めても無傷であったりするアイアンボディの彼といえども、内側からの攻撃をも跳ね返せるとは思えなかった。

本当は、一護の情報をもっていそうな（もっていなくとも彼の本質を知る）者は、呼んでしまおうと考えていた。だが、啓吾にせよ、たつきにせよ、水色にせよ、皆は断固拒否したのだ。

石田達も拒否したかったのだが、彼等は織姫直々の招待である。行かないわけにもいかなかった。

「おまたせ～！」
コンロの火を消し、笑顔でテーブルの方へ戻ってくる織姫。…ちなみに、謎のメニューを持って、である。
「えーと……」
ただでさえ死ぬ確率は高いというのに、彼女の持つ器の中は、辛うじてアイスであるだろうということが分かった。そもそも、何故アイスを作るのに火を用いるのかが、理解できない。
「あ、これ？　デザート！　でも冷蔵庫にスペースがないから、ちょっとそこに置かせてね！」
おぼんごと絨毯の上に置く。凄まじい異臭に、彼等は顔を顰めた。
織姫は石田の隣りに座ると、何だか突然無性に懐かしくなって、頬を緩める。
「なんか、四年前みたいだね！」
お別れをしたときのルキアは、とても淋しそうだった。もう会えないのだろう、と無条件にも石田達は思っていた。だから、死神の二人をまたまじえて、こうして話せる今が、実は信じられなかった。
「…そう、だな」
ルキアが悲しそうに笑う。
チャドとルキアの間には、丁度一人が入れそうな、不自然な空きがあった。
「……次のときは、死神一人が増えての、鍋だな」
石田の科白に、皆が頷く。そうであって欲しい。
もう人間としての彼が死んでしまった事実は覆らない。でも、魂魄はまだ消滅したか健在なのか、謎だ。それなら、彼のことだからきっと健在、そして死神になるに決まっている。死神代行ではなく、本物の死神だ。
「あいつだけ鍋を食べに来ないのは、不公平だしね」
「うん、そうだね！！」
即答して笑う織姫だが、彼女は石田の言葉の、本当の意味を理解していない。

理解している側である恋次は一人、付け足された言葉に関して、恐ろしい奴だなと目を細めた。
なんとしてでも。なんとしてでも、一護を見つけなければ。
考えて、全員の中の空気が張り詰める。
織姫はなんとか場を和ませようと思ったのだろう、パン、と手と手を合わせ、景気よく音を鳴らした。
「じゃあ、そろそろ食べよっか！」
その言葉を聞いた瞬間、全員の表情が凍りつき、別の意味で、空気が張り詰めた。
「あれ…？　どーしたの、みんな？」
「え！？　い、いや、なんでもないよ、井上さん」
石田が引き攣った笑みを浮かべると、織姫はその彼の器をとった。
「はい、石田君！」
たっぷりと謎の具をとり、器を石田に返す。彼の顔色は真っ青になるばかりだ。器にとるときだけでも、鍋から謎の物体がいくつか顔を見せたので、彼等の恐怖心はいっそう大きくなった。
無論彼だけでは留まらず、織姫はご丁寧にも全員がその鍋の中身をよそってくれた。もうここまできたら、観念して食べるしか道はないのか。
（夕飯でこんなことになるなんてな…）
チャドが現世に未練がないかを考え始める辺り、織姫の料理の破壊力は絶大なのだということが分かる。しかし、とうの彼女には全く悪気がない（寧ろ好意的な）行動であるので、余計に始末が悪かった。
「――――？」
ルキアが何かを感じ、顔を上げる。他の彼等も、不思議そうに天井を見上げた。
霊圧…？

そして次の瞬間、皆が目を見開く。
何か不思議なものは、たしかにある。しかし、この霊圧は忘れるはずのない人物のものだ。
今まさに箸に手をつけようとしていた誰もが、素早く立ち上がる。
「恋次っ！！」
隣りに置いていた斬魄刀を乱暴に掴み、ルキアがベランダへと駆ける。
確認しなくては、今すぐに。この霊圧が、また何処へと消え去ってしまう前に。
「先行くぜ！」
石田達に振り返らず告げ、彼もまたベランダに出る。
二人は、弾丸の如くそこから飛び出した。
「俺達も…」
チャドが言うなり、玄関へと走り出す。
その後ろに、織姫と石田も続いた。

空座町北部の上空に、薄汚れたマントを身に纏い、フードを被った男と、同様の姿をした少年がいた。少年は町中に下りて行きたそうに男を見上げるが、彼はそれをよしとはしない。頬を膨らます少年を、男は笑って撫でた。
しかし、その表情は急変した。何かが、こちらに物凄い勢いで近づいてきていることに気付いたのだ。
少年が不安げに、男にしがみついた。
すると、瞬歩でそこに現れたのは、死神――――ルキアと恋次だった。
男は訝しげに眉を顰める。
対し、ルキアと恋次は二人揃って表情をゆるめた。見慣れない姿をしているが、間違いなかった。フードの下からチラ、と見えるオレンジ色の髪。こちらを見ているブラウンの瞳。そして、馴染んだ

彼の霊圧が、この男を、黒崎一護であると証明していた。
聞きたいことは山ほどあったが、彼の魂魄が消滅していなかったことにとにかく安堵する。深く息を吐き出し、ルキアは微笑んだ。
「無事……だったのだな、一護……」
一歩、近づく。
すると、一護にしがみついていた少年が、ビクリと身体を震わして彼の後ろに隠れた。
「……大丈夫だ。な？」
優しげに言葉をかけてやる。
コクリと頷く幼年は、ルキアと恋次を見て明らかに怯えていた。
「何だァ、そいつ？　一護の知り合いか？」
恋次も彼が見つかって嬉しいのだろう。最近とはまるで違い、覇気のある声をしていた。
問いかけに、一護は二人に向き直った。
こちらを険しい顔つきで、睨み付ける。
「テメェらこそ――――何者だ！？」

――――え？

ルキアと恋次は黙り、呆然とする。
今、彼は、何と言った？
「答えろ！」
一護そのものだった。
少年を護ろうと、心の底から思っている。彼のために戦おうと考えている。敵を必ず退けようと決意している。
…しかし。
一体、誰が予想しただろうか。その敵の対象が、仲間である自分達とされるなど。
そこで、遥か下ではあるけども、石田達が走ってきた。幸い織姫のマンションからそこまで遠くではなかったので、人間の足でも早

々に追いつくことができたらしい。
彼等も瞬時に空に立つ男が一護だと気付いた。しかし、それにしても様子がおかしいと思い、眉を顰める。
「ど…どうしたのだ、一護？」
冗談だと思い、もう一度、呼びかける。
一護は警戒心を強め、
「さっきから“イチゴ、イチゴ”って……それ、俺のことか？」
そう、訊く。
信じられない、の一言に尽きた。一護はその名でさえ、“それが自分のことか”と言ってきたのだ。こちらには、敵意を向けたまま。
「誰と勘違いしてるかなんて知らねぇが…」
――――勘違いなんかではない。
恋次の喉は、カラカラに渇いていた。
「俺の名は、ナリア…」
彼はフードを外した。
皆が目を見開く。オレンジ色の髪、ブラウンの瞳、眉間に相変わらず刻まれた皺。そこまでは、以前の彼だった。
そして、一護の右目から頬にかけてまでを覆った、虚の仮面が露わになった。
「ナリア＝ユペ＝モントーラだ」
思わず、恋次は勢いよく彼に掴みかかろうとした。
当然だろう。
皆が今、目にした一護の姿。それは、四年前に呆れるほど沢山目にした、破面そのものだったのだから。
しかし、カチャリ、という独特の音を聞いて、恋次の動きは止まった。
一護が、腰にさした斬魄刀の柄に、手をかけていることに気付いたのだ。
「近づくな。近づけば斬る」
少年を、護ろうとしている…。

その姿を見、ルキアは震えた唇で言葉を紡いだ。
「貴様……斬月は…どうしたのだ…」
眉間の皺を、一層深く刻む。
「…何のことだ？」
あまりのことに、彼等は息を呑んだ。
そのとき、ずっと一護の背後に隠れていた少年が、彼の手を引っ張る。
「ナリア兄ちゃん…」
怖いよ…。
少年の瞳が、自分にそう訴えていた。あまりここに長居するのは、よくない。
「分かってる…行くぞ、ユウ」
一護が何も無い空間に、そっと人差し指を触れた。すると、そこに裂け目が生み出され、現世以外の何処かへと通じる扉を開いた。かつて破面のウルキオラ・シファーが現世から虚圏へと退散する際に用いた、解空（デスコレール）である。
ユウと呼ばれた少年は、その裂け目に入り込む。一護も続いて入り込もうとし――――肩を、掴まれた。
「っ！」
「行かせねぇ！」
恋次は強く、彼の肩を掴んだ。絶対に行かせない、その思いから、自然と力は強まる。
「ナリア兄ちゃん！」
ユウが泣きそうな声で叫ぶ。
「ユウ、先に帰れ！　俺もすぐ行く！」
「……っ…わかった！」
一歩後ろに下がったのを確認して、一護は手を強く振った。すると、そこにあった裂け目は素早く消え去り、ユウの姿は見えなくなった。
静寂が訪れ、一護は恋次の手を払い除けもせず、ポツリと言った。

「……離せ。死神」
「……断る」
彼は振り向き、心底鬱陶しそうに恋次達を睨んだ。
「じゃあ、どうすんだ？　テメェらから、どういうわけか殺気も敵意も感じねぇ。…何のために俺を引き止めるんだ」
ギリ、と奥歯を食いしばった。
目を吊り上げ、睨んでくる彼の瞳を真正面から受け止める。
「決まってんだろ…！　何処の世界に、仲間が敵の下に行くのを止めねぇ奴がいんだよ…一護！！！」
“イチゴ”…。
コイツは、またその意味の分からない名で俺を呼ぶ。
「…もっかい、言う。離せ」
語気を強めた。しかし、彼もまた、同じように返す。
「断る！　何度訊かれてもな！！！」
ふっ、と。一護が顔を伏せた。
「……そうか」
彼は、顔を上げると同時に斬魄刀を抜いた。それは綺麗な軌跡を描き、恋次の肩から腰辺りまでを、鮮やかなまでに無駄のない動きで傷つけた。
「恋次っ！！！」
一瞬にして斬りつけられた恋次は、血しぶきと共に落下していく。
“三天結盾”！」
この状況で、よくこの判断ができたものだ。織姫のヘアピンから、火無菊、梅厳、リリイが飛び出し、三天結盾を張って、落下してきた恋次を受け止めた。
「…！」
改めて前を向くと、一護がルキアに斬魄刀の切っ先を向けていた。以前の一護なら、有り得ない行動だ。
「どうしても俺を引き止めるってんなら、俺はお前等を斬っていくぜ」

敵を見る目――――。
ルキアは辛そうに顔を伏せた。
「お前は、もう…私達の仲間ではないのか…？」
「“もう”って…俺は初めから、テメェらの仲間じゃねーぞ？」
当たり前のように、言い放った。
――――違う。
一護は、仲間だ。仲間なのに。あんなにたくさん、共に戦ってきた。だけど。
「……忘れて、しまったのか…何もかも…」
忘れた？　自分が？　何を？
先ほどから何を言っているのだろう、この娘は。
一護は首を傾げた。
「許、さぬ…！」
許せない。
自分達に、刀を向けてきた一護が。
全てを忘れてしまった一護が。
こんなに心配して、やっと会えたと思ったのに――――！！！！！！
「私は貴様を、絶対に許さぬっ！！！」
涙が立ち込めた瞳で、怒りと悲しみと苦しみを込めた表情で、ルキアは叫んだ。そして彼女は、恋次らを追うようにして、町中へと瞬歩で去った。
一護は、意味が分からなかった。自分はそんなに怒らせるようなことを言っただろうか。敵とはいえ、心情が全く持って理解できなかった。そんなに怒っているのなら、攻撃をしてくればいいものを、それをしようとはしない。
『――――――――さぬ…！』
「……？」

頭に響く声。
（何だ……？）
泣きそうな、女。苦しそうに、願うように、表情を歪める、黒髪の女が見える。
見たこともない、映像だ。
（……見たことが、ない…？）
……否、ある…？

『私は貴様を、絶対に許さぬ…！』

「…っ……」
一瞬の眩暈。
（何だ…？　今の…）
幾度か頭を振り、一護は踵を返した。そして、空間に、先ほどと同じように人差し指を触れる。裂け目を生み出し、彼はその中に入り込む。
馴染んだ霊圧は、現世から消え去った。

No matter how hard I try, I can't be

五話目にしてようやく主人公登場です。
一護の様子がベタな展開で申し訳ないです…。
でも全ては、ウチがあのシーンを書きたいだけのこと。
あのシーンというのは終盤で使いますが。はい。
コツコツ書いていこうと思います。
そして実は一護のおかげで、織姫の闇鍋からは救われたルキアたちなのでした。

No matter how hard I try, I can't be

一行は、織姫のマンションへと戻った。
道路の中央で恋次の治療にあたるわけにはいかなかったからだ。
鍋をテーブルごとどかして、リビングに広いスペースを作る。石田とチャドはそこに、肩を貸していた恋次をゆっくりと寝かせた。
彼の肩口から大量の血が、絶えず流れ出ている。
「“双天帰盾”」
言霊をのせると、織姫の胸ポケットにつけられたヘアピンから、舜桜とあやめが出てきて、暖かなラグビーボール状の光で彼を覆った。
肩から腰までの大きな傷が、少しずつ閉じていくのを目にしつつ、石田が呟く。
「……さっきのは…黒崎、だね…？」
疑問系なのは、確信がなかった故である。
一護自ら、仲間を斬りつけたなど、俄かには信じられなかった。
下にいた彼等は、ルキアや恋次が、一護とどのような話をしているかは分からなかったのだが、少なくとも普通の再会でなかったことは認識している。
膝の上に固く握り締めていた拳を、震わせた。
「…どうしてだ……っ…」
皆がルキアを見る。
「どうして、こんなことに……っ！！」
疑問と悲しみばかりが、残る。
眉一つ動かさず、恋次を斬った彼が、頭から離れない。
――――テメェらこそ、何者だ！？
「何故忘れているのだ……何故私達が分からぬのだ…！」

全員、俯くしかなかった。答えは誰にも分からない。
「…い……一、護……」
突然の声に、一斉に恋次を見下ろす。傷はふさがり、彼の意識が随分と早く浮上したらしく、僅かに顔を顰めつつも目を開いていた。
「あいつ……なんで…」
“何で”“どうして”“何故”
その言葉しか、今の彼等の口からは漏れない。
身体を起こし、傷のあったところに手を添える。自分は斬られたのだ。紛れもない一護に、斬魄刀で、彼の意思で。
唇を噛み締める。怒りより、辛さが大きい。
魂魄が消滅してしまったのではないか、と思い、必死に捜した彼から、このような「挨拶」を受け取ることになるなんて、予想できなかった。
ナリア＝ユペ＝モントーラと名乗っていたし、姿は破面だし、ひょっとすると他人の空似ではないかという気がしてくるが、会った瞬間に気付いてしまったのだ。心も魂も、彼は黒崎一護だと、叫んでいる。
「きっと…何か、あったんだよ」
そういう織姫も、自信なさげに瞳を彷徨わせる。
いつもなら、皆、無条件に彼を信じるだろう。だが、たとえ何があっても、一護は仲間を傷つけるようなマネはしないという確信があった。それだけに、あの現場を見てしまった彼等は、何も言えなくなる。
「…俺は…」
チャドが、ゆっくりと言葉を紡ぐ。彼の頭にあったのは、中学時代、初めて約束を交わしたときの、あの一護だった。
――――俺のために殴ってくれ。俺は、オマエのために殴ってやる。

――――約束だぜ。

「一護を、信じたい…」

彼が言うことは、よく分かる。皆、一護を信じたいのは同じだ。

ルキアは小さく頷くが、片手を額にもっていき、深く俯いた。

「だが、どうすればいいのだ…！　今のあやつには、私達は分からぬ…あやつの心に私達はおらぬ…何をしてやればいいのだ…！！！」

いくら呼びかけても、一護は表情を変えなかった。それどころか、彼は自分の名前すら、忘れている。大好きな亡き母がつけてくれたはずの名前に、今はもう反応しない。

部屋の中は、シンと静まってしまった。

＊　＊　＊

書類に筆を走らせ続ける日番谷を見て、乱菊は溜息を吐いた。彼女の向かいのソファに座っている八番隊隊長・京楽春水は、苦笑する。

「さっきから、ず～っとあの調子なのかい？」

「そーなんですよ…話しかけても無反応で…。多分、京楽隊長が来てることにも気付いてませんよ」

恐るべし集中力である。集中力というより、考え事をしつつ機械的に仕事をこなしている、というのが妥当なところか。

机の下に積み重ねた書類の一枚をとり、乱菊がチェックを入れ始めた。それを見て、京楽は意外そうに眉をあげる。

「仕事するのかい？」

「もー、私だって副隊長ですよ？　するに決まってるじゃないですかぁ～！」

彼女はただ、この多くの書類の中に、一護に関する何かがないかを調べたいだけだ。

「ていうか、京楽隊長こそ、何でここに来てるんです？」

「ん？　いやね…」
傍らに置いた編み笠を持ち、適当に触る。
「浮竹を捜してるんだけどさァ…」
触れていた編み笠を頭にかぶった。目元が見えなくなる。
「今朝から見つからなくてね…日番谷隊長のところに来てるのかな〜と思ってたんだけど」
立ち上がり、溜息を短くついた。
「どうも、外れみたいだねぇ…これじゃ、あのときみたいだよ……」
「あのとき？」
乱菊が訝しげに眉を顰めるが、京楽は気付かぬように踵を返す。
「それじゃ、またね」
そして、彼は執務室から出て行った。
そのときに日番谷が舌打ちをした。驚いて乱菊が振り向くが、彼は相変わらず隊務をこなすだけである。
何か、尸魂界にも起こりそうだ。
直感的に、そう思った。

＊　＊　＊

「分からぬではないか……」
ルキアはがっくりとうなだれた。
もしかしたら、一護が記憶を失うことになった原因も、皆で話し合えば分かるかもしれない。そんなわけで、当初の予定通り（ただし織姫流闇鍋は皆の懇願によって中止になった）行われた話し合いだが、まとめられた点は、
「黒崎が死んだ日の周辺で、三日間程度の僅かな虚の増加と、携帯の数分間の不通…」
で、ある。
石田は参ったなとでも言うように、グシャグシャと髪を掻き乱す。
「妙なことがあったのは確かだけど、頼れる情報じゃないか…」

「俺も、あの日は大学で講義を受けていて、とくにこれといったことは感じなかった…」
チャドは目を瞑り、考え込む。
夜の十時で、彼等はずっと考え続けている。遅くまで外にいようと怒られもしない石田達は、こういうときは本当に自由だ。

ズンッ……！

現世に新たに現れた霊圧に、ルキアと恋次は呼吸をするのを忘れた。
「な…何…！？」
織姫が狼狽しつつ呟く。
「昨日の夜感じた霊圧と、一緒だな…」
霊圧の感知能力に長けた石田は、あくまで冷静に返す。
――――まずい。
ルキアと恋次が、ベランダから空を見上げると、そこから見えるところの空中に、夜光が立っているのが確認できた。二人はベランダの柵を蹴って、マンションの屋上へ向かった。
石田、織姫、チャドの三人も、何事かと屋上へ向かう。

全員が屋上に着くと、空に立っていた夜光は、ゆっくりとそこへ降り立った。
「死神…？」
見覚えのない彼女に、チャドは眉を顰める。
隊首羽織を着ていることから隊長であることは分かったが、知らない死神だった。
「……総隊長もお怒りだよ。そろそろ本気で帰ってきてくれない？
恋次隊長、ルキア副隊長」
その一言に、人間の彼等が顔を見合わせた。

「…隊長、副隊長…？」
恋次とルキアは、それぞれその証である隊首羽織と副官章を尸魂界に置いてきていた。だから、三人とも、そこまでの変化はないと思っていた。少し容姿が、髪が伸びる等で変わっただけ。
「昇進してたのか…」
チャドが呟くと、夜光は彼に頷いた。
「あなたたちが現世の子か。二人からよく話には聞いてたけど…そう、恋次もルキアも、今は三番隊隊長と九番隊副隊長なんだよ」
「んなこたぁどうでもいい」
恋次が吐き捨てるように言った。
「昨日来てダメだったのに、また来たのかよ？　ご苦労なこったな！」
「うん。だから三度目は遠慮したいかな…」
すると、夜光が背の鞘から斬魄刀を引き抜いた。
「今日はもう、最初から力づくのつもりで来たよ」
青眼は、昨日よりずっと静かに光っている。
彼女が怒る時の、独特の冷静沈着な様は、いつ見てもある“恐れ”の感情を掻き立てる。
「そこにいる人間達」
斬魄刀で、石田、織姫、チャドを順々に指し示す。
「あたし、はっきり言って不器用だから、そこにいられると死んじゃうかも。どこでもいいから隠れててくれない？」
「な、何を…！」
思わず反論しようとした石田を、ルキアが手で制した。
「すまぬ、石田。…お前達は夜光殿が言うように、少し下がっていてはくれぬか」
「朽木さんっ…！」
織姫が心配そうに声をかける。ルキアは微笑み、安心させるように頷いてみせた。
恋次が僅かに息を吐き出すと、彼女と共に抜刀した。

「…やりたくて、やるんじゃねぇぞ」
「もち。それは、あたしも」
ギュッ、と。刀があることを確認するように柄を握りなおすと、夜光は口を開いた。
「『希(のぞ)め、“星陰冠(せいいんかぶり)”』」
瞬間、夜光の斬魄刀・星陰冠はパープルに輝き、その形状を変化させていった。
パープルの光が弾け飛ぶと同時にそこにあらわれたのは、全体を薄紫で彩り、鍔に謎の文様が描かれたレイピアだった。
二人は、斬魄刀を構えたまま夜光を窺った。
その様を見て、織姫は息をのんでから、手を前に差し出す。
「“三天結盾”」
盾を張り、力を集中させる。
チャドは、前にいる三人の死神を眺め、
「…すごい霊圧だ…」
現に、ルキアも恋次も以前より霊圧が格段に上がっていた。だが、ここは現世だ。隊長、副隊長の位である二人は、限定霊印を押してきているはずで、その霊圧の限定率は八十パーセント。全力はこの五倍だ。容易に想像することはできなかった。
「怪我しても、あたしのせいじゃないからね」
夜光が始解した星陰冠を高く構える。それを見て、恋次はハッと目を見開いた。
「ルキアっ！！！」
「分かっておる！！！」
すぐさま背中合わせで立ち、二人同時に叫んだ。
「「縛道の八十一！“断空”！！！」」
間髪入れず、夜光は声を発す。
「“剣舞”」
まるで華麗な踊りのように、彼女は斬魄刀を振るった。そこから放たれていく斬撃は、青や緑に染まり、視覚化されて二人に迫る。

しかし、その全てが、恋次とルキアの繰り出した縛道・断空による防御壁によって、完全に阻まれる。
「す……すごい…」
石田は自分の目を疑った。
恋次が、たった四年の間にここまでの上級鬼道を、しかも詠唱破棄で扱えるようになっているとは。
四年前、虚夜宮（ラス・ノーチェス）に乗り込んだとき、暗いので明かりを灯そうと、かっこつけて詠唱破棄で「破道の三十一・赤火砲」を使ったところ、上手く霊力をコントロールできなかった恋次を彼は知っている。ザエルアポロ・グランツと戦った時など、それを逆に利用したくらいだ。
斬撃の一部が、織姫の張る“三天結盾”に直撃する。
「わっ！？」
あまりの強さに、彼女の腕が痺れる。
「大丈夫か…？」
「う、うん…平気」
チャドに頷きつつ、改めて“三天結盾”を張りなおした。
今度は強く気持ちをもち、強度を上げる。
（強く、なってる…）
ここまで、夜光の“剣舞”に威力があるとは思っていなかった。
それを彼等二人は、防ぎ続けている。たったの一部を受けて怯む自分が、とても無力に思えた。
“剣舞”が終わると、恋次は縛道を解いて飛び出した。
「『咆えろ！“蛇尾丸”』！！」
力強く振るった蛇尾丸の刃が、七枚の刃節に分かれる。蛇のようにうねり、夜光めがけてのびていくが、彼女は目を細めると、星陰冠を反転させ、
「破道の五十八！“？嵐（てんらん）”！」
竜巻が起こる。伸びていた蛇尾丸の刃が風にさらわれ、思いもよらぬ方向へと天を走った。

「うぉ！？」
突然のことに、危うく恋次の身体もそちらへと引っ張られるが、何とか踏ん張って堪えた。
「『舞え、“袖白雪”』！」
斬魄刀全体が純白に染まり、柄の先端からヒラリとリボンのようなものが流れる。これもまた純白である。
「初の舞・『月白』！」
ルキアが素早く袖白雪を操り、巨大な円を数秒足らずで描く。すると、鋭い光が天へ届くまでに立ち、それらは凍りつく。氷柱の中に、竜巻を閉じ込めたのだ。
氷柱がガラガラと音を立てて崩れる頃には、竜巻も消滅していた。
夜光は斬魄刀を一旦おろす。
「とっさに斬魄刀の能力を応用して、鬼道をおさえる…よく思いつくね、そんなこと」
だけど、と付け足す。瞳が剣呑に帯びる。
「ほんっっっとに、そろそろ怒るよ…？」
限定解除をしたのではないかと錯覚させられるような、霊圧の爆発的な上昇。
恋次とルキアはたじろぎ、顔を引き攣らせた。
「や…やっべぇな、これ…」
ルキアが、一歩前に出る。
「ルキア？」
「恋次…我々は、まだ尸魂界に戻るわけにはいかぬ。まだ何も、分かっていないのだからな」
その通りだ。だから夜光を退けようと、今必死に戦っている。
「良いか。霊圧は常に閉じろ。虚が出れば、井上たちに頼め。尸魂界に気付かれたらまた面倒になる」
恋次が眉を顰める。ルキアが何を言おうとしているのか、分からない。しかし、彼女がこちらを振り向いた瞬間、気付かされた。ルキアはニッと笑ったのだ。

「頼んだぞ！」
そして、瞬歩で夜光に近づく。
面食らったように、彼女が目を丸くする。
「待て！　ルキア！！」
「縛道の六十一！　“六杖光牢”！」
ルキアと夜光に、六つの光が胴に刺さり、向かい合った状態で固定される。こうして互いが近すぎるときに“六杖光牢”を使用すると、放たれた対象は無論だが、それを使った自身も六つの光に捕らわれてしまう。
いつしか、村正の力によって斬魄刀が反乱を起こしたとき、ルキアは袖白雪を相手に全く同じことをやっていた。
「逃げろ、恋次！」
ルキアの声。恋次は、動けない。
だって、ここで逃げたら、ルキアは――――……！？
夜光が身をよじったが、縛道を無理矢理解くのは魂魄に多大な負担を強いる。顔を顰めた。
「くっ…！　ルキア…お前……こんなこと…！」
許される行為ではない。こんなことをして欲しくはなかった。
そこで、ルキアは怒声に近い声をあげた。
「早くしろ！！！　私の努力を無駄にする気か！！！？？」
「――――――――――っ！！！」
恋次は瞬歩で、山の方へと逃走した。勿論その最中、霊圧を消す。
息を吐くと、ルキアは夜光と自分の間に、そっと手を差し出す。
「ちょ…ちょっと、ルキア…！？」
この構えは、明らかに鬼道を扱うときのもの。
だが、このような至近距離で放てば――――、
「申し訳ありません、夜光殿…ですが、私も恋次も、今回は尸魂界に従う気は…ありませぬ！」
ポウ、と手が青白く光る。
織姫が自分の名を叫んだ気がするが、構わず言葉をのせた。

「破道の三十三、蒼火墜！！！」

――――――ドォン！！！！！

No matter how hard I try, I can't be

ちょっと長かったですね、今回。
やっぱり未だに戦闘シーン書くのは激しく苦手ですｏｒｚ
これ書くのバカみたいに時間かかった…。
ところで夜光ですけど、毎回言うことですが印象最悪ですよね。砕蜂みたいに命令には忠実、という印象が強いのかな。
でも一応。彼女はルキアも恋次も大好きです。
後々批判されそうなので、念のため。

ちょっと行き詰まってきました…；
頑張りたいです、この夏休みにかなり。

Beginning is ZERO of number.1

地下特別監理棟『蛆虫の巣』の、最奥部にある部屋。そこは、隠し扉を通って初めて入ることの出来るところだった。一体いつからこのようなところに、誰も入れないような空間が作られてあったのだろう。ましてや、危険因子と判断された者達のいる『蛆虫の巣』に、こういった部屋はあっても無意味ではないのかとさえ感じられる。何より、不釣合いだ。壁は、殺気石ではないが、もっと強固なものらしい。

「来たか、十四郎」

元柳斎の声が反響する。浮竹は、「はい」と頷いた。

薄暗く妙に音の響く広い空間の中央に、彼等二人は立っていた。しかし、浮竹は、一番隊隊舎で会うときと同じような間隔を保った。

「霊圧を消すことまで要求されましたが…そこまでの極秘で、一体何なのですか？」

「うむ。…実はの」

「山本総隊長」

ふいに、女の声が響く。

「それは私が説明するから」

言いながら、その声の主は、元柳斎の後方から歩み出てきて、その姿を露わにした。

死覇装の上に、金の刺繍が施された灰色の羽織を着ている。

あまりのことに、浮竹はただ呆然と呟いた。頭はその事実を否定したが、前にいるのは紛れもない、知っている女の死神。

「……ひ……曳舟…？」

死神・曳舟桐生は、目尻を緩める。

「久しぶり。浮竹」

実に、百十年ぶりかという再会だった。

彼女も以前ととくにかわらず、浮竹も自然と笑顔になる。しかし、

驚きが隠せないのも事実だ。
「どうしてお前が…こんなところに」
「悪いわね。立場上公の場に出ることは、今はまだ避けたいのよ」
桐生は、百十年ほど前に十二番隊隊長から昇進し、王属特務の零番隊に異動になった死神だ。尸魂界の象徴であり、絶対的な存在・“霊王”に関わりのある王族や零番隊は、その姿を極力表には出さないよう配慮している。一般には、“霊王”を護る為と言われているが、その真相は不明だ。それを知るのは、“霊王”の存在する王宮と、それに連なる王族と王属特務だけが存在することを許された、王土の者だけだ。
普通、隊長格程度の死神が、そこに実際にいる者と対面できることは、ない。
「…零番隊の死神が、俺に何の用だ？」
数拍の間をおき、桐生は浮竹を見つめた。
「あなたに来て欲しいのよ。零番隊に」
頭が真っ白になる。予想の出来ない科白に、思考回路が停止する。
意味を飲み込めていない様子である彼に、桐生は肩を竦めた。
「一護くんの魂魄、行方不明なんでしょ？　おかげで隊長の予定もずれたみたいで、王土にまだ戻って来ないらしくて、霊王陛下も焦ってらっしゃるのよ。多分、王属特務（わたしたち）と初めて、護廷が動くことになるときがくると思う」
「ま…まってくれ、曳舟…どうしてお前が、一護くんのことを知ってるんだい？」
桐生はキョトンとする。
彼女がさも当たり前のように一護の名を親しげに呼び、またそれを「何故」と訊かれると随分不思議そうな顔をすることに、浮竹はいささか戸惑った。
「……何それ…？　隊長から話聞いてるんじゃないの？」
「“隊長”…先生のことか？」
「儂ではない」

元柳斎はそうとだけ答える。
聞いてないのね…。桐生は呆れ顔で、だからあの人は面倒なのよ、とぼやいた。
浮竹に一度背を向け、天井を見上げる。箱のような空間は、ただ青白い光が降り注ぐだけで、少々不気味だ。天井の中に、今度ホタルカズラでも飼おうか、などとどうでもいいことを考える。
そして、漸く一言。
「黒崎一心」
頭が痛い。あとで卯ノ花のところへ行かなければ。
浮竹は唾を飲み込む。
「黒崎一心零番隊隊長よ」
何百年も動かなかった、錆び付いた歯車。
それが、ギシギシと不快な音を立てながら回り始めたことを、このとき浮竹だけが、否が応でも気付かされたのだった。

＊　＊　＊

三天結盾にヒビが入るほどの爆風。幸い、チャドが巨体を生かして石田と織姫を庇ってくれたので、二人は何もなかった。チャドにしてみても、彼の体は四年でいっそう大きくなり、人間を超越したレベルの頑丈さを誇る。問題はなかった。
三人は、改めて前を向く。
爆煙が晴れたところに立っていたのは、縛道から解放された夜光で、彼女は傷だらけのルキアを抱えていた。どうやら気を失っているらしい。夜光もかなりの傷を負ったようで、霊力の消耗もあってか、苦しそうに肩で息をしていた。
「っ……本当に、やるなんて、ね…」
言ってルキアを見やるが、彼女は微動だにしない。
ヒュッ、と風を切る音がしたことに気付き、夜光は斬魄刀を振るった。はじき返したのは、霊子で形成された矢だ。

「…そっか、滅却師（クインシー）なんだっけ」
こちらに向けて銀嶺弧雀を構える石田を見て、苦笑する。
「知ってるとは光栄だね。だけど、無理矢理連れ帰ろうとする君を、黙って見過ごすわけには行かないな」
気配を感じ、振り向いてみる。
いつの間にか、後方数メートルというところにチャドが立っていた。
「……朽木を放せ」
「ごめん。それは無理」
「なら、放させてやる！」
石田が銀嶺弧雀から霊子の矢を連射した。それから逃げ始めた夜光は、斬魄刀を振りかぶる。
「『踊れ、“星陰冠”』」
ピッと石田の方に星陰冠の切っ先を向けると、刀身から針状のものが噴出し、相殺していく。
「その弓矢の連射弾数、いくつ？」
互いに連射し続ける。
「１２００だ！」
「そっか。…惜しい…」
夜光が瞳を細める。
「こっちは、２０００だよ」
瞬間、銀嶺弧雀の連射が止まり、残りの星陰冠からの８００の針が、石田に襲い掛かる。
「“三天結盾”！！！」
織姫が叫ぶと、石田の前に盾が張られ、外部からの攻撃が拒絶される。
良い戦い方に、へぇ、と夜光から感嘆の溜息が漏れた。
その背後から、右腕に鎧をまとったチャドが、霊力を爆発的な力に変えて解き放つ。
「巨人の一撃（エル・ディレクト）！！！」

すぐさま瞬歩を使ってかわし、ルキアを抱えたまま右手を地面に屋上の床にたたきつける。
「縛道の二十一！　“赤煙遁（せきえんとん）”！」
煙幕が発生し、夜光とルキアの姿が見えなくなる。
すぐに彼等は、これが目くらましだと気付いたが、動くことはできない。視界が晴れたときには、夜光と彼女に抱えられたルキアは、忽然と姿を消していた。

恋次は、空座町にある山・空見山の中の大木に背を預けていた。
徐に顔を上げ、点々と輝く星が瞳に映る。
「――――……消えた…」
ルキアと夜光の、二人の霊圧が消えた。
ほんの短時間だったが、石田、織姫、チャドの緊迫した霊圧も感じたので、交戦したのだろうことは予想できた。
だが、ルキアを助け出すなどできなかったろう。それは当然だ。夜光は、一言で言えば天才。そんな死神を人間ごときがどうこうできるはずはない。たとえ石田達のように、特殊なものでもだ。
「どうしろってんだよ…」
ルキアが、連れ戻されてしまった。何も分かっていないし、彼女はまだ調査し足りないはずだ。現世に来て、一護について調べたいと言い出したのはルキアだ。
副隊長だと、どの程度の罰が与えられるのだろう。
処刑は、ない。尸魂界には、死神の力の譲渡のときとは違い、義妹を大切にする白哉がいる。
だが、それでももっとほかの、重い罰があるはずだ。
「…くそっ……」
ずるずると座り込む。手を前につき、地面を掴むようにして拳を握り締めた。

――――逃げろ、恋次！

掌に爪が食い込むほど、拳に力を込める。

「くそっ…！　くそっ、くそっ…！！」

――――テメェらこそ、何者だ！？

「畜生おおぉぉぉお！！！！！！！！！！」

現世の夜空に、恋次の声がただ、哀しく木霊した。

その悲痛な叫びを聞いていたのは、山にある木々だけだった。

＊　＊　＊

虚夜宮（ラス・ノーチェス）によく似た、しかし一回り小さい建物が、虚圏のある場所にぽつんと存在した。

その中の一室に、“ナリア＝ユペ＝モントーラ”と名乗っていた一護が、ベッドの上で俯き気味に座っている。

「ナリア、兄ちゃん…？」

突然の声に、彼が顔を上げる。

ユウが覗くようにして、入口から顔を出していた。

「入っていい…？」

ユウの顔は、左半分が仮面に覆われていて、破面というより、破面になろうと頑張って仮面を剥がしてみた、という様だ。

「ああ…」

一護が頷くと、少年は嬉しそうに笑い、彼に駆け寄ってその隣りにピョイと飛び乗った。

「…どうしたの？」

「え？　何が？」

「だって…ナリア兄ちゃん、現世から帰ってきてから、ずっとおかしいんだもん」

ゆっくりと瞬き、小首を傾げる。
「…そうか？」
「遊んでくれないし…」
「いや、それ、忙しいからだろ」
頬を膨らまして、ツンと顔を背ける。
拗ねたユウに、一護は溜息を吐いた。
「分ーかった！　あとで、遊んでやるから！」
勢いよく振り向く。
「だっこ！」
ベッドから落ちそうになり、一護は呆れ顔で少年を見た。
「お前…なぁ…」
「ほら、ナリア兄ちゃん、いっつもそうやってしぶるんだもん！！」
ますます頬を膨らますので、一護はまた溜息を吐く。そして、手を伸ばすと、ユウをひょいと持ち上げて膝の上にのせてやる。
「……ごめんな、ユウ」
「ん～？」
ユウが一護を見上げる。
「たしかに…変だよな、俺」
自嘲気味に言う彼に、ユウが表情を曇らせる。
「あのとき、ナリア兄ちゃんを“イチゴ”って呼んでた死神に、何かされたの？」
「いや…」
泣きそうな顔で叫んだ、黒い長髪の死神。
自分に斬られて、信じられないと言いたげな顔をした、赤髪の死神。
どうして、初めて会った死神にそんな顔をされなければならないのか、一護には分からなかった。
なんだかそれを思い出すたびに異常に気分が悪くなって、頭を抱えた。
そして、それを叱咤するように、響く声。

『た――！！』

ズキリ、と痛む頭。現世から戻ってきて以来、おこるようになった。その都度、脳に響く謎の声は、鮮明に聞こえることはない。

「“イチゴ”…なぁ…」

「変な名前だよね」

ユウが笑うと、彼は仏頂面をしたまま、腑に落ちない様子で口を開く。

たしかに、変な名前だ。変な名前だが……。

「ってか……何か…たりねぇ、気がする」

「“イチゴ”に？　ナリア兄ちゃん、聞いたことない言葉だったんじゃないの？」

その通りだが、不完全な気がした。ただ、“イチゴ”だけではなく、

「何か……その、前、に……」

……何か、ついてた気がする…。

「おいおい、何やってんだァ？」

あわてて前を見ると、そこには破面の、まるで王冠のような骸骨を頭に被ったような仮面の名残がある男が立っていた。いつの間に部屋に入ってきたのかは分からないが、彼が気配を消しているのはいつものことだ。

「ガレット…」

破面・ガレット＝スミザーハースは、ポケットに手を突っ込んだまま言った。

「おかえり。お前等、戻ってきてたのか。なら一言くらい声かけろよな」

「ガレット兄ちゃんっ！」

一護の膝上から飛び降り、ユウはガレットに抱きついた。

「おー、どーした？　つーか、お前等二人いつ戻ってきたんだ？」

「十三時間くらい前」
しれっと答える一護に、すかさずアッパーを繰り出す。
「さ・っ・さ・と・報・告・し・ろ・よ！！！」
「ってぇな！　言わなくても分かるかなって思ったんだよ！　あとテメェのアッパーはまじで痛てぇから二度とすんな！！！」
涙目で叫ぶ彼を見て、ガレットはやれやれといった様子で肩を竦めた。
「あのね、ガレット兄ちゃん！　ナリア兄ちゃんがね、死神に何かされたみたいで、変なの！！」
その科白を聞き、ガレットは訝しげに眉を顰める。
「…何されたんだ、ナリア？」
「別に。変な名前でさんざん呼ばれて、戸惑っただけだ」
顔を背ける。正直、記憶にない名前で呼ばれたことを思い出すのは気分が悪かった。
「変な名前？」
「“イチゴ”だってー」
ユウが言うと、考える仕草をし、ややあって口を開いた。
「“イチゴ”か……たしか、現世にそんな食いモンがあった気がするな」
「ナリア兄ちゃんが食べられそうになったってこと？」
真顔で言う少年に、一護は露骨に嫌そうな顔をした。
「ユウ、それキモイからやめてくれ」
「違うの？」
首を傾げるユウに、「違う」と頭を振ってみせた。
相変わらず足元に抱きついている少年の頭を、ポンポンと軽く叩いてやりながらガレットは笑った。
「ま、死神の戯言だ。気にする必要はないんじゃね？」
「おう。そーだよな」
敵の言うことをいちいち気にしてはやってられない。それは重々承知していた。

一護は腰を浮かせると、「飯、食ってくる」と部屋を後にする。

『私は貴様を、絶対に許さぬっ！！！』

ズキッ。

胸が、痛い――――。

何か毒でも、攻撃にまじえて体に注入されたのだろうか。一護は一人、ひそかに胸を押さえた。

もう、気にする必要など無い。ガレットにそう言ってもらえたし、ユウにこれ以上心配をかけるわけにはいかない。負担はなくなったはずだ。

だが、一護は何故か、苦しかった。

Beginning is ZERO of number.1（後書き）

やっと次の章に移行。ふぅ。
ルキア、とうとう連れ戻されちゃいました。
夜光は人間に危害を加える気はないので即逃げました。

にしても今のところ、皆の気持ちが滅茶苦茶に交錯してますね。
…いいのかなぁ、これで。
前回京楽が浮竹を捜していましたが、はい。こういうことです。
でも零番隊のことは完全捏造なのでご注意ください。
…王族のシステムが分からなすぎて四苦八苦しております。

現在忙しいので更新まちまちですが、気長に待っていただければ。
次回は尸魂界の話です。多分。↑

浮竹はやはり狼狽えていた。
王属特務は、全死神から選抜された者が形成するエリート部隊、それも王家を護る為のものだ。そんなところに、体の弱い自分が入っては、足手まといにしかならないことは容易に予想できる。
「体が弱くても大丈夫」
心を見透かしたように、桐生は淡々と言葉を紡ぐ。
「王族には、四番隊よりよっぽど腕の立つ医師がいる。あなたの弱い体を治すなんて大した手間でもないわ」
瞳を彷徨わせた。
昇進？　零番隊に異動？　そこの隊長が黒崎一護の父親？　どういうことだ？
桐生が息を吐き出す。
「今すぐに結論を出せとは言わないわ。私も異動になる一週間前に、ここで話を聞いて、随分悩んだから」
零番隊に入る。隊長格からの昇進。
初めのうちは信じられず、そして副隊長の猿柿ひよ里に対して悪くて仕方なかった。彼女は自分のことを慕ってくれていたし、桐生もわが子のような感覚だった。
しかし、王属特務は護廷十三隊とはまるで別次元だ。そもそも、尸魂界ではなく、王土という違う世界でやっていくことになるから、滅多なことがない限り、護廷十三隊とはほとんど関わらないことになる。
淋しかったし、何も知識のないところに送られるのは怖かった。
「俺がいなくなれば」
浮竹は険しい様子で、桐生を見た。
「隊長も副隊長もいなくなった十三番隊は、廃絶になる」
現在、六番隊の副隊長が空席であるように、下の死神や席官の中

に、それ相応の力を持つ者はいない。元々志波海燕の殉隊によって副隊長が空席となっていた十三番隊から、隊長の浮竹がいなくなれば、隊そのものの廃絶は必然だ。
決して掟に背いたわけではないので、隊士達はそれぞれ他の隊に振り分けられることになるだろう。しかし、十三番隊がなくなるのは、どうしても避けたかった。百年以上、隊長を務めてきた浮竹にとって、十三番隊はとても大切なところなのだ。
桐生は腕組みをし、毅然とした態度で返す。
「それも心配ご無用。ちゃんと隊長なら、すぐに入るわよ」
「誰がだい？」
天井を見上げる。ここは地下である上、外とはつながっていない密閉空間のようなものだ。どれくらい時間が経ったのか、分からない。
「浦原喜助、覚えてるわよね？」
「っ！？　そ…そんな…彼は…」
浦原喜助は、元十二番隊隊長兼技術開発局創設者にして、初代局長を務めた死神だ。だが、かつての五番隊隊長・平子真子を初めとし、当時の十二番隊副隊長・猿柿ひよ里、八番隊副隊長・矢胴丸リサ、七番隊隊長・愛川羅武、三番隊隊長・鳳橋楼十郎（おおとりばしろうじゅうろう）、九番隊隊長・六車拳西、九番隊副隊長・久南白（くなましろ）、鬼道衆・有昭田鉢玄の計八名が、当時五番隊副隊長を務めていた藍染の虚化実験に巻き込まれ、八名全員が虚化する事件が起きた。彼はそれを解こうと試みたが、結局藍染の策略によって尸魂界から永久追放の処分を受けたのだった。
それからは、現世でしがない駄菓子屋を営んでおり、時々現世駐在となった死神の会議場としても用いられている。藍染との戦いでも力を貸してくれたが、あれ以降も浦原は現世にいる。
「総隊長も、妥協してくれたのよ」
元柳斎に目を向けてみると、彼は軽く目を閉じる。
それが肯定の意であることは、すぐに理解がいった。
「“霊王”のお考えでも、あるしね」

「だが、彼がそう簡単に承諾するとは思えないが」
浦原は、自分の処分を不本意ながらも甘んじて受け、現世に腰を落ち着けた。それで沈み込んでしまったというなら、刑が突如として免除になったことを心から喜び、すぐにでも十三番隊隊長の座に立つだろう。
しかし、実際はその真逆で、尸魂界から追放処分となったのをいいことに、堂々と向こうの掟を破り、好き勝手に動き回っている。寧ろ、籠の入口が開け放たれ、漸く自由になり、空を飛び回ることが楽しくて仕方ない鳥のようだった。
反面、浦原自身は自分の行ったことが、全死神を危険に晒す事態を発生させることになってしまったことを密かに悔いていた。だからこそ、藍染との戦いが終わってからも、彼は遠慮して尸魂界に訪れていないのだ。
そんな彼に「十三番隊隊長の座に就け」と言ったところで、そう簡単に首を縦に振らないことは誰にだって分かる。
「喜助は、もしかしたら今回のことの発端も、自分に原因があるのかもしれないと踏んでるのよ。なら、自分のできることをするだけだ・ってね」
ゴァン、と入口のあたりから騒々しい音が響いた。
『蛆虫の巣』の誰かが、扉にぶつかったのかもしれない。
「浮竹。もう一度言うけど、今すぐ決める必要はないの。断ったら断ったで、喜助にもそう言うし、霊王陛下にも話がいくようにする。ただ、これだけは覚えておいて」
桐生は、はっきりと告げる。
「王族は今、あなたの力を必要としている」
浮竹は下唇を噛み締めた。
結論はでそうにない。だが、出さなければならない。でもどうしたらいいのか、分からない。
恥ずかしいことに、自分にそこまでの力があるのか、いざとなると自信をもてなかった。

外は既に朝になっていた。
零番隊か…。
話が急すぎる上に入り組んでいて、まだ現状を今一つ飲み込めていなかった。ただ、自分に決断を迫られているのは、十三番隊に居続けるか離れるかの、どちらかを選択するということだけは頭に入っていた。
ふらりとした足取りで、体を半ば引きずるような感覚で、十三番隊隊舎の離れである雨乾堂（うげんどう）に向かう。
顔色の優れない彼を、心配そうに多くの死神が声をかけたが、浮竹は適当に笑って流すことしかできなかった。
「隊長――――っ！！！」
突如飛んでくる大声。
隊舎から、三席の小椿仙太郎と虎徹清音が駆けてくる。
「もぉ、隊長、何処に行っていたんですか！？」
「すっげー沢山捜したんスよ！？　こんな奴と協力してまで！！！」
仙太郎が清音を指差すと、彼女はそれをはたいた。
「あたしだって、あんたなんかと組みたくありませんでしたぁ！」
「んだとォ！？　もっぺん言ってみろ、このハナクソ！」
「こちらこそ！！！」
二人が喧嘩を始めたのを見て、浮竹は苦笑する。
たしかに、一晩中帰ってきていないのだから、心配されるのも当然だった。
「ああ、すまなかった。ちょっと用事でな。…戻ってきて早々に悪いんだが、雨乾堂に行って少し寝てくるよ」
そうして再び歩き始めた彼の背を、仙太郎と清音は無言で見送り、顔を見合わせた。
……今の隊長の顔は？
あんな顔をした浮竹を、二人は初めて見た。

ガラリ、と襖を開けて、浮竹は硬直した。
「あ、おかえり～、浮竹」
雨乾堂の中には、京楽が寝転がっていた。他隊の離れで何をやっているのだ、と思う一方で、これこそが京楽だとも思った。
「何をしてるんだ？　京楽」
「ん～？　いやぁ、昨日飲みすぎちゃってねぇ。八番隊に行き着けそうにないから、ここ、貸してもらったんだよ」
声や目は、酔っ払っているようにいつもよりは心なしかトロンとしている。しかし、顔色を見れば、実際はちっとも酔っていない事は一目瞭然だった。
京楽が起き上がり、被りっぱなしだった編み笠を脱ぐ。
真っ直ぐに浮竹を見据え、
「話すついでに、一杯やらないかい？」
と、杯を傾ける仕草をしてみせた。
彼には敵わないな。
浮竹は呆れたように笑うと、頷いて彼の向かいに腰を下ろした。
トクトクトク、と酒を杯に注ぐと、それを前に置く。彼は快く受け取り、一口飲んだ。酒独特の、サラッとした旨味に、僅かに頬を緩める。
「……浮竹さァ…」
「何だ？」
京楽は、視線を外さずに尋ねる。
「零番隊に昇進かい？」
思わず、口の中の酒を噴出しそうになった。それを止めようとして、噎せている浮竹の様子に、やれやれといったようすで肩を竦める。
「やっぱりね…」
「何で、分かったんだ？」

浮竹が不思議そうに尋ねると、京楽は困ったように笑った。
「何で・って、桐生ちゃんのときと全く同じなもんだから。」
桐生が零番隊に昇進となる話を聞いたとき、丁度京楽は彼女のことを捜していた。八番隊から十二番隊に書類をまわしにいったリサが、八番隊隊舎に戻ってくるなりこう言ったからだった。
『曳舟隊長がいてへんよ』
どこかに行く時は、必ずひよ里に告げ、やるべき任務を与えてから、というのが桐生のいつもの行動だった。ところが、そのとき彼女は、ひよ里にはおろか、どの死神にも何も言わず何処へといなくなっていたのだ。
ひよ里が随分心配していたので、リサも一緒に捜したいと京楽に申し出た。彼も気になったのでそれを許可し、自身も桐生を捜し回った。
今回の浮竹ほど長くはなかったが、桐生はその日の晩にふらついた様子で十二番隊隊舎に戻ってきた。京楽は彼女の霊圧が察知できると、すぐさま十二番隊を訪れ、やんわりと「何かあったのか」と尋ねた。それで彼女が「大丈夫だ」といったら、本当に大丈夫なのだろうということですぐに帰るつもりだった。しかし、桐生は沈んだ様子で、ポツリと言葉を漏らしたのだった。
――――零番隊に昇進。
「じゃあ、俺が先生から聞いて、お前に教えに行ったときは…」
「うん。もう知ってたよ」
だが、あのときは京楽も“本当かい？”と驚いていたはずだ。
「驚いていたのは、演技だったのか？」
京楽は頬をかきながらも、少し眉根を寄せる。
「いやぁ、演技じゃあないよ？　驚いたのは本当。ただ、零番隊に昇進になったことが、じゃなくて、彼女がそれを承諾したことが、かなぁ」
桐生は、十二番隊隊長に留まるものだと思っていた。ひよ里に淋しい思いをさせられるような死神ではないと、勝手に決め付けてい

た。だから、彼女が零番隊を選んだというのは本当に意外だったのだ。
今にしてみると、彼女はそれが最善であり、ひよ里のためでもあると思っての行動だったことはよく分かる。ただあのときは、突然だった。
「ちなみに、零番隊に行くことになったとき、十三番隊はどうなるんだい？」
「喜助くんが入ってくれることになっているらしい」
思いもよらぬ名前が出てきて、京楽も目を見開いた。
「…なんか、不思議なめぐり合わせだねぇ。彼が正式に十二番隊隊長に就任したときも、桐生ちゃんが零番隊に昇進になったときでしょ？」
たしかに、と浮竹が笑うが、ぎこちなかった。
かなり悩んでいるらしい、そんな彼を見かねた京楽は、
「で、浮竹はどうするのさ？」
唐突に話を本題に戻した。
その一言で、浮竹は俯いた。
「……迷っている」
「だろうねぇ」
京楽は雨乾堂の中を見回した。
埃一つ落ちていないここは、浮竹の体のために仙太郎と清音が細心の注意を払って掃除している。海燕と同様に浮竹もとても慕われており、死神達からの信頼も厚かった。
「……情けないな。こんなときに悩んで」
「まぁ、仕方ないんじゃないの？　桐生ちゃんもそうだったし」
「……京楽だったら、どうする？」
「僕かい？」
う～ん、と考える仕草をして唸る。最初に頭を過ぎったのは、副隊長・伊勢七緒の顔だった。
「僕だったら…そうだねぇ。七緒ちゃんには怒られると思うけど、

多分、零番隊に行くと思うよ」
短時間で、あっさりと答える京楽。
初めて彼を見たものなら皆、他人事だと思って何といい加減なことを言うのだろうと怒るはずだ。本当に、そうとしか思えない程度の時間しか考えていないのだから。
しかし、浮竹には京楽が真剣に考えて、その答えを即座に導き出したことが理解できた。
「だが、八番隊の死神は、お前を必要としているんだぞ？」
一番聞きたい答えだった。浮竹は、十三番隊の死神達が、気がかりでならないのだ。
「そうだよ。それは分かってる」
フッと、笑った。
「でも、零番隊で自分のできることがあるなら、僕はそっちに行ったほうが、皆のためになると思うんだよね」
京楽はそれ以降も、雨乾堂では酒を一滴たりとも口にしなかった。

＊　＊　＊

ルキアが夜光に連れ戻されてしまい、現世からいなくなってから、恋次は一度も織姫や石田、チャドどころか、たつきや、啓吾や、水色の前にも現れていなかった。それだけに意気消沈しているのか、一人で別のところを探っているのかは分からない。
何かが起きているらしい。それを察知した、霊力をもつ一護の級友たちは、皆まめに連絡を取り合うようになった。あまり一護に関してよく知るとは言えないが、死神が見える本匠千鶴も同様である。少しの異変も見逃さないよう、彼等は妙に緊張していた。
まだ現世のどこかに身を潜めているはずである恋次がどこに行ったのか心配だったが、彼は霊圧を閉じているようで捜すことは不可能だった。

織姫は、とりあえずは普通の生活をし、その中で色々と注意をして見てみようと考えていた。すぐに連絡に気付けるように、普段は鞄に入れている携帯をポケットに入れた。大学に行く以上、授業中鳴ってはいけないので、マナーモードにしなければならないのが面倒である。

いつもどおり朝早く、織姫はマンションを出た。階段を駆け下り、道路に出て歩道を歩き始めたところで、随分久しぶりな霊圧を感じ、足を止める。電信柱の傍に、キャスケットを被った金髪の男が一人、立っていた。

「……もしかして…平子くん？」

キャスケットの縁を、指でひょいと持ち上げた。紛れもない、仮面の軍勢（ヴァイザード）の一人・平子真子（ひらこしんじ）であった。四年前の決戦以来だった。

「久しぶり、織姫ちゃん。……ちょっと、ええか」

平子の神妙な顔つきを見て、織姫は頷いた。

Beginning is ZERO of number. 2（後書き）

学校のゼミが終わって明日は完全にオフだから、すごい夜更かししして書いてみました。

ぐだぐだ喋る章ですみませんでした；

何せ京楽と浮竹はあまりちゃんと喋らせたことがありませんので。

はい。ちょっと大変でしたね。違和感がないことを祈るばかりです。

あと、零番隊に昇進になる、という話を聞かされる場所が『蛆虫の巣』にあるのはちゃんと理由があります。かなり裏設定的なものなので、本編で出すことができたら出したいです。

何か、感想や、アドバイスをいただけたら嬉しいです。

Beginning is ZERO of number.3

ガレットの科白に、一護は放心してから、まるで子供のようにぶんぶんと、激しく首を横に振った。
「冗談じゃねぇ！　何で俺が！」
「知らねーよ、俺じゃなくてバートンに言え」
バートン＝ヒャド・レニツァは、彼等破面のリーダー格で、他の者とは比にならないような大きい霊圧の持ち主だった。彼に逆らえば、間違いなく殺される。そんな強大な力を有している。
しかし、バートンは破面を大切にしてくれ、皆からも信頼されていた。ゆえに、わざわざ逆らおうと思う者もいない。
「大体、尸魂界に行くって、俺を殺す気か！？」
「いや、バートンはお前のこと買ってるし、実際かなり強ぇーじゃん。大丈夫だよ。多分」
「超他人事だな。すげー腹立つ」
「おっと」
投じられてきたクッションをかわす。一護はガレットにそれが当たらなかったことに対し、盛大な舌打ちをしてからベッドの上に寝転んだ。どうやら今日の彼は、随分虫の居所が悪いらしい。
「んだよ。らしくねーな。ナリア、死神が怖ぇのか？　実力はどう考えても、お前の方が上だろ」
たしかに自分一人でも、尸魂界を半壊させる程度は訳ないだろう。死神の隊長格にも、少なくとも引き分けるくらいの力を持っていることを、一護は自覚していた。しかも今回は、尸魂界側の戦力を分析するための偵察だ。ある程度のことが分かれば、ささと帰ってくればいい。現世のときなど、霊圧のある人間を、探査神経（ペスキス）を研ぎ澄まして何人いるか確認するためだけに出向いたのだ。実際は、少々邪魔が入ったが。
「現世のときは、ユウにせがまれたから仕方なく行っただけだ。尸

魂界にはガレットが行ってくれよ」
　元々、虚圏からわざわざ外に出るのは面倒だった一護は、現世の偵察も他の者がやればいいと考えていた。しかし、ユウが「現世を見てみたい！」と騒ぎ始め、終いには一護にすがりついて泣き始めたので、仕方なく「自分が行く」と名乗り出たのだった。
　しかし、今回は多分、わざわざ選びなおすのが面倒になったのだろう。バートンは迷うことなく一護を指名してきた。ガレットは、これを伝える為に彼の部屋にやってきた。それがバートンからの命令だった。
「え、何、俺にバートンに逆らえって言ってんの？　尸魂界に行く前に、俺の命が尽きるよそれ？」
　尸魂界に偵察で行くこどがユウの耳に入れば、あの少年は新たな世界の見たさに、一護と一緒に行くと言い出して聞かないだろう。だが、子供のユウを連れて行くには、現世はまだしも尸魂界は危険すぎる。
　少年が他の破面達とホールで遊んでいる間に、何とか話をつけなければならない。
「…何でそんな渋んだよ？　ナリアはバートンの命令なら、文句言いながらでも従ってきたじゃねぇか」
「あ～もう、分かったよ！」
　ガバッと体を起こし、一護はヤケクソ気味に叫んだ。
「分かったよ！　明日とか明後日には、必ず行く！　それでいいだろ！？」
「そ…そんな怒んなよ…」
「怒ってねぇ！」
　どう見ても怒っている一護に、困り顔で頭を掻いた。何故彼が、ここまで尸魂界に行くことを嫌がるのか、ガレットには理解できなかった。どんな敵でも臆するような性格ではないはずだ。
　一護は再びベッドの上に体を倒すと、ガレットに背を向けて目を閉じた。

「……現世から帰ってきて、まだ一睡もしてねぇんだ…少し寝かせてくれ…」
寝不足で機嫌が悪かったのか。
ガレットは納得し、謝ってから彼の部屋を後にした。
一人になった一護は、まるで周りからの騒音から逃れるように、両手で耳を塞ぐ。
（…うるせぇよ…）

『ど…どうしたのだ、一護？』

――――“イチゴ”って、誰だよ。

『行かせねぇ！』

――――どうして、敵である俺の肩を、あんな風に掴んだんだ。

『私は貴様を、絶対に許さぬっ！！！』

（……うるせぇっ…！！！）
何も見えなくていい。何も聞こえなくていい。
一護は現世で、あの死神二人に出会ってからおかしくなった。頭に、気を抜けばあのときの女と男の顔が浮かび、耳にはその声が聞こえてくる。
何か、嫌な予感がした。
自分が尸魂界に行ったら、確実に自分の何かが壊れるような気がした。無性に怖かった。今の自分がわからなくなりそうで、それだけは嫌だった。自分は破面。虚圏にいて、死神の敵。確固たる自分の像が、揺らいでいきそうで、それだけに恐怖した。自分が分からなくなるほど怖いものはないと、一護は思っている。
自分の甘さに、腹が立った。殺してしまえば良かったのだ。あの、

黒く長い髪をした、小柄な女の死神も、赤い髪を結った、目つきの悪いあの男の死神も。
殺してしまえば、自分はきっと、こんなに悩んだりしなくて済んだ。自分はきっと、おかしくならなくて済んだ。
（――――違う…）
ふと、そんな考えを否定する自分がいた。
悩みは、しない。だけど、殺したら、多分…
（…後悔……した…？）
何故、敵を斃して、後悔する必要がある？
（……頼むっ…もう…）
固く、目を瞑った。両耳を、もっとしっかり塞いだ。
（もう…入って、こないでくれ…）
頭の中から、死神の姿を消し去りたいと、心から思った。

＊　＊　＊

場所は浦原商店。その奥にある居間で、浦原喜助は巨大な鞄に、あれやこれやと様々なものを入れていた。
「よっこいしょっと…こんなもんスかねぇ…」
現世に腰を落ち着けていた期間が長かったせいで、持って行くべきものは膨大な量だった。しかし彼は研究者であって、それに関わるものはすべて持っていくべきだ。中途半端な量のものを持っていくと、かえって面倒なことになってしまう。
「…テッサイたちにここを任せるのは心苦しいっスけど…仕方ないっスねー…」
何気なく畳に触れた。
“浦原商店”は、これまで自分の帰るべき場所であった。そこを離れることになるのは、少々淋しい気もする。
そのとき、ガラガラと引き戸が開かれる音がした。お客が来たという証拠だ。

「あ、すいませーん、今出まーす」
大声を出し、立ち上がる。
最後に相手をするお客は、どちら様かな。
そう思って店に出て行き、浦原は目を丸くした。
「阿散井サンじゃないっスか」
恋次は浦原を見据えたまま、口を開いた。
「…俺を捕らえろって…尸魂界に言われたりしてるか」
その話は、ルキアと恋次が無断で現世に来たときから、尸魂界に言われていた。先手を打ったのだ。だが、今はまだ、浦原はただの「しがない駄菓子屋」の店長だ。ヘラリと笑って、返す。
「い～え、なーんにも」
恋次がホッと息を吐き、肩から力を抜いた。どうやら、浦原に少しでも自分を捕らえるという意志が見えたなら、すぐにでも逃げようと構えていたらしい。
「それで、ご用件は？」
「一護が死んだのは知ってるよな」
「ええ。勿論」
「その魂魄が行方不明になってたのも？」
「一心サンから聞きました」
「じゃあ…」
仮面で右目を覆っていた、一護を思い出す。
「…一護が、破面になってるのは…知ってるか？」
浦原が訝しげに眉を顰めた。
「…破面？　黒崎サンがっスか？」
恋次が難しそうな顔をした。
「いや…実際、破面なのかは…分かんねぇ。だけど…破面にしか、見えなかった」
「…割れた虚の仮面が、黒崎サンの顔に残っていた…と？」
「ああ…」
「それ以外に何か違ったことは？」

「斬魄刀も斬月じゃねぇのを持ってた。でもあれは…ぜってぇ、一護だ」
もしそれが本当なら、整(プラス)が破面になった、ということだ。
だが、まずその経過だけで、半年近くの年月を必要とするはずだ。まず、整が虚化し、虚圏にて多くの虚を喰う。しかも一護の外見に、仮面や斬魄刀以外の変化がとくになく、そのものであったとすれば、最上級大虚(ヴァストローデ)の状態で仮面を外し、死神の力を手に入れたということになる。最上級大虚になるには、弱肉強食の世界である虚圏で虚の喰う量は、実に数万を超える。短期間のうちにそこまで成長できるはずがない。
しかも、最上級大虚から破面へと、完全なる進化を遂げるには、必要なものがある。
「……妙っスねぇ…」
浦原が手を顎に当てた。
「一つに、黒崎サンが亡くなられてからまだ日は浅いことと…もう一つは、虚が短期間で破面化するしろ、長期間で破面化するにしろ、完全なそれを遂げるには、『崩玉』が必要ということっス」
ハッとする。たしかに、『崩玉』がなければ、あそこまでの破面が生まれることはできないはずだ。
百十年前浦原が、平子達の虚化を解く為に開発した『崩玉』は、死神と虚の相反する魂の壁を取り払うことで、死神、もしくは虚が本来の魂の限界強度を超えた強さを手に入れられる、というものだ。ゆえに、四年前藍染が『崩玉』を手に入れて以降、破面の完成度は異常なまでに高まった。それまでは未完成な破面が多かったが、それを凌ぐほどの強さをもつ新たな者達が生まれた。だからこそ、数字を持つ破面から選抜された、殺戮能力に優れた成体破面の軍団・十刃(エスパーダ)は、『崩玉』によって生まれた破面達に立場を逆転させられるという事態が発生した。恐らく、十刃落ち（プリバロン・エスパーダ）は、藍染が『崩玉』を手に入れる以前に生まれた破面達だ。
しばし沈黙がおりると、浦原は自分の顔を扇子でパタパタと扇ぎな

がら、踵を返した。
「こんなトコでお話するのも何ですから、あがっていきますか？」
恋次は一瞬迷ったものの、何かこれで新たに情報が得られたらと思い、頷く。
浦原商店の奥にある居間に入り込んだ。
すると、彼は訝しげに眉を顰めた。居間の隅に、巨大な鞄とダンボール箱が二つ置いてあるのが目に留まったからだった。
「それじゃ、ちょっと『崩玉』の資料見てくるので、待っててください」
スタスタと居間を後にする浦原。
恋次はちゃぶ台の前に腰を下ろし、斬魄刀を鞘ごと抜いて脇に置いた。
少し遅れて、浦原商店の店員である紬屋雨（つむぎやウルル）が、湯呑みをお盆にのせて入ってきた。
「…どうぞ…」
彼の前に、緑茶の入ったそれをコトリと置く。
「おう、悪りぃな。…」
「いえ…」
雨は四年で髪がかなり伸びていたが、相変わらずそれをツインテールにしていた。特殊な形の前髪も健在だ。
会釈すると、お盆だけを持って立ち上がる。
「お…おい」
出て行こうとする彼女を、慌てて恋次が呼び止めた。
雨は不思議そうな顔をして振り返る。
「このデケェ鞄とダンボールはなんだ？　なんか散らかってるし…片付けでもしてんのか？」
「あ……、えと……それは……」
「お待たせしましたぁ～！」
雨が答えようとしたとき、浦原が居間に戻ってきた。
「あれぇ、雨、こんなトコで立って、どーしたの？」

「……いえ…なんでもないです…」
ペコリ、と頭を下げると、雨は居間からいなくなった。
浦原は恋次の正面に腰を下ろす。
「さて…『崩玉』のことっスけど、やっぱり藍染サンが中央四十六室で裁かれたあと、王土の方に持っていかれたらしいんです」
「王土！？　ってことは、王属特務にか！？」
「ええ。護廷十三隊でどうにもできないものをどうにかするのが、王属特務（あちらさん）の仕事でもありますからねぇ」
スッと浦原が瞳を細めた。
「ですが…その王属特務の力を以ってしても、『崩玉』の破壊は失敗に終わったみたいっス」
汗が流れた。
一護のことを聞きにきてみたら、とてつもない話になってきている。
ピッと浦原が指を立てた。
「そこで出てきたのが、“霊王”っス」
「“霊王”…！？」
「はい。破壊が無理ならと、“霊王”が直に封印を試みた。結果、四年間かけてその封印は成功し、王土の奥深くに『崩玉』は眠ることになりました。……が…」
恋次は湯呑みに入っていた緑茶を一気に呷った。苦い味が、口中に充満する。
「『崩玉』の封印によって、“霊王”は多大な消耗をすることになったんス。“霊王”がいなくなれば、尸魂界は崩壊します。そこで、今回一心サンが、急遽尸魂界に戻るはずだったんスよぉ」
眉間に皺を寄せる。
「…一心って、一護の親父だよな？　親父が死神だった・って話は前にも聞いたけど、何だってそうなるんだよ？」
「それは彼が、零番隊隊長だからっス」
静寂が訪れ、恋次はぽかんとした。

「…えーと…なんだって？」
「零番隊隊長なんスよ。一心サンは」
予想しなかった情報が入ってきて、彼は完全に混乱していた。零番隊隊長というと、王属特務のトップということだ。一護の父親が、そんな力を持っていたのか。
「…驚くのは無理もないと思いますが、アタシにも時間がないので説明しちゃいますね。“霊王”が不安定である以上、王属特務はこれまでより更に色々な不安を強いられることになります。だから隊長である彼に戻ってくるよう要請し、一心サンもそれを承諾していた。……ところが、その矢先に、黒崎サンがお亡くなりになられたんス」
唾を飲み込む。恋次は、緑茶を飲もうと湯呑みを持ち上げたが、中は既に空っぽだった。
浦原が、帽子を手でおさえながら、溜息を吐いた。
「とてもじゃありませんが、偶然にしてはあまりにもタイミングが悪すぎます」
帽子の下から、獣のような鋭い瞳を覗かせる。
「黒崎サンの死、そして破面化には、何かもっと特殊な力が働いている……と考えるのが妥当なところでしょう」
その言葉に、恋次は気を引き締めなおした。
「記憶…は、ありませんでしたね？」
まだ言っていないことをピタリとあててみせた浦原に、驚く。
「阿散井サンの顔見れば、そんなことすぐ分かりますよぉ」
笑って言う彼を不快に思いつつも、恋次はペタペタと自分の顔を触ってみた。
「その、記憶がないというのも、ただ破面となる過程で、流魂街に行く過程と同じように記憶を失うことになるのかもしれません。ですが、もしかすると何者かが故意に記憶を消した…とも考えられます」
頷き、恋次は口を開こうとして、「店長！」という声に遮られた。

襖が開かれ、浦原商店の店員であり、かつての鬼道衆である握菱鉄裁が頭を下げた。
「そろそろ…」
「ああ、そーっスね…」
ゆっくりと立ち上がり、あの巨大な鞄やダンボールの方に向いた。
恋次は首を傾げながら言う。
「どっか…行くのか？」
動きを止め、浦原は彼に向き直ると、申し訳なさそうに俯いた。
「…実は…この度、尸魂界に戻ることになったんス」
「なんだそりゃ！？　聞いてねぇぞ！！？」
自分を捕らえる気もなく、絶好の相談相手であることは確かだ。
それに彼はとても鋭い。心強い味方と、つい先程まで考えていた。
「すみません。アタシも驚いてるんですけど…実を言うと、行く隊にもちょっとあまり関わりがないもんで、抵抗はあるんス」
「……どこ、だよ？」
少し間を置き、静かに口にした。
「…十三番隊の、隊長をやることになったんです」
「はあ！？　十三番隊って…浮竹隊長に何かあったのか！？」
病状が酷くなったのかと、恋次が嫌な予感をしながら叫ぶ。
浦原は、肩を竦めた。
「その、浮竹隊長が……零番隊に昇進するらしくて、退位することになったんですよ」
恋次は、自分が知らないうちに尸魂界にも色々なことが起きていることを知り、ショックを隠せなかった。
そして、その尸魂界に、また一騒動起こるとは、予想だにしなかった。

Beginning is ZERO of number. 3（後書き）

凄く…書くのに疲れた章でした…。
物凄く疲れました。なんていうか、頭使う…。
『崩玉』も実はよく分からないのです。
破面をつくるっていうのでいいはずですが…間違えてたら嫌だな…。

恋次は立ち直ったみたいです。早いですねぇ。
これはまぁ…いずれ番外編みたいなので書きたいと思います。

早くも二時間が経過しようとしていた。
噴き出る汗を拭い、霊力を『双天帰盾』に注ぎ込み、効果を更に強くする。
その隣りでは、巨体の男・ハッチこと有昭田鉢玄が、彼女と同じように、前に横たえられているひよ里に手をかざして、己の鬼道に霊力を注ぎこんでいた。
二人から少し離れたところで、仮面の軍勢一行が、固唾を飲んでその様子を見守る。
「あの子が人間で、良かったな」
織姫を遠目に見ながら、ラブこと愛川羅武が呟く。たしかに、死神だったりしたらそう上手く見つけて、ここに連れてくることはなかなか難しかっただろう。
ドラム缶の上に腰かけ、リサは足をブラブラと揺らした。
「せやけど、ひよ里、目ぇ覚めたら怒るで。きっと」
「そーやろな」
舌につけているピアスを、口の中で弄ぶ。
「でもさぁ、どーしてはっちん、あの子連れて来いって言ったんだろ？」
白の言葉に、拳西は改めて織姫とハッチを見つめた。
「前に“術が似てる”って言ってたし、あの織姫って人間の能力と鬼道を合わせやすいんじゃねぇの？」
「でも、思ったより時間かかってるみたいだね」
ローズが膝をたて、そこに顎をのせた。
ふと、リサは平子に目を向けた。
「ところで、一護のことやけど、ほんまなん？」
「織姫ちゃんの言うてることがほんまなんやったら、ほんまや」
彼等が一護の死と、破面となってかつて仲間であったルキアや恋

次に刀を向けたことを知ったのは、織姫から聞いたのが初めてだった。
そもそも一護とは四年前以来会っていなかったし、とうの本人は霊力を失っていたので、霊圧の消滅も感じ取ることはできなかったのだ。
「また、何か始まるってか？」
ラブの科白に、ローズが肩を竦めた。
「考えたくも無いね」
白はいまひとつ理解がいかないのか、首をひねる。
「ベリたんも虚化した・ってこと？」
「バカ。虚化じゃなくて破面化だ。っつか虚化の特訓は俺達がみたんだろうが」
「べーっ！　分かってるよーっだ！」
すぐに訂正した拳西に向かい、白は舌を出した。
「どっちにせよ、何となく百年前と被るなぁ」
百年前――――藍染の企みによって、「実験材料」にされた平子達。彼等は、虚化の発症が原因で、尸魂界を離れることになったのだ。
「…気分、悪いわ…」
眉を顰める平子には、怒りの感情がよくみてとれた。そしてそれは彼に限ったことではなく、他の者も同じように、密かに歯噛みしていた。

それから約一時間後、織姫とハッチは同時に光を消し、崩れ落ちるようにして倒れた。
気付いた平子達は、慌てて二人のところへと駆ける。
「しっかりしぃや、ハッチ」
「はいデス…」
荒く呼吸をしながら、ハッチはリサに答えた。
また、織姫も肩で息をしており、彼女を平子が助け起こした。

「大丈夫か？　織姫ちゃん」
「あ…う、うん…ありがとう。大丈夫だよ」
《大丈夫なモンかよ！！！》
突然の大声に、織姫は身を竦ませ、仮面の軍勢全員は瞳をぱちくりと瞬かせた。
ポンッ、という音と共にポケットにつけられたヘアピンから出てきたのは、『盾舜六花（しゅんしゅんりっか）』の火無菊（ひなぎく）、梅厳（ばいごん）、リリィ、舜桜（しゅんおう）、あやめ、椿鬼（つばき）だった。
《長時間の能力発動で大丈夫なわけねーだろ！　このバカ野郎が！！！》
《わぁ！　椿鬼、我慢しろって言っただろ！？　ここは抑えなよ！》
主である織姫の顔の正面で怒鳴り散らす椿鬼を、リーダー格の舜桜が後ろから宥める。
すると、怒りの矛先が彼に向けられた。
《元はといえば、テメェもテメェだこのチョンマゲ隊長！　この女と一緒になって長時間耐えてるのがいけねぇんだ！　フラフラじゃねぇか！！！》
ちなみに、『双天帰盾』を担う六花は、舜桜とあやめである。
椿鬼と舜桜の間に、リリィが割って入る。
《ああ～、もう、やめなさいって。舜桜が疲れてるの心配なら、声量を抑えたらどう？》
《リリィさんの言うとおりですよ！　椿鬼さんもここは大人らしくですね！》
火無菊が一緒に怒ろうとするところで、
《儂は、たしかに長時間の使用は体に悪いので、感心せぬが》
《キエェェイ梅厳っ！！！》
悲鳴に近い声をあげ、恨むような視線を梅厳に送る。
『盾舜六花』のやりとり見、平子は呆れた様子で織姫に尋ねた。
「…何やねんな、こいつら？」
「えっと…あたしの能力（チカラ）？　かな…」

「“？”って何だ…」
ラブが苦笑する。
すると、あやめが一人で、織姫のところへスーッと近づいてきた。
《とりあえず、彼女の霊圧は安定しました…》
その一言で、全員から安堵の溜息が漏れる。
「ありがとう、あやめ」
《御礼なら、治療にあたっていたもう一人の方にしてください》
ハッチの方を見て、あやめは笑った。
《あの方のおかげで、私も舜桜も、いつも以上の力を発揮できたので》
《お、おい！？　舜桜！？》
突然、椿鬼の緊張した声が聞こえた。
一斉にそちらを向いてみると、舜桜がぐったりとしており、椿鬼に支えられて何とかそこに留まっているといった状態だった。
『盾舜六花』の全員が、慌てて近づく。
《舜桜さん、大丈夫ですか！？》
火無菊の声に、舜桜は力なく笑って答える。
《何…とか…》
《そんな顔で言われても、安心しないわよ！》
リリィが叫ぶと同時に、今度はあやめがふらりとバランスを崩し、下へと落ちていく。
《あやめ！？》
梅厳が、あやめの体を抱きとめた。
《…大丈夫。気を失っているだけのようだ》
《いや気を失ってんなら大丈夫じゃねぇだろ！？》
冷静に言う彼に、椿鬼がすかさず突っ込んだ。
彼等は織姫の能力であって、彼女自身だ。その能力がここまで疲れているとなると、織姫の疲労は言うまでもなく絶大である。
《ちっ…！　おい、女！　俺達はとりあえず戻るが、さっき言ったように、自分の能力の程度ぐれぇ知っとけよ！！！　俺とか力有り

余ってるんだからなっ！？》
　最後の余計な言葉に対し、眉を顰めたリリィが彼の頭をスパンと平手で叩いた。
《なんだよ！？》
《ちらっと文句つけないの。それじゃ、またね、織姫さん》
　すると、『盾舜六花』は一瞬で花形のヘアピンに姿を変え、カチン、と二つ、その場に落ちた。
「…えらく…静かなったなぁ…」
　リサが腰に手をあて、息を吐く。
「あはは…ご、ごめんね…」
「とりあえず、休んだ方がいいんじゃない？　寝心地は悪いかもしれないけど、毛布敷くから」
　未だに息が荒く、顔色も悪い織姫を見かねて、ローズは階段の陰に積み重ねていた毛布を取り出した。
　四年前。藍染との戦いの際に、ひよ里は市丸ギンによって体を両断されてしまっていた。ハッチの治癒技・“五養蓋”と、卯ノ花の鬼道によって、思いのほか傷は早く完治したひよ里だったが、彼女は目を覚まさなかった。
『あとは彼女が生きる事を諦めなければ、いずれ目を覚ますでしょう。彼女がそれを諦めるかどうかは、私よりも貴方がたの方が、よく知っている筈です』
　誰もが目を覚ますと思っていた。それに、ひよ里はこの程度で生きることを諦めるような素直な子でもなかった。
　しかし現実では、四年経っても眠り続けている。
　異変が起きたのは、まだ朝早い時間だった。
突然ひよ里が魘され始めたのだ。この四年間ずっと、ただ静かに眠り続けていたのに、身をよじりながら意味の分からない呻きを何度も漏らす。霊圧までもが乱れ始め、ハッチはとっさに“五養蓋”を使ったが、この治癒はあまり効果を示さなかった。
『…織姫サンを…連れてきてもらえまセンか』

ハッチが治療にあたりながら、平子達に言った。
『ワタシだけの力でハ、とても無理デスが…ひょっとすると、織姫サンの力ナラ…』
それは大当たりで、二人の光に包まれたひよ里は、やっと落ち着いて定期的な呼吸をするようになった。そして、その治療の間、ここに来るまでに歩きながら織姫が話してくれた一護のことを、平子達は考えていたというわけだ。
織姫は、ローズが取り出した毛布を見て、慌てて手をぶんぶんと振った。
「だ、大丈夫です！　それに、ホラ、あたし、大学行かないといけないし！」
午前の授業にはもう間に合わないが、今から急げば何とか六時限目くらいには間に合いそうだ。
「その状態で行く気なのか？　大学って命削ってまで行くとこなのか？」
拳西がヘラヘラと笑う織姫を指差しながら、ローズに問う。
「いや僕に訊かないでくれないかな」
織姫が辛うじて呼吸を整えると、ふらつきながらも立ち上がって、床に落ちているヘアピンをポケットに付け直した。
「そうだ。ただ、お願いがあるんです、平子君たちに」
仮面の軍勢は、皆揃って顔を見合わせる。
「…黒崎君のこと、何でもいいから、何か知ってることがあったら教えてくれませんか？」
「そないなこと言うても、ウチらはあんたから聞いて初めて知ったんや。何も知るはずあらへんやろ！」
リサの言う事も全くである。織姫は俯いた。
「…まぁ、でも、分かった」
平子が徐に顔を上げ、並びのいい白い歯を見せて笑う。
「一護のこと、何かしらこれから掴んだら、織姫ちゃんに知らせる。それでええな？」

仮面の軍勢全員が、平子を凝視した。
織姫は、「ありがとうございます！」と頭を下げると、危なっかしい足取りで外へと出て行った。
それを見送ったラブが、手に持っていた少年週刊雑誌・ジャンプを閉じる。
「…いいのか？　シンジ」
「何がや」
「織姫ちゃんに知らせるって話だよ」
ローズは、出した毛布をもう一度畳みなおして、階段の下に再び積み重ねる。
「ええ。人間嫌うひよ里にはあれこれ文句言われるやろし、お前等もあんま賛成しとらんのも分かっとるけど。……一護のためにもなぁ」
一護は、仲間だ。死神であり、仮面の軍勢でもある彼は、平子達の仲間なのだ。仲間を見捨てるなど、有り得ない。それは、かつて五番隊隊長をやっていたときから変わっていない、平子の自分への掟だ。
拳西が、面倒臭そうに言った。
「違げぇよ。俺達が言ってんのは、ひよ里に殴られることがいいのか・ってことだ」
その言葉に、平子はぽかんとなる。
彼等が、笑っていた。平子に対し不満を持っている者は、いない。
苦笑して、頭を掻いた。
「……それは、それや」
「シンジ、今のうちに御礼言っとくわ。ありがと」
「縁起でもないこと言うなやリサ！」
「ばいばーい、シンジ～」
「白！！」
全員が呆れたように笑っている。平子はやれやれと頭を振ると、顔を俯かせ、ゆっくりと言葉を紡いだ。

「……しゃあない……俺らも久々に…動くとしよか」
仮面の軍勢一同、緊張に満ちた顔になったのは、言うまでもない。

＊　＊　＊

九番隊隊舎牢の中で、朽木ルキアは正座をして、高い位置にある小窓を通して、小さな空を眺めていた。ここ数日間、ずっとこの状態だ。別に誰もわざわざこの隊舎牢にやってきたりしないし、何も持っていないゆえに脱獄は無理だ。
今現在、斬魄刀は取り上げられており、彼女の両手首には白銀の手錠がつけられている。かつて藍染が死を装ったとき、ギンが殺したと思った雛森は、怒りで我を忘れて斬魄刀を振り回したため、隊舎牢に入れられたことがある。そのとき、彼女は鬼道を用いて脱走したのだ。そのときのことがあって、技術開発局で対策用の物が作られたらしく、霊圧を完全に封じ込めるこの手錠が作られたのである。実際はこういった手錠は元々存在したが、霊圧が大きすぎる場合封じ込めきれる確率が低くなるので、強化したものが作られたというわけだ。
足音が聞こえ、ルキアはゆっくりと振り向いた。鉄格子の先に、檜佐木が見えた。
「…檜佐木隊長…」
「…よう。思ったより元気そうだな。朽木」
たしかに、以前六番隊隊舎牢に収容されていたとき、彼女は生きた顔をしていなかった。しかし今、ルキアの瞳に光はなかったし、ただの無力な罪人だった。しかし今、ルキアの瞳はとても強く、罪人の顔ではない。
「……檜佐木隊長……ここから…出していただけませぬか」
「ダメだ」
檜佐木を睨み付けた。失礼であることは承知の上だ。
ルキアは夜光によって尸魂界に連れ戻された。目が覚めた時には既にこの隊舎牢に入れられていたが、見張りから話を聞いたところ、

白哉と夜光と檜佐木の三人が、必死になって減刑を請い、結果として隊舎牢に入るだけに留まったそうだ。総隊長も、さすがに隊長格三人の申し出となると、なかなか決断しかねたのであろう。
また、浮竹が十三番隊の隊長をおりて、零番隊に昇進したという話もあとで聞いたことで、ルキアは大変驚いていた。浦原がそこに入ってくるという話を聞いた時は、頭が混乱しそうになったほどだ。
書簡を出す相手であった浮竹がいなくなったということに寂しさを感じたが、そればかりを気にしてはいられなかった。
「知ってるぜ。瑠璃谷から聞くまでもなかったが、お前等死神代行の魂魄の行方を探ってるんだってな」
「一護は私達の大切な仲間です。それを放っておくのもいかがなものかと」
「だが奴の足取りは一切つかめてないんだろ？　技術開発局の霊圧探知にも、一応局の連中が注意して見てるらしいが引っかからないらしいしな」
ルキアが訝しげに眉を顰めた。
おかしい。一護は、かつてとは多少違うといえど、彼と判別できる霊圧のまま、現世に一度現れている。なのに霊圧探知に引っかかっていないとはどういうことだ。
「…どうしてそこまですんだ」
「え」
「どうして死神代行をそこまで気にかける。自分がこんな罰受けることになってまで、奴に対しすることなのか？」
「はい」
即答したルキアに、檜佐木は言葉を詰まらせた。
「一護は人間なのに、最後まで私達死神のために、尸魂界のために戦ってくれたのです。あやつが力を失った原因は、我々護廷十三隊の弱さでもあるはず。いえ、一護ほど戦う覚悟があったのか怪しいところです。それに」
ギュッと拳を握りなおす。

「一護は私を何度も救ってくれました」
忘れたことなどない。
ずっと自分が、彼の運命を捻じ曲げてしまったのだと思って、自分を責めていた。でも彼は、こんな自分に感謝すると言ってくれた。双極の丘で、処刑台を破壊した一護は、これまでになく強くなっていた。そのときに初めて、「こいつに死神の力を分けてよかった」と思えた。
一護は救ってくれたのだ。どん底に沈み込んでいた自分を、自らの身を砕いてまで。
だからその命を大切にしようと思ったし、仲間としてあり続けることを誓った。
「今度は私が、一護を救う番です」
迷いなく言い切るルキアに、檜佐木は目を細めた。
面倒で、頼もしい副隊長だ。
「……でも、出すわけには、いかねぇんだ」
だが、隊長として、言うべきことはある。
「お前は現世に行く際、副官章を外して行った。これは職務放棄と見なされる。一応減刑されたおかげでこの程度だが、副隊長の座が危うくなったのも事実だ。こういうことになること、分からなかったわけじゃねぇだろ」
ルキアが気まずそうに瞳を彷徨わせる。
「どうして外した？」
「……」
見張りの死神が、居心地悪そうに俯いた。
申し訳ないと思いつつも、檜佐木はただ黙って、ルキアの答えを待った。
「…檜佐木隊長の仰るとおり…私は副隊長として、とるべきではない勝手な行動をおこしてしまいました。……それは何度も考え、そして、本来なら絶対にやってはいけないことだったことは、よく分かっております……」

意を決し、顔を上げて、檜佐木の瞳を真っ直ぐに見つめた。
「現世に赴く際、私は死神をやめる覚悟はできていたのです」
ぷつっ、と、何かが切れる音がした。
檜佐木が凄い形相で叫んだ。
「馬鹿野郎！！！！」
「莫迦で構いませぬ！！！」
彼の怒鳴り声と同等のレベルで、激しい叫び声をあげて反論した。
「私はハンパな覚悟で現世に赴いたつもりはございませぬ！　恋次など処刑も覚悟の上で現世にいるのです！　仲間を救うのに自分のことを省みる必要はありません！！！」
檜佐木は、ここまで強く仲間を思う気持ちがあることに驚いていた。それと同時に、もっと自身の感情を抑えることができるようになってからではないと、ルキアは副隊長として相応しくないことがよく分かった。
仲間を思う、強すぎる気持ちは、ときにその仲間を傷つけることになる。
そのことを、何とかして伝えなければと、檜佐木は言葉を選んで、口を開きかけたときだった。
全てを包み込むような、強大な霊圧が突如現れた。檜佐木とルキアが同時に目を見開く。
「一護……！」
この霊圧は、間違いなく、黒崎一護のもの。しかしそれに混ざった、慣れない虚の霊圧が、ただ単に彼が現れただけではないことを物語っていた。
「どういうことだ！？　くそっ！！！」
ルキアも、たった三日であの一護を忘れることはできなかった。この牢の中にいて、破面となった一護の顔を思い出すことは度々あった。その都度、「何があったのだ」と一人呟いていた。見張りは大変不思議そうな顔をしていたが、気に留めた様子はない。
この重い霊圧は、その彼が、尸魂界に現れたということだ。

檜佐木が慌てた様子で踵を返す。
「お待ちください！　檜佐木隊長、私も！」
「何言ってんだ！？　出すわけにはいかねぇんだよ！」
「今の一護は、一護ではないのです！！！」
「…？」
立ち上がり、鉄格子を掴みながら必死に訴える。
「お願いします！　一護のところに行かせてください！　私には、あやつに訊かねばならぬことがあるのです！」
今の一護は、耳を貸してくれないかもしれないけれど。それでも尋ねたい。自分達は敵でないことに気付いて欲しい。否、何より、思い出して欲しい。
檜佐木が苦しそうに顔を歪めた。以前なら、多分同情して出してしまっている。しかし、現在彼は、隊長という肩書きがあるのだ。
「……すまねぇ！」
言って、走り去る。
「檜佐木隊長っ！！！！！」
ルキアの叫び声に、隊長となった檜佐木は振り返らなかった。

Beginning is ZERO of number. 4（後書き）

仮面の軍勢をまともに小説に出すのは初めてです。
正直言って彼等はキャラが濃すぎてどう操ればいいのか分かりません。とくに白（ましろ）。
だから盾舜六花に出てきてもらいました。すごく助かった。
ありがとう椿鬼。↑
ルキアがどうなったのかな、と思われた方が多かったようで。はい。
やっと出せました。当然ながら牢の中。
檜佐木はすごく複雑です。ルキアの意見に沿ってやりたいけど、副隊長としてやってはいけないことをしたのは事実だから、隊長の自分が許すわけにはいかない・って感じです。

さて、今回も分かりにくいと思うので一応。「＊」の後から尸魂界の話になってますけど、この時点で一護が前に破面となって現れた日から三日。つまり、ルキアが連れ戻されてから三日が経過していることになってます。文章でちらちら説明加えてるので分かるかなとは思いますが。

夜光だすつもりでしたがやめました。
彼女はね、うん…次回です。今すごくイライラしているんですよ、雛森涙目です（苦笑）

そんなこんなでドタバタした中で書き上げてみました。
頑張るので読んでやってください。
よければ感想等お願いします。

We never call him but he answers us.

ふぅ、と溜息を吐きながら、廊下を歩く。随分と久しぶりに身に纏った、その白い羽織が異常に重く感じられた。

（…居辛いっスねぇ…本当に…）

この感覚も、かつて十二番隊隊長に就任したときに味わったが、度合いは今回の方が遥かに上だった。

多分、浮竹が十三番隊隊長をやめる際に、隊士達に言い聞かせ、浦原を受け入れるようにと命令したのだろう。他でもない、皆の大好きな隊長の願だ。隊士達は浦原が十三番隊に来たとき、満面の笑顔で迎えてくれた。二人の三席・仙太郎と清音も、何かと気を遣ってくれ、就任二日目には彼をお茶に誘いに来た。

だから、とても辛いのだ。

（まァ…こうなろうだろうとは、思ってましたが…）

あのとき、副隊長のひよ里は堂々と浦原を嫌がり、受け入れられないと全態度で示していた。隊士達の目の前で、よろしく、と差し出されてきた浦原の手を派手にひっぱたいたくらいだ。おかげで、どの程度心を開いてきてくれているのか、年月を重ねる中で逆に分かりやすかった。

だが、今回の隊士は受け入れようと努めてくれているのだ。内心では、嫌で嫌で仕方が無いのが、何となく感じられてしまう。気にしないのが一番なのだろうが、それは難しかった。

「……はぁ～…」

「あー！　隊長！」

前を見てみると、仙太郎と清音がドタバタとこちらに駆けてきていた。

「どうしたんですか？　溜息なんか吐いて！」

「慣れられねぇんスか！？　俺で良ければ話聞きます！」

「ああっ、小椿ずるい！　あたしも！」

ほら、始まった。明らかに無理して、話しかけてきている。
「大丈夫っスよぉ、ただちょっと疲れただけっスから」
だから、喧嘩しないで。
わざとしている喧嘩の仲裁に入るのも、酷である。
何より、十三番隊は、あまり浦原の性に合っていない。のんびりとしたこの隊と、研究ばかりの十二番隊。隊士の特徴を見ても、全く異なっている。
「そういえば、清音サン。昨日の緑茶、美味しかったっスよ。ありがとう御座います」
「わぁ、本当ですか！？」
そうやって、あまり嬉しくなさそうに喜ぶ。
「何ーっ！？　オメー、隊長にワイロ渡しやがったんだなっ！？」
“ワイロ”って何よ！　人聞き悪いわね！　贈り物でしょー！？」
羨ましそうでもなく、二人はズルイと言い合う。
（……キツイっスねぇ…どうも…）
浦原が一人、苦笑した、瞬間。
「えっ！？」
「なっ！？」
「これは…！？」
三人の表情は急変し、天を仰ぐ。
知っているが、知らない霊圧だった。馴染みのあるもので、しかしそこに、虚のようなどす黒いものが混ざっている。
――――…一護が、破面になってるのは…知ってるか？
浦原の脳裏に、恋次の言葉が過ぎっていった。
「……清音サン。仙太郎サン」
空を見上げて呆けていた二人は、慌てて隊長に視線を戻す。
「は、はいっ！」
「何ですか！？」
隊首羽織を翻し、言う。
「ちょっと見てきます。できるだけ、隊舎から出ないでくださいネ」

そして浦原は、瞬歩で消えた。

無心になってやっていたら、あの恐るべき書類は全て片付いてしまった。

感覚的にはあっという間でも、体は長い時間たっぷり働いていたので、妙にだるい。目も疲れていて、日番谷は眉間を軽く揉んでから緑茶に口をつけた。

（ったく……色々起こりすぎだ…）

片付いた書類の山を、見る。後から後から入ってきた書類の枚数により、いつもより随分量が多かった。これを全て終わらせたと思うと、自分は想像できないような長い時間、ずっと書類と向き合っていたのだなと理解できた。

浮竹の零番隊への昇進。朽木ルキアの強制帰還及び投獄。浦原喜助の永久追放の免除及び十三番隊隊長就任。

普通、こんなに沢山のことが数日そこらで起こることがあろうか。多少の静かさをもっていた瀞霊廷の死神が落ち着きを失ってドタバタするのも当たり前だ。

「たーいちょっ♪」

高い声と共に、目隠しをされる。すると、必然的に彼女の胸が、日番谷の後頭部に押し付けられる形になる。

「…何やってんだ、松本」

「やだ隊長、何で分かったんですか！？」

「逆に訊くが、何故分からねぇと思うんだ？」

背後にいた乱菊が、彼の横に移動して、茶色の器を取り出した。中には、色とりどりの甘納豆が盛られていた。

「…どうしたんだ？　それ…」

「さっき雛森が届けてくれたんですよ。三十分くらい、ここに居座ってたんですけど、気付きませんでした？」

「……」

自分の集中力に、呆れた。
相手が雛森とかならまだしも、マユリ等が入ってきて、それに気付かない間に執務室を改造されたりしたら、たまったものではない。
「…でも、珍しいな。あいつがこの忙しいとき、自分の隊放って他隊に来るなんて」
この数日間で様々なことが起こり、それに関する資料や書類が、全隊に大量に渡されている。処理に追われている隊は少なくなく、五番隊もその一つであったはずだ。
「それが…瑠璃谷隊長が怖いらしくて」
「瑠璃谷が？　雛森と仲良かっただろ」
夜光は元々、上とか下とか、そういった関係を一切気にしない。それに彼女は雛森と同じで、本が大好きだ。二人揃って休暇をとり、図書館に行ったりもしていたはずだ。日番谷達から、雛森に関する事情を聞いたときもにこやかに頷いていたし、彼等が念を押したこともあってか、夜光はとても雛森のことを大事にしてくれていた。雛森も彼女に懐いていたし、怖いなどという言葉を聞いたことはない。
乱菊が、首をひねる。
「さぁ。よく分からないんですけどねー…」
何があったのだろう。
一応様子をみに行ってみようと、日番谷が湯呑みを置く――――。
「っ！？」
「！！？」
二人は、体が重くなったような気がした。
霊圧だ。それも、これは、ただ彼の霊圧というわけではなく…。
「松本！　警備を固めとけ！」
「はい！」
斬魄刀を携え、二人は執務室を飛び出すと、それぞれの行く先へと足を向けた。

五番隊隊舎の裏庭で、夜光は隊首羽織を脱ぎ捨てて、竹刀を巨木に向けて幾度も幾度も振るっていた。
彼女に恐る恐る近づいていく隊士は、たった今あみだくじで決まった哀れなる死神である。
「あ、あの…隊長…二番隊から、書類が…」
「隊首室の前に重ねておいて。あとでやるから」
「で、ですが、もう重ねてある書類の量が、あまりに――――」
夜光が、隊士を睨み付ける。普段は温厚だが、今はその面影がなかった。どちらかというと、十一番隊寄りだ。
「っせぇな！　置いとけっつってんだよ！！」
「ひぃ！！！　す、すみませんそうします重ねます喜んで――――――っ！！！」
隊士は猛ダッシュでその場を後にする。
頬を伝う汗を鬱陶しそうに拭うと、夜光は再び竹刀を両手で構える。
（…ムカつく…）
ギリッと歯を食いしばる。
竹刀を高く振り上げる。
（……ああっ……もう……）
目を血走らせて、
（本っ当に、腹立つっ！！！！！）
一気に、振り下ろした。しかし、所詮竹刀だ。巨木の幹は、少し傷つけられただけで、微動だにしなかった。
肩で大きく息をし、岩の上に置いていた水筒を手に取り、飲んだ。
「あ～…イライラする…」
何にここまで腹を立てているのか、自分では分からなかった。
だが、ルキアを尸魂界に連れ戻してから、夜光はずっとこの調子だった。自分はただ、総隊長の命令に従っただけだ。隊長として、正しいことをやったのだ。

「…っもう！！」
力一杯、水筒を地面に投げつけた。
どうやって発散しても、し切れない。仕事が手につかない。隊士には申し訳ないと思いつつも、つい八つ当たりをしてしまう。
（…でも…仕事、しなきゃだよなぁ…）
長い溜息を吐き、隊首羽織と水筒を拾い上げると、隊首室へ戻ろうと足を進める。
すると、
「えっ…！？」
突然の霊圧の出現に、体を硬直させる。
彼女には、見に覚えの無い霊圧だった。死神のような、しかし虚のような、妙な霊圧。
発生源は、瀞霊廷の上空だ。瞬歩を使えば、そう遠くはない。
「っ…ああ～、もう、バカ！！！」
夜光は瞬歩を使おうとして、やめた。
斬魄刀を部屋に置いていることを思い出したのだ。大急ぎで隊首室に戻り、竹刀を投げ置いて、立てかけていた斬魄刀をひっつかみ、走りながら隊首羽織を羽織って、星陰冠（せいいんかぶり）を背中に負う。
縁側から上空へと、飛び出した。

その、霊圧の発生源へ向かう途中、夜光はふと足を止めた。どこからか、叫び声が聞こえる。視線を巡らすと、ある小窓から聞こえてくることに気付いた。
（…なんだろ…？）
本当は、寄り道などするような状況ではないはずだが、好奇心の大きい彼女は、そっとそこに近づいた。そして、顔を強張らせる。
そこは九番隊隊舎牢の小窓であることを、悟ったのだ。
叫び声は、間違いなくルキアのものだったから。
（……往生際が悪いよ、ルキア…）
下唇を噛み締め、夜光は踵を返すと、霊圧の発生源へと向かった。

鉄格子の近くに立っている見張りは、オロオロしながら、延々と壁を叩き続けるルキアに声をかける。
「あ、あの…朽木副隊長…そろそろ、お止めになられた方が…」
しかし、その声は彼女に届いていない。
手錠をつけられた両手で、何度も同時に壁を叩いて、小窓を見上げながら叫ぶ。
「一護！　一護！！　おるのか！？　聞こえるか！？　護廷十三隊に危害を加えてはならぬ！　そんなことになれば、お前は本当に尸魂界の敵になってしまう！　お前がそんなことをしていいはずがない！　一護！！！」
「朽木副隊長！　霊圧を封じられた状態での興奮は、お体に負担が！！」
必死に声を張り上げる見張りを振り向き、睨む。
「ならば私をここから出せ！！！」
「も、申し訳ありませんっ！！！」
それはできない、と首を横に振りながら、土下座する。
歯噛みし、ルキアはまた壁に向き直ると、両手を前に突き出した。手錠の鎖が、チャラ、と音を立てる。
「破道の三十三！　“蒼火墜”！！！」
ポヒュッ…。
鬼道を用いても、霊圧が封じ込められていて、威力は全くといっていいほどない。普段通りなら、この程度の壁を破壊することなど、造作も無いことだろうに。
「くそっ！！！」
だん、と壁を殴る。震える拳に、力を込めた。
「一護…」
虚に囚われた、魂。自分に襲い掛かる、大切な人。吸い込まれるような、黒い瞳。そこに映る、自我なき感情。

自分が向けた、刀。それに刺さる、あの人。

――――悪い。キツかったろ。

徐に置かれた、自分の背に感じられる、温もり。

――――ありがとな。

自身の血に塗れながら、掠れた声で言う。

――――ありがとう。

淋しくないと言いつつも、淋しそうな顔で礼を述べた、霊力を失っていく一護。

重なる。海燕と、一護が。

重なる。あのときの自分と、今の自分が。

（…嫌だ）

体が、震える。

（…どうしたら、いいのですか…）

壁に額をくっつけた。霊圧が、感じられる。

（分かりませぬ…）

力なく、へたりこむ。

自分はもう、副隊長なのに。あの人と同じ階級に、なってしまったのに。

（分かりませぬ……海燕殿…！）

今でも、かつての師に頼りたくなる自分が、どうしようもなく情けなかった。

各隊の隊長格が、上空に集まった。

そして、夜光以外の誰もが目を見開いている。
彼等の視界にいるのは、破面の姿をし、右目が割れた虚の仮面で覆われ、オレンジ色の髪をした男だった。彼は現世に来たときと同じように、マントを身に纏ったり、フードを被って顔を隠したりはしていなかった。だから、一目見て、誰もが唖然とする。
（オレンジの髪……ってことは…あれがルキアや恋次が捜していた、死神代行…？）
しかし、どこからどう見ても、破面だ。
夜光は訝しげに眉を顰める。
「隊長！　警備、整って…」
下から大急ぎで飛び上がってきた乱菊が、彼を目にして固まる。
「…ちょっと……何、で…」
走馬灯のように、頭の中で、故人であり、幼なじみだった市丸ギンとの思い出が流れて行く。彼もまた、破面と似た白い服を身に纏って、乱菊らと敵対して。自分を殺すと見せかけて、鬼道で気を失わせて、無茶をして。自分を護ろうとして、散っていった。
（…ギン……）
血を吐いて、霞んだ瞳で、乱菊を見上げていた。それまでも、あの幼なじみと刀を交えるなんてことはしたくなかったのに、彼は自分を護ろうとしてくれただけなのに、必然的に敵対してしまった。
嫌な予感が、止まらない。
時が止まったような彼等の中で、日番谷が、やっとの思いで声を発した。
「…黒崎……？」
目の前にいるのは、紛れもないあの死神代行なのに、何故か確信がもてない。
ブラウンの瞳が、彼等を順に映していく。
眉間の皺は、相も変わらず深かった。

We never call him but he answers us.

一護がでてくるとまた大変なことになりますので、ちょっと一呼吸置こうか、というお話でした。
浦原さんは珍しく困ってます。やっぱり浮竹さんいてこその十三番隊ですし、百年以上ずっと彼が隊長だったのに変わったら、皆も嫌がるでしょう。それを浮竹さんは勿論見抜いていますので、彼は先手を打ったわけですね。結果として浦原さんは寧ろ困ってるんですけど（苦笑）

日番谷隊長、仕事熱心です。夜光は全然やってないんですけどね。
この話で色々共感誘えたりしないかなぁ、とか思ったり。
次回は一護と護廷十三隊ですね。はてさて、どうなることやら。

本当に嬉しいことに、この小説のお気に入り登録数が予想を遥かに上回りまして。恥ずかしいやら驚くやらです。ありがとう御座います！

忙しい今日この頃ですので、次の更新はいつになるか分かりませんが。良ければ気長にお待ちくださいませ！

We never call him but he answers us.

あまり気乗りはしないまま、俺はその日を迎えた。尸魂界に行くために、ユウが昼寝し始めた瞬間を見逃さず、自室を離れた。正直、なんであいつは俺の部屋でいつも寝るんだ。赤ん坊じゃあるまいし。…いや、懐いてくれてるんだけどさ。

俺は、自分の何かが消え、壊れるような予感があって、尸魂界に行くことを拒んでいた。でも、いざ行こうとしてみると、案外俺自身は落ち着いていた。ただの、「偵察」だ。ちょっと探査神経（ペスキス）で死神共の霊圧の大きさを探ってくればいい。もし戦わなきゃいけねぇような…いや多分そうなるだろうけど、そのときは俺は遊び程度に戦って、相手の力量を分析して、虚圏に情報として持ち帰ればいい。情報なんて、多けりゃ多いほどいいに決まってるからな。

それに、俺は破面で、あいつらは死神。敵同士だ。何も、迷うことなんかない。

そう考え出すと、尸魂界に行くことをそこまで拒む必要もないような気がしてきた。だから、気乗りはやはりしないけれど、かなり普通に尸魂界に足を踏み入れることができた。

相手は、敵。俺の、敵。そう割り切れば、どんなものも怖くない。何故、今更になってこんなことに気付いたんだろう。

尸魂界で、自分がどうなるのかを深く考えもせず、俺は来た。

予め分かってさえいれば、俺は絶対に、来なかったのに。

俺はまだ、分かっていなかった。自分が、いかにヤバイところにいるのかってことを。

大して強くも無い風が、邪魔に思えた。

それほどに、この空間は静かだ。だが、皆が目を見開いている。
唾を飲み込む音さえも、全員の耳に届きそうだ。
「……すげぇな…」
ポツリ、と一護が呟く。
「まだ俺来たばっかなのに、こんなにすぐ集まるなんてさ」
探査神経を研ぎ澄ましてみた。
かなりの霊圧だ。さすが隊長格である。
（……一人、いねぇな…）
まず、自分の前に並んでいる十一人の隊長格の霊圧。そして、一番隊隊舎の方から感じられる、異常な大きさの霊圧で、計十二人分。
ふと、脳裏に、自分の肩を掴んでいた、あの変な赤髪の死神が蘇る。彼の霊圧は、かなりの大きさだった。
（…あいつか…）
あまり、隊長という風格ではなかったが、思い当たるものがそれくらいしかなかった。
納得し、改めて彼等を眺め、眉を顰める。
「…何で攻撃してこねぇの？」
また、彼等もそうだった。
現世に赴いた時と同じように、驚愕して固まっている。
たしかに、突然破面が現れたら、驚きはするだろう。しかし四年前に戦闘したことがあるはずなのに、死神達の驚き方は尋常ではない。
「黒崎一護」
――――ピクッ。
一護が、振り向く。
夜一の真似をしたのだろう、随分と髪が伸びた、二番隊隊長兼隠密機動総司令官・砕蜂が、なるべく平静を装って尋ねる。
「貴様、その格好は…どういうつもりだ」
見ていて、明らかに無理をしていた。何とか声を抑えてはいるが、心の底から怒っているのが一目瞭然だ。

険しい顔つきの砕蜂に対し、負けないくらい顔を顰める。
――――“どういうつもり”…って…？
ザワリ、と一護の中で何かが蠢く。
「質問の意味が分からねぇ」
なんだろう。何か、気になる。
――――この、女の隊長…さっき、俺のこと、何て呼んだ？
「ま、いいや。自己紹介まだだったよな？」
オレンジの髪をガシガシと掻き、溜息を一つ。
「俺は破面の、ナリア＝ユペ＝モントーラ。よろしく」
同時に、全員が息を呑んだ。
別人ではない。間違いなく、黒崎一護だ。なのにどうして、聞いたことのない名を名乗るのか。
呆けている中、砕蜂が一思いに叫ぶ。
「取り押さえろ！！！」
どこに控えていたのか、隠密機動が一瞬にして彼を取り囲み、抜刀する。

――――今の一護は、一護ではないのです！

哀しそうな顔で、悲痛な声でそう話したルキアを思い出す。直感なのか、檜佐木が慌てて叫んだ。
「待て！　だめだ！！！」
刹那。血を散らせたのは、隠密機動の全員の方だった。
「何っ！？」
砕蜂にすら、見えなかった。否、分からなかった。
一護は今、刀を抜いたのか？
「こんなもんかよ…」
明らかにつまらなさそうに、落下していく彼等を見送る。
すると、上昇した霊圧を頭上から感じることに気付き、彼は空を見上げる。そこには、凶悪な笑みを浮かべている十一番隊隊長・更

木剣八と、その肩にのる同隊副隊長・草鹿やちるがいた。
「いっけぇ、剣ちゃん！」
一護はとっさに、振り下ろされてくる斬魄刀を響転（ソニード）で避ける。
「よう一護！　なんで行方不明だったテメェが、んな格好してんのか分からねぇが、随分腕上げたみてぇじゃねぇか！！！」
声を発しているだけで、空気が震えるほどの霊圧。
だが、彼はそんなことを気にしている余裕はなかった。
――――行方不明だった、俺…？
一護は密かに喉を鳴らして、混乱しそうになる頭を必死に回転させる。
（イチ…ゴ…？　また、この死神も…俺をそう呼んだのか…？）
名乗ったはずだ。自分は、ナリア＝ユペ＝モントーラだと。それなのに、どうしてこの死神は、なおも自分を“イチゴ”と呼ぶ？
やはり、虚圏で考えた時と同じで、何かがたりないような気がしている。そんな自分も、気持ち悪い。
（何でだ…！？　知らねぇはずなのに…何で…！？）
次に、下方から勢いよく上がってくる霊圧に気付き、あわてて横に跳ねてかわす。
斬魄刀を抜いた、日番谷だった。
「黒崎！　どういうことだ！？　説明しろ！」
一護が、目を見開く。
（ク、ロ……サキ……？）

――――クロサキ　イチゴ

間違いない。たりないものは、それだ。
「何故テメェが、破面になってやがる！？」

（俺が……破面に…『なった』…？）
自分は元々破面だ。でなければ――――一体、何だ？
一応斬魄刀を抜きつつも、戦況を眺めていた夜光が眉を顰める。
（…なんだろ…？）
変な感じがした。
丁度そのときに、下から雛森が、夜光の傍らにまで舞い上がってきた。
「隊長！」
「桃…」
「…あれって…」
雛森は、日番谷が刀の切っ先を向けている、その対象を見て言葉を失う。
「…死神代行の、黒崎…一護さん…？　でも、なんであんな…」
「…やっぱり、あれ、恋次とかの言ってた死神代行なんだ？　……一応、桃も構えておいた方がいいよ」
夜光の言葉に頷き、彼女も斬魄刀・飛梅を抜いて構えた。
日番谷が、必死に声を届かせようと、叫ぶ。
「黒崎！！！」
「っ…うるせぇ！！」
一護が抜刀し、日番谷を斬りつける。しかし彼は、それを氷輪丸で辛うじて受け止めた。ほとんど、偶然だった。
「死神ってのは、どいつもこいつもこんなに馴れ馴れしいのかよ！？　人を意味分かんねぇ名前で呼びやがって！！！」
喉に詰まったものを吐き出すように、叫ぶ。
刀を交えて静止したまま、日番谷は一度眉根を寄せたが、すぐにハッとした。
「お前、まさか記憶が」
しかし、その言葉を紡ぎ終える前に、彼は一護に下腹部を斬りつけられた。鉄の味が口中に充満し、紅い液体を吐き出すと、体のバランスを崩して落下する。

「隊長！」
乱菊が傷を負った日番谷を受け止め、一護を見上げる。
「一護、あんた…」
その科白を耳にし、歯軋りした。
（この、副隊長の、女もかよ…！？　また俺を、“イチゴ”って呼ぶのかよ…！？）
“イチゴ”とは、一体、何だ？
ふいに、再び殺気を感じたので、彼は飛び退いた。
刃毀れをした斬魄刀を振り回し、剣八が舌打ちする。
「折角抜いたのに、何で逃げんだよ一護？　つまんねぇだろうが！」
手加減をやめれば、この程度、一護にとっては大した敵ではない。
しかし――――
（…恐い…？）
無意識のうちに抱く感情に、愕然とする。
剣八を見て、恐怖感を抱いているわけではなかった。何か、かつて、彼を前にして、恐怖し、震え、怯え、逃げ出したくなったような気がする。
――――会ったことがないはずなのに？
「更木剣八」
低く落ち着いた声が響く。
「あぁ？」
面倒臭そうに振り向く剣八にならって、一護も顔を向けた。抜刀した白哉が、そこに立っていた。
「兄は下がっていろ」
「んだと！？　テメェ、一護と殺りあいてぇからって、一人占めする気か！？」
「笑止。そんな下らぬことを、私が考えるわけがなかろう。大人しく下がれ」
口論を始めた二人を眺め、一護は呆れたように腰に手をやった。
（…そういえば、この二人、仲悪りぃんだっけ…）

そう思ってから、僅かな間、一護は呼吸をするのも忘れた。
（待て…今、俺……何て？）
――――『そういえば』？
額に手をやる。汗が止まらない。
「ふざけんな！　俺ぁ、今の一護と殺りあいてぇんだ！　記憶はねぇみてぇだが、自棄に強くなったみてぇだからなぁ！！！」
白哉に向けられた剣八の言葉が、頭の中で反響した。眩暈がする。
――――記憶が、ない…？
足元がふらつかないように、足に力を込めた。それでも頭がグラグラする。
「黒崎サン」
突然の声に、身構える。
浦原は、刀も抜かず、ただこちらを見つめていた。
「あ、ナリアサンって呼んだほうが、いいっスか？」
自分としては、たしかにそっちの方がしっくりきた。
しかし返答はせず、一護は彼の出方を窺う。
「――――霊圧、乱れてますけど？」
「！！！！」
言葉が出ない。慌てて霊圧を安定させる。しかし、大して戦ってもいないのに、一護の息は上がっていた。
これ以上、彼等の言葉を聞いていたら、自分は確実に壊れる。
そう思った一護は、左手を差し出して、死神達に向けた。霊圧の光が、そこに集中していく。紛れもない、虚閃（セロ）の予備動作だった。しかも感じられる霊圧からいって、ちょっとやそっとの怪我じゃ済まされないような破壊力を誇るものだ。
瞬間、七番隊隊長・狛村左陣が霊圧を上昇させ、斬魄刀・天譴（てんけん）を掲げ、叫ぶ。
「卍解！　『黒縄天譴明王（こくじょうてんげんみょうおう）』！！」
鎧兜を身に纏った巨人を召喚すると、それは彼の動きに連動して、巨大な刀で放たれてきた虚閃を迎え撃つ。しかし、かなりの威力の

赤黒い光線は威力を殺すことなく、じりじりと大刀を押し返していく。
「ぬぅっ…！！」
全身に力を込めるものの、あまりに鋭い霊圧に、『黒縄天譴明王』の腕や肩に切り傷ができ、血が流れ出る。すると、使い手である狛村にも同じ傷ができた。思わず、苦しげな声が漏れる。
誰もが、助力を試みようとした中で、一足早く動く。
「卍解」
バサリ、と彼等の視界に、入ってくる少女。
「『白焔虹星陽冠』…！！」
体の右半身を、薄紫色の着物で包み、その上から真っ赤な帯を腰に括りつけたような姿。
両手首には、先ほどまではなかった黄金に輝くブレスレット状のものが絡み付いており、右手には、一護が昔所持していた斬魄刀・斬月よりも二回りほど大きい刀が握られている。その刀身は、真っ白な炎で形成されていた。
「瑠璃谷！」
檜佐木の声に、卍解した夜光はニッと笑う。
『黒縄天譴明王』と一緒になって、彼女は『白焔虹星陽冠』を振るって、虚閃を押し返し始めた。
「すまぬ、瑠璃谷隊長！」
狛村が礼を述べると、
「いーよ、別に。あたし、犬好きだし」
と言って、力を込める。
狛村は、あとで五番隊に出向いて、自分は狼であることを、三度目になるが教えに行こうと決意した。
夜光は虚閃を迎え撃ちながら、何となく先ほどの一護を思い出した。
（…あの、オレンジ頭の人の、目…）
まだ、あのときはそこまで霊圧は、乱れていなかったが。

（…何か、悩んでた……、っ！）
脳裏を過ぎる白い存在。つぶらな瞳。笑う自分。
（……バカ、集中…！）
力が緩みそうになった自分を叱咤する。
それから数分としないうちに、虚閃は止まった。
一護は肩で大きく息をしながら、こちらを見ている。睨んではいなかったが、それでも穏やかな視線を向けてきてはいなかった。
「ホウ、どうやら虚閃は本物のようだネ。これは面白い。君を解剖したくなってきたヨ」
一人、見当はずれなことを満面の笑みで言う、十二番隊隊長・涅マユリ。
彼を卯ノ花が軽く手で制し、躊躇い勝ちに口を開いた。
「黒崎さん…何があったか、説明してはくださいませんか？」

――――クロサキ。

「俺は…」

――――クロサキ　イチゴ。

一歩、後ずさる。固く目を瞑った。

――――行方不明。
――――記憶がない。

「俺は……っ！」
そのとき。
一護と死神達の間に、割って入ってくる影。
「大丈夫か？　ナリア」
髑髏のような割れた仮面を、冠の如く頭に被ったような破面。―

――ガレット＝スミザーハースだ。
「破面…！？」
死神の間に、言い知れぬ緊張が奔る。
「ガレット！　…ああ、なんとかな」
「らしくねーなぁ。なーんか偵察の割に帰ってくんのが遅せぇと思って来てみたんだけど…」
ガレットが死神達を見回して、とくに卍解した二人を注視すると、笑った。
「なるほど。こりゃ凄げぇわ」
「だろ？」
一護が苦笑する。以前は彼等死神に向けられていたその表情を、対を成す破面に向けていると思うと、意味も無く哀しく、腹立たしかった。
「君が彼に何かしたのかい？」
編み笠をひょいと上げながら、京楽が尋ねる。
ガレットは眉間に皺を寄せた。
「何言ってんだ？　死神さんよ」
チラ、と一護を見やる。
「ナリア、“偵察”は済んだか？」
つまり、彼等死神の情報はとれたか、ということだろう。
「ああ。大体は」
「そっか。じゃ、長居は無用だな」
言って、ガレットは何も無い空間に、そっと指を触れる。解空（デスコレール）によって、そこに裂け目が生み出され、虚圏へ帰る道を開いた。
「あ…待て！！！」
砕蜂が叫ぶ。
夜光と狛村は顔を見合わせ、こくりと頷きあうと、同時に動いた。
「たあああぁぁあっ！！！」
「はあああぁぁぁあっ！！！」
去ろうとする二人に向かって、ガレットに対しては本気で、一護

に対しては若干緩く、それぞれの大刀を振り下ろす。
しかし、一瞬早く、一護とガレットは消えてしまった。
「うむぅ！？」
狛村が慌てて刀を横に逸らす。
「わっ、ヤバっ！？」
夜光も慌てて刀を横に逸らす。
互いの攻撃をぶつけ合わずには済んだが、二人自身が派手に衝突した。体の小さい夜光が、軽々と吹っ飛ばされる。
「縛道の三十七！　“吊星”！」
雛森がとっさに縛道を用い、霊圧の床を作り出した。
その真上に彼女はぶつかり、ようやく落下が止まる。
「大丈夫ですか！？」
「いっつつつ…間に合うと、思ったんだけどなぁ…ってて…」
衝突したためだろう、額にできた傷に手をやり、顔を顰める。そして、血のついたその掌を見つめ、夜光は表情を曇らせた。
「……――――――――――――……」
「…え？」
雛森が、不思議そうな顔をした。それに気付き、自嘲気味に笑ってみせる。
「何故、黒崎が…」
息を荒げつつも、日番谷が呟く。
彼が一護から受けた斬撃の傷は、かなり深かった。血が未だに滴り落ちている。
「それはまず治療をしてからにいたしましょう、日番谷隊長」
スッと日番谷から夜光へと、卯ノ花が視線を移す。
「勿論、瑠璃谷隊長、あなたもですよ？」
霊圧の床から体を起こした。
「え、大丈夫ですよ？　卯ノ花さん。頭だからちょっと出血多いけど、この程度で四番隊にお世話になるわけにも」
「来ていただけますね？」

「……ハイ…」

卯ノ花から、有無を言わさぬ調子の上に満面の笑顔で言われた夜光は、大人しく頷いた。そして、傷を負った日番谷、狛村、夜光と、隠密機動の者達、その付き添いの乱菊と雛森らは、四番隊隊舎へと向かい、残りの無傷で済んだ隊長格は、今回のことを総隊長に報告すべく、一番隊隊舎へと向かった。

We never call him but he answers us.

一護が敵であるという事実を、死神達もそう簡単には受け入れられないと思います。まず外見からして「何があった！？」ですからね。困ったのは雛森です。彼女なら、まぁ、顔と名前ぐらいなら分かってくれてるかな、と思ったんですけど、原作では会ってませんからねー…。

まぁそこは、瀞霊廷通信にでも載ってるのを見たということで。↑

こんなに早く夜光の卍解を使うことになるとは思いませんでした。赤い帯を腰に括りつけたのは、映画第一弾の茜雫（センナ）みたいなものを想像していただければいいですw

にしても本当に卍解早すぎた…。

兄様にやってもらったほうが良かったかな…（苦笑）

次回は夜光のお話になります。乱菊さんヨロシク↑

海外研修で更新ができなくなるものですから、かなり無理して更新いたしました。誤字があったら申し訳ありません。帰国後必ず修正したいと思います。

今回は何とか早く更新できましたが、次回はいつになるのやら。もし読んでくださる方は、気長にお待ちしていただけたらと思います。

それでは、これにて。

これからも頑張りますので、どうかよろしくお願い致します！

We never call him but he answers us.

隊首会会場には、未だ現世にいる恋次と、サボりの剣八、負傷した狛村、日番谷、夜光、そしてその治療を行う卯ノ花の計六名以外の隊長格が、元柳斎の前に整列していた。この緊急隊首会は、破面と化した一護について、そして彼による被害状況の全てを報告するために開かれたものなので、出席人数が少なくとも問題はなかった。

左腕を四年前に失った元柳斎は、杖を右手で力強く握り締めた後、低く唸った。

「その破面は、たしかに現世で死して、以降魂魄が行方不明となっていた黒崎一護であった、と？」

檜佐木ははっきりと頷いた。

「はい。間違いありません」

「類似した者である可能性は？」

この問いには、浦原が肩を竦めつつ答える。

「それは低いっスね。アタシが見る限り、“ナリア＝ユペ＝モントーラ”と名乗ったあの黒崎サンは動揺しているようでした」

砕蜂が眉を吊り上げて、

「だが、現に黒崎一護は我々に刃を剥けた。本当に裏切ったのかもしれないのだぞ」

と、浦原につっかかる。

元々、彼女は、夜一が尸魂界から追われる原因となった浦原に対しては大きな怒りがあり、永久追放処分の免除も納得できないでいた。

「んー、でも、彼が僕達を裏切る理由が、ないんじゃないかなぁ？」

京楽が浦原を庇ったのを見て、砕蜂は彼に苛立ちの視線をぶつける。

マユリは溜息を吐いた。

「呆れたことだネ。君も見ただろう？　彼の強さを」

その言葉に、斬魄刀をいつ抜いて、いつ収めたのか分からないあの一護の姿を思い出す。瞬歩の速度も、機敏さも、申し分のないはずの隠密機動が、彼に一太刀も浴びせられずに崩れ落ちた。
「あれだけの強さを誇れば、普通敵の言葉にいちいち耳を貸す莫迦者はいないヨ。癪な話だが、十三番隊隊長の言うとおりだネ」
言ってマユリは、浦原を睨み付ける。本当は反論したくてたまらないが、彼の言ったことは事実であり、その余地がなかった。
「では、奴が破面となったと、兄らは考えているのか」
白哉は、浦原とマユリを見据える。
「はい。ですが、そうするといくつかの疑問が生じる…」
浦原が腕組みをして俯くと、マユリが彼の言葉を続けた。
「黒崎一護の死亡が確認されて間もなく、行方不明になった後に破面として現れた。だが、破面化するにしてもこれほどの短期間は有り得ない。『崩玉』が“霊王”によって封印されてしまった、今ではネ」
「アタシの考えでは、現時点で虚圏にもう一つ『崩玉』が存在することになります」
「何だって！？」
檜佐木がが思わず声を上げる。
“霊王”が封印することでさえ、かなりの負担を強いられたものだ。それが一つどころか二つ存在するなど、とんでもないことである。
「たしかに本来なら有り得ない話っス。ですが事実、黒崎サンは成体の破面としてアタシ達の前に現れています」
「信じたくない話だねぇ…」
編み笠を下げながら京楽が呟く。
「信じられない話でも、あるがネ」
それはそれで、面白い。
そう付け足し、マユリは口角を吊り上げた。
「念のために言っておきますが、アタシは『崩玉』をもう一つ開発

するようなことはしてません。……ですが」
「藍染惣右介か」
白哉の口から出たその名に、誰もが凍りつく。
名を言った彼自身でさえ、一瞬俯いた。頭の上から耳の後ろに付ける位置を変えた牽星箝(けんせいかん)が、小さく揺れる。
「…さぁ？　分かりません。ただ彼は、開発者のアタシより長く『崩玉』を所持していた。藍染サンが四年前に何かをしておいた、と考えるのが今は有力でしょう。…そこで、お願いがあります、総隊長」
浦原と元柳斎は、互いを真っ直ぐに見つめ合った。
「藍染サンに…会わせてもらえますか？」
予想し得た申し出だった。
藍染は、体のほぼ全てに拘束具をかけられ、地下監獄最下層第八監獄“無間(むけん)”に投獄された。二万年間の投獄刑である。大罪人として、霊力といったものを全て奪われ、早四年。かなり衰弱はしているだろうが、それでも会話をできないとまではいかないだろう。
ただし、まず中央四十六室の許可があれば、の話だが。
元柳斎は、目を細めた。

四番隊綜合救護詰所のベッドの上で、日番谷は大人しく横になっていた。その傍らの椅子には乱菊が座っており、二人とも会話をすることなく、無言だ。
追加の治療で、四番隊副隊長・虎徹勇音が彼の下腹部に両手をかざし、暖かい光を注いでいる。
彼女は躊躇い勝ちに、二人に語りかけた。
「あの……日番谷隊長、乱菊さん、大丈夫ですか？」
「……疲れただけだ…」
日番谷がぶっきらぼうに答える。
「ね、勇音。あんた、どう思う？」

突然の乱菊の問いかけに、勇音は些か戸惑った。
「一護のこと」
「あ…」
言葉が発せず、俯く。
勇音も、数回一護とは言葉を交わしたことがある。
嘗て、彼が現世の者を連れ、旅禍として尸魂界に現れ、藍染の本性が明かされ、そしてその彼に、腰から下が切り落とされる一歩手前までの重症を負わされたとき。四番隊に運び込まれ、織姫の力を借りて、自身も幾度も彼の治療にあたった。
『あのさ…』
まだ声を出すこともしんどいはずなのに、治療中で一護は勇音に声をかけた。喋れば傷が開く。勇音は、喋っちゃダメです、と注意したが、彼は苦笑し、続けた。
『…悪かった。痛かっただろ』
初めは何のことか分からなかったが、どうやら双極の丘で、拳で腹を衝いたことを謝罪していたらしい。
『あんたは女だから、ちょっと緩めにしたつもりだったんだけど、やっぱキツかったよな』
――――あなたは一番優しく衝かれたようですが、まだ大人しくなさい。
卯ノ花が、目を覚ました自分に言ってきたときは本当だろうか、と疑ったが、それは事実だったらしい。
自分は女で、だから意図的な手加減をした。
人の顔を覚えるのが苦手な彼が、勇音を覚えていられたのはそのためだろう。
気にしてないです、と言おうとした矢先、一護は苦しそうに顔を歪めたので、焦った。このときはまだ、彼の傷が深刻であることに変わりはなかったのだ。
だが、治療を施しながら、思った。一護はとても優しい人なのだろう、と。考えてみれば、瀞霊廷の死神達は彼等を殺す気で挑んで

いったのに、一護は誰一人として殺さなかった。一角など、逆に命を救われたというくらいだ。良く言って果てしなく優しい、悪く言ってとんでもないお人好しだ。だが、それが彼の良いところであることは、言わずもがなだった。
その認識は、皆共通するもので、故に今回の、破面となった彼からの襲撃のショックは大きかった。
カチャ。
「？」
勇音が、扉の開かれる音に、振り向く。
「雛森…？」
意外そうに呟く日番谷に、病室に入ってきた雛森は苦笑した。
「あの…隊長、来てないかな？」
「隊長って…瑠璃谷のことか？」
雛森は徐に頷いた。
「水が欲しいって言ってたから、取りに行ってて…病室に戻ったら、いなくなってたの。狛村隊長のところにもいないから、ここかなって思ったんだけど…」
夜光の額の傷は、狛村との派手な衝突により生じたものだったので、深刻なものではなかった。だが、彼女が軽い脳震盪を引き起こしていたし、頭の怪我は侮れない。そういうわけで、ほんの一日だけは大事をとって入院という形になっていた。その病室は日番谷の病室の一つ先の部屋だ。
ちなみに、虚閃によって少々傷を追った狛村も念のためにと入院させられており、その病室は日番谷の病室から二つ先の部屋、つまり夜光の病室から一つ先の部屋だ。
「なんかあれから、ずっと隊長、様子がおかしいんだ…」
「おかしい？」
乱菊が首を傾げる。
「はい。“吊星”で隊長を受け止めたとき、傷から滲んだ自分の血が掌についたのを見て、言ってたんです」

――――……変われてないじゃん……

「何のことなのかは、分からないけど…」

彼等が心配そうに顔を覗き込んできていることに気付き、慌てて顔を上げると、両手をパタパタと振った。

「あ、え、えっと！　じゃあ、お邪魔しました！　他をあたってみます！　日番谷くん、お大事に！」

早口で言うと、雛森は素早く踵を返した。しかし、彼女が歩き始めるより早く、乱菊がその肩を掴んだ。

「雛森、あたし隊長を看てるの、疲れちゃったぁ。代わってくれない？？」

あまりに突然で、彼女は狼狽えた。

「え、で、でも…」

「瑠璃谷隊長は、あたしが捜すから！　じゃ、よろしくねぇ～♪」

乱菊は強引に雛森を後ろに退くと、一人走って病室から出て行った。

呆気にとられたように、日番谷と雛森は目をぱちくりと瞬かせた。

「ど…どうしたんだろう、乱菊さん…？」

「さあな。っつか、別に俺を看てるって、ここに座ってボーッとしてただけなんだがな、あいつ…」

突っ立っていた雛森は、つい先ほどまで乱菊の座っていた椅子に腰を下ろし、チラリと日番谷の下腹部を見やった。幸い、もう随分良くなってきているようだ。

「……隊長、大丈夫かなぁ…」

今にも泣きそうな顔で、雛森は俯く。

何て、声をかければいいだろう…。

日番谷が思案したところで、既に治療は終えた勇音が、相変わらずそこで固まっていることに気付いた。瞳を揺らしている辺り、迷っているらしい。

「…虎徹」
「え？　あ、す、すみません！　終わりましたよ！」
慌てて作り笑いをしているのが、余計に怪しかった。
「お前、ひょっとして瑠璃谷のこと、何か知ってんじゃねぇか？」
「え！？」
「…っ……」
顔が強張った。図星だったようだ。
暫く狼狽した様子で、落ち着かず方々に目をやっていたが、やがて諦めたように詰まらせていた息を吐き出した。
「…夜光ちゃんの背中に…大きな傷跡があるのは知ってますか？」
日番谷は首を横に振り、雛森を見た。しかし、彼女も全く同じ反応だ。
「…その傷は、夜光ちゃんがまだ六番隊第六席に配属されていた頃に虚につけられた傷で…実は、そのときの虚が、西流魂街一地区・“潤林安”を半壊させたんです…」
その事件は知っていた。何でも、突如として現れた凶暴な虚が、多くの“潤林安”の魂魄を喰らったとか。もう二年近く前だ。
“潤林安”には、日番谷と雛森を育ててくれた老婆がいたが、当時その安否を確かめることはできなかったし、必要はなかった。老婆は漸く現世に転生し、最早流魂街にその存在はなかったためである。
「…あれ……夜光ちゃんのせい…なんです…」
二人は同時に眉を顰めた。
瀕死の重傷を負いつつも、席官の死神だけで虚を撃退した話は聞いていたし、現場に最初に駆けつけた夜光が、隊長へ昇進となった原因の一つでもある。
「あの事件が起きる数日前…夜光ちゃんは流魂街の外れで、子供の虚を発見したらしくて…優しすぎたんです、あの子…。斬魄刀は持ってたのに、斬れなくて…拾っちゃったらしいんです…」
日番谷は、小さく言葉を漏らす。

「……瑠璃谷はそいつを可愛がったが、やがて凶暴化し、暴れたって訳か…」
勇音は頷く。
「泣きながら叫ぶ、夜光ちゃんの言葉を聞いただけなので…これくらいしか知らないし、あのときは錯乱していたといってもいいので、正確かも分からないんですけど…少なくとも、あの子が事件発生に関与していたことは事実だと思います」
そこで言葉を切り、考え込む仕草をする。
「ただ……いつまで自分に、その責任を負うんだろう・って…」
「どういうことですか？」
雛森は納得ができない様子で首を捻った。
そのような被害の大きい事件の発端となってしまったと思えば、自分を責めるしかないのはよく分かる。だが、まだそれからたったの二年だ。罪を忘れるには早すぎる気がしないでもない。
「それ、は……」
躊躇い、口を閉じる。
一瞬、彼女が雛森に目をやったことに気付き、申し訳ないと思いつつも日番谷は口を開いた。
「雛森。席、一旦外せ」
「えぇ！？　ど、どうして？」
「いいから。…ついでに、甘納豆持って来い。十番隊の執務室に置いてある」
少しむくれた雛森だったが、日番谷に「早くしろ」と急かされたのと、勇音の困惑した様子を見て、仕方なさそうに頷き、席を立った。
霊圧が遠ざかっていくのを確認すると、彼は視線を戻す。
「……で、何だ？」
勇音は暗く、沈んだ様子で口を重く開いた。
「……その傷が原因で、夜光ちゃん…余命宣告…されてるんです……」

寒気が、した気がする。
…余命宣告？　普段あんなに元気で、仕事もこなしているような奴が？
「……どの程度なんだ？」
落ち着きを装い、低く尋ねる。
知らず知らずのうちに、震えた。
だが、決心したように一度口を固く、真一文字に結ぶと、勇音は言葉を紡いだ。
「ついこないだ……あと一年を切ったところ、です…」
ゴクリと息を呑む。思わず、上体を起こした。痛みはないので、傷はもう塞がったようだ。
「……本当か？　それ…」
頭に、雛森が浮かぶ。
このことを聞いたら、彼女はどのような反応をするだろう。やはり、取り乱すだろうか。もう辛い思いはして欲しくないのに。
「…今でこそあんなに元気にしてる夜光ちゃんですけど…実は毎晩背中の傷の痛みも増してるみたいで…一ヶ月に一回は必ず、卯ノ花隊長に直に治療してもらってるんです。でもできるのは、隊長でさえ鎮痛と安定…回復の見込みはなく、弱っていくしか……」
キィ、と扉の音がして、二人はあわててそちらに目を向ける。
涙を堪えるようにして口を結び、俯き気味に歩み寄ってくる雛森。手に、甘納豆ののった器は持っていなかった。恐らく初めから、扉の外で霊圧を徐々に消し、聞き耳を立てていたのだろう。
「そんな体で…隊長は仕事してたんだ…」
「雛森、なんで！」
「折角気を遣ってくれたのに…盗み聞きしてごめんね、シロちゃん…」
ポニーテールが揺れる。
以前隊長に手ひどい裏切りを受けた彼女だ。自分の隊長関係の話を秘密にされることだけは嫌だったのだろう。

顔を上げた彼女は、悔しそうに顔を歪めていた。
「……どうして…言ってくれなかったんですか？　私、これでも五番隊の副隊長ですよ？」
雛森が勇音に詰め寄る。
「…公にしないで欲しいって、夜光ちゃんが」
「隊長が…？」
コクリと頷いた。
「“最期まで死神でいたいから、このことは四番隊の心中に止めておいて欲しい”・と…。ただ、乱菊さんだけは、知ってるみたいですけど…」
日番谷が眉を顰めた。
「松本？　何でそこで…松本なんだ？」
そういえば、彼女は夜光を捜す役を雛森から自分へと移し、早々にいなくなってしまった。
何やら様子がいつもと違うとは思っていた。
「夜光ちゃんが運び込まれた前日の夜、京楽隊長と吉良副隊長、檜佐木隊長の三人と飲み会をしていたらしくて、二日酔いに効くものはないかって、乱菊さんが次の日に四番隊来てたんです。そのときに、乱菊さんはうっかりその話を聞いちゃっててて…」
勇音は目を閉じた。
「…ひょっとすると、夜光ちゃん…いつも怒ったり笑ったりしてるけど…全部、空元気なのかもしれませんね…」
やがて、雛森はしゃがみこみ、涙を落とし始めた。小声で、「隊長、隊長」と呟くばかりだ。
日番谷は窓の外に目を向ける。
まだ高い位置にあったはずの日が、低いところにまで落ちてきていた。
（…夜になるな…）
どうでもいいことを思う。
それは、無意識のうちの現実逃避に相違なかった。

トン、トン、トン。
小気味よく屋根を蹴って、五番隊隊舎の屋根にまでたどりつく。
そこに、斬魄刀を背負っておらず、隊首羽織の「五」の字が目立つ、小さな背を発見した。
乱菊はできるだけ明るく声をかける。
「瑠璃谷隊長っ♪」
ピクリ、と肩が振るえ、頭に包帯を巻いた夜光が振り向いた。
「だめじゃないですか～、一応、怪我してるんですから、詰所から出たりしちゃ。雛森も心配してましたよ？」
「……桃が…。そっか、そーだね。ごめん」
立ち上がり、暫し伸びをすると、ニコリと笑った。
「ありがと、乱菊さん。わざわざ呼びに来てくれたんだ」
「…夜光」
“瑠璃谷隊長”ではなく、“夜光”と呼ばれたことに少なからず反応を見せた。
夜光が七番隊下級隊士であったとき、そして六番隊第六席であったとき以来だ。
「あんた、一体いつまで皆に隠す気なの？」
「……」
視線を落とす。
真剣な問いかけに、答えることができない。
「一昨日で…余命、一年切ったんでしょ？」
ズキン、と。背中の傷が痛んだ気がした。
「…あー…よく知ってるなぁ…」
苦笑する。
普段あんなにだらけているのに、いざとなるとこう鋭いから敵わない。
「――――あたしのせい、だから」

言葉を零す。
「たった数日だけど、子供の虚を可愛がって…懐いてくれて…きっとこれなら、大丈夫だなんて思っちゃった、あたしのせいだよ」
脳裏に蘇る、凶悪な虚。
自分に呼びかけにはもう答えてくれず、流魂街を破壊した。あんなに大人しかった虚が、いきなり覚醒したように暴れ出して、住民を襲ったのを見た時は自分の目を疑った。あのとき、すぐに斬りかかって昇華してしまえば良かったのに、自分はお人好しで、それができなかった。挙句の果てに大怪我を負い、救援を要請することしかできなかった。
お人好しの自分が、あの事件を引き起こした。
「あたしなんか、本当ならあそこで死んじゃえば良かった」
あれから、夜光は敵の心を感じてしまう前に、滅していくよう努めた。どんな任務でも、氷の自分を作ってきた。
恋次とルキアを連れ戻す時も、あまり彼等の声を聞かないよう、気持ちをそらしていた。だから、私情で邪魔をした日番谷が恨めしかった。自分だって、本当はこんなことをしたいわけではない。
二度目のときは、恋次ともルキアとも、友達としての縁が切れてしまうことを覚悟して、実力行使に走った。
「頑張ってたつもり…」
しかし、今日の真昼。破面の一護が現れ、彼の心を感じて、夜光の気持ちは揺れてしまった。お人好しの自分が、体の中で動いた。
あの、可愛がっていた虚が凶暴化したときと、全く同じだった。
「でもっ、あたしっ、変われてなかった…っ！」
非情になれない自分が、憎い。
「…一護は、仲間なの…瀞霊廷通信でも、時々記事になっているのは見たでしょう？　でもあんたは私達と違って、面識がない。……凄いことよ。知らない相手なのに、何かを感じられるなんて」
「凄くなんかない！　あたし変われてない！　また何かを壊すことになるに決まってる！」

拳を震わせ、下唇を噛み締める。
そんな様子の夜光を見て、乱菊が突然両腕を広げた。
「ほーら、来なさい、夜光！　今ならギュッとしてあげる！」
ぽかんとする彼女に、言う。
「何なら、私から行ってもいいわよ??」
瞬間。唐突に、夜光の目から大粒の涙が零れ始めた。そして、彼女は乱菊の胸に飛び込む。
「ひっ…く…！　ふえ…ぇ…～…！」
しゃくりあげて泣く夜光を、優しく包み込む。いつもは感じない、幼い女の子だった。
「あた…し、の…せいっ……なんだ…！！！」
ボロボロと涙を流す少女は、副隊長の位を担うにはどうしたって小さすぎた。抱きしめて、乱菊は囁いた。できるだけ、優しく。できるだけ、労わるように。
「はいはい、もういいから、泣いちゃいなさい」
夜光は、普段は出さないような一面をさらけ出して、乱菊に縋りついて泣き続けた。

We never call him but he answers us.

日番谷と雛森のおばあちゃんがいなくなってごめんなさいです。
というわけで続き、お待たせしました。なんか今回はオリキャラのことばっかりだったのでつまらなかったですか。すみません。

はい。夜光は思った以上に重いものを背負った子でした。
今までの冷徹さの理由は理解していただけましたでしょうか。でもまだ隠された過去があったりします。いやないけど、本音というのでしょうか。彼女の真の姿はもう少し先で。

雛森がまさかのまた大ダメージ。ごめん雛森…。
あと卯ノ花隊長は花太郎と一緒に隠密機動の治療を行っています。
ちなみに花太郎も昇進してます。何席になったかはお楽しみに。

藍染ですが、四十六室の許可が出た瞬間に出てくると思います。
好きな人、嫌いな人、様々だとは思いますが、どうか気長にお待ちください。

夏休み最終日ということで必死に書き上げてみたのですが、誤字があったら申し訳ありません。時間がまた出来次第、修正いたします。
忙しいのでまた次はいつか分かりませんが、できるだけ早くと思っているので頑張りたいと思います。

次回、今回書き漏らした夜光のことと、久々に現世です。
進展の少ない小説ではありますが、良ければお付き合いくださいませ。
感想・アドバイス、もしよければお寄せください。皆さんに満足していただけるよう努めていきます！自分も満足したいので↑

それではこれにて。

We never call him but he answers us.

夜空を見上げる乱菊の傍らで、夜光は幾度も鼻をすすり、ハムスターか何かのように背を丸めていた。
「……あんたはね、いっつも溜め込みすぎなのよ」
その小さな背中を、片手でポンポンと軽く叩いてやる。
彼女は未だに、小刻みに震えている。
「たしかに、あんたのやったことは許されることじゃない。虚を可愛がるなんて、下手に表に漏れてたら中央四十六室で裁かれてたはずよ」
血が滲むほど、唇を噛み締める。
ずっと自分の中で思い続けていたことを他人に改めて言われると、苦しかった。
「だけど、あんたはそれが怖くて、ずっと逃げてた」
「……ごめんなさい…」
「謝るなら、消滅した魂魄達に謝りなさい」
「……ごめんなさい……」
あんな大きな罪を犯したのに、死神として生きていたいなんて、虫がよすぎる。分かっていたのに、自分は逃げた。
「五番隊隊長になってからのあんたは、任務の時、冷徹以外の何者でもなかった」
冷徹になることで、傷つくことから逃げた。
自分は呆れるほど弱い。これが隊長なんて、ふざけているにも程がある。
「…あたしねぇ、夜光。ちょっと前に、大事な奴を亡くしてんのよ」
「……元五番隊隊長・藍染惣右介との戦いのとき？」
「正解。あんときはあんた、まだただの七番隊の下級隊士だったっけ？　戦線にも出てないのに、よく覚えてるわねぇ……」
「あれは、大きい事件だったし…」

「ま、それもそっか」
息を一つ吐き、乱菊は哀しそうに笑った。
「あいつはね、あたしのために尸魂界を裏切ったの」
――――乱菊が泣かんでも　済むようにしたる
「……どんなに聞こえは良くても、裏切りは裏切り。許されることじゃなかった。その上…」
――――さいなら　乱菊　ご免な
「……無責任な奴だったのよ…」
涙を堪えるように、眉間に深い皺を刻む。
そして、何とか笑顔をつくり、夜光の方を向いた。
「その点、あんたは“死”っていう逃げ道を選んでない。生きてるなら、まだやるべきことはあるはずよ」
乱菊は、長いことつけ続けているペンダントに触れた。
「…それ、もしかして、その人から…？」
夜光にいわれ、彼女は首を横に振る。
「知らないわ。ただ、ある誕生日に、部屋に戻ったら、ポツンと包装されたコレが置いてあっただけよ」
あのとき、てっきり日番谷がプレゼントしてくれたのだろうと思って、お礼を言うべく執務室に来てみたら、彼はデスクワークをこなしながら何かを投げ渡してきた。“誕生日おめでとう”と、顔を上げずに言う。当時の彼はまだ隊長になったばかりだったので、仕事には慣れておらず、手が離せなかった。投げ渡されてきたものは、ピンク色のストールだった。
『た、隊長…？　これって…？』
『何だよ。俺からはそれだけだ。文句あんのか？』
『え、あ、いや…ありがとうございます…』

あのストールは、以前はずっと肩にかけていたが、今は腰帯に合わせて巻きつけている。
京楽からは酒を、浮竹からは和菓子を、恋次からは付けもしないサングラスを、雛森からは化粧品を、檜佐木からは酒のおつまみを、といった具合で、多くの者から誕生日プレゼントを貰った。
残る人物というか、思い当たる死神は一人だけだったが、乱菊は以降、確かめるようなことはしなかった。
「とにかく、あんたは知る限り、良い子よ」
「……あんなことしたの知ってて、よくそんなこと言える…」
「いーの！　あんた、ちゃんと自分のこと責めてるじゃない。それで充分よ」
ギュッと夜光を抱き寄せる。
「そんなに背負ってちゃ、立てるもんも立てないでしょ。あたしも一緒に背負ってあげるし、隊長も、話せばあんたのこと、突き放したりしないわよ。あと雛森も、あんたの副隊長なんだから、ちょっとは頼ってあげなさい」
「…正直、余命のことはまだ言えないかなって」
顔を背けようとした夜光の頬に手をやり、やや強引にこちらを向かせた。
「じゃ、いつ言うのよ？」
「……これ、治るまで？」
と、彼女は頭に巻いている包帯を指差した。
「嘘つきは嫌いよ」
瞳を彷徨わせる。———と、
「……っ…か…」
呼吸が止まり、汗を滝のように流し、顔面蒼白となって、夜光が蹲った。
「ちょ、ちょっと！？」
屋根から落ちかけ、あわてて乱菊が両手で支える。
「……う…く…」

背中の傷が、ドクンドクンと脈打つ。彼女の肩にしがみつき、喘ぎながらなんとか呼吸した。
「大…丈、夫…発作…みたいな…もの、だから…」
乱菊は息を飲んだ。
震えている夜光の手が、実はかなり弱りきっていることを意味する気がした。それだけ、彼女の苦しみ方は尋常でなかった。
「夜光…」
「乱菊、さん…」
ヒューヒューと呼吸しながらも、強い瞳で言葉を紡ぐ。
「…余命のことは…言う、つもり…ない、から…。乱菊さんも…」
「……誰にも言わない。なんて保障はできないわよ」
「はは…まぁ…そうだね…」
夜光は深呼吸をすると、ヨロリと立ち上がった。
「でも、色々考える、良い機会にはなんたと思う。ありがと」
乱菊も立ち上がり、呆れ顔で夜光を見つめた。
「…頑張ってくださいね。『瑠璃谷隊長』」
肩を竦める。
「下手したら、卯ノ花さんに怒られるし、詰所に戻ろっか。乱菊さん？」
「そーですね。あ、そだ。瑠璃谷隊長、今度お酒奢ってください」
「あたし、苦手なんだけどなぁ～？」
そして、乱菊と夜光の二人は、五番隊隊舎の屋根を蹴って、来た方向へと戻っていった。

＊　＊　＊

茶碗に入れられた白米をかきこみ、口を忙しく動かす。
そんな彼を見て、ずっと端で大人しく座っていたひよこのぬいぐるみが立ち上がり、
「ちょっと恋次！　あんた、一体いつまでこうしてる気！？」

と叫んだ。
ライオンのぬいぐるみが、ヒラヒラと前足を振る。
「うっせぇなぁ。そいつがどーしよーと、テメェにゃ関係ねーだろ、りりブフォ！！？」
「あんたには訊いてないのよ、コン！！」
ライオンのぬいぐるみの中にいるのは、改造魂魄（モッド・ソウル）のコンだ。元々『尖兵計画（スピアヘッド）』という計画の下に、由嶌欧許（ゆしまおうこ）によって作られた戦闘用疑似魂魄だが、死体を戦わせる非道さから廃案となった『尖兵計画』に伴い、破棄された。その中でたまたま偶然生き残ったのがコンだ。
また、ひよこのぬいぐるみに入っているのは、同じく改造魂魄のりりんである。以前、バウントと呼ばれる、滅却師同様の、特殊な霊力を持つ死神から人間の魂魄を奪い、糧とする者達の騒動があったとき、そのバウントの居場所を掴む為に浦原が作成した改造魂魄なのだ。彼女の両隣に添わる、ウサギ、亀のぬいぐるみに入った蔵人と之芭も同様だ。
「やるべきことは、あるはずでしょーが！」
「まぁまぁ、落ち着いてくださいよ、りりん」
イライラしたひよこを、蔵人はやんわりと宥める。
恋次は、茶碗の中のご飯を全て食べきると、力を抜いた。
「一応、連絡待ちだ。ここに隠れてることは浦原さんも承諾してくれたんだし、問題ねぇだろ」
と言った。
既に浦原は、十三番隊隊長に就任したが、彼いわく“恋次を捕まえるように言われたのは、まだ駄菓子屋の主人であった自分だった。十三番隊隊長の立場で命令を受けていないなら、捕らえなくてもいいだろう”とのこと。
屁理屈ではあったが、居場所を失っていた恋次にとっては有難いことだった。
「“連絡待ち”とはつまり、儂の帰りを待っておったということか？」

ふいに、ちゃぶ台の下から声がして、その部屋にいた全員が一斉に目を向ける。黒猫が、こちらを見つめていた。
「夜一殿！」
テッサイが声をあげる。
「戻ったぞ、恋次」
ちゃぶ台の下から出てきて、右前足で顔を洗う。
浦原が尸魂界に戻った数時間後、一護のことをルキアに報告して以来、行方を眩ましていた夜一が、恋次の前に現れた。何でも、一護に関することを調べる為、奔走していたらしい。その彼女に、あまり身軽に動けない恋次は、情報収集を頼んだ夜一は、「高級猫缶十個がお礼」ということで、手をうったわけだ。
「悪りぃな、夜一さん。で、何かあったか？」
ボンッ、と煙がたつと、夜一が人型に戻って腕組みをする。
「それなんじゃが…」
「ちょっとまてぇぇぇ！！！」
恋次が瞬歩のごとき速さで顔を背ける。髪色同様、彼の顔面は真っ赤に染まっていた。
無理もない話だろう。猫型から人型に戻った彼女は、全裸の状態なのだから。
「ん？　どーした？」
「服！　服！！　服着ろっ！！！」
暫しの沈黙がおり、恋次がゴクリと喉を鳴らす。汗を流す彼に、
「この変態が――――っ！！！」
りりんが、人形ながらも派手な飛び蹴りを見舞った。予想より遥かに痛かったその攻撃に、恋次はわき腹を押さえて蹲る。
「り…りりん…テメェ…！」
「夜一さんに何色目つかってんのよ！　あー、男はみーんなこうだからヤダヤダ！」
「問題大有りだな」
「隊長にもなって、情けないですぞ阿散井さん！」

首肯する之芭と蔵人を、にらみつける。元はといえば、前触れなく人型になった夜一が悪いのだ。
「りりん、蔵人、之芭。おぬしらもそれくらいにしてやれ。恋次も女の体に興味のある年頃かもしれんしのォ」
「何だそりゃ！？　大体あんたが」
思わず夜一を見そうになり、再び背けた。
一方、コンは目尻を下げて、ちゃぶ台の陰から夜一の裸体を眺めていた。
…が。
「コンっ！！！」
りりんが怒鳴り、その頭に豪快な蹴りを繰り出す。
「うぎゃあっ！、――――」
コロン。
あまりの強さに、コンの口から義魂丸が飛び出る。
五月蝿いと思っていたので、彼が動けなくなったのは丁度いい。
それから数分後、夜一は雨（ウルル）が持ってきた自分の服を身にまとって、漸く落ち着いて話ができる状態となった。
「一護のことじゃが、今日の昼頃、尸魂界に現れたらしい」
「何だって！？」
「隊長たちと刀を交えて、後に来たもう一人の破面といなくなったらしくての、その破面は“偵察”と口にした。今では記憶のない一護じゃ。尸魂界の力がどれほどのものなのか、調べに来たのじゃろう」
拳を握り締める。
「それで、怪我人は？」
「隠密機動は半数以上が重傷。夜光と狛村も、軽傷じゃが四番隊におる。日番谷はおぬしのように、派手に斬られたようじゃ」
尸魂界に、刀を向けた――――。
これで、一護はもう敵と見なされてしまうだろう。恋次が恐れていた展開の一つだ。奥歯を食いしばる。

彼を見つめ、
「じゃが、悪い報せばかりではない」
と、短い髪を手櫛で整えた。
自分の頭がポニーテールでないのが、未だに違和感がある。
「恋次。ぬしは言っておったな？　一護の記憶はなくなった。名を呼んでも反応しなかったと」
暫し目を閉じて、思い出す。
“イチゴ”とは、誰のことだ？　彼はたしかにそう言って、刀を抜いた。
放せ、死神。彼はたしかにそう言って、自分達の名を呼んではくれなかった。
「ああ。俺を斬るのも、全然躊躇わなかったしな」
本来の一護なら、有り得ない話だ。
呆れるほど仲間思いの彼が、仲間を斬ることに躊躇がないなど、天地がひっくり返ってもあることはない。つまりは、今の一護にとって、死神は皆敵にしか見えないのだろう。
「その一護が、尸魂界で皆から“黒崎”“一護”と呼ばれて、動揺しておったらしい」
――――動揺…？
「…そんな、見てて分かるくらい、動揺してたのか？」
「卯ノ花が“何があった”とたずねたら、あやつは攻撃の手を緩めたらしい」

『俺は…俺は……っ！』

「…あやつも、覚えていないとはいえ、何か引っかかりがあるのじゃろう。一護に隙があるのなら、そこをつけばいいだけの話じゃ」
恋次は視線を落とす。
一護も戦っているのだろう。自分の中で、真実と向き合うために。それを後押しするのも、こちらに引き戻すのも、仲間である彼等の

役目だ。
「……ああ。絶対、引き戻してやる」
ニヤリと笑うと、夜一も口許を緩めた。
そこで、彼がはたと気付いた顔をする。
「なぁ、ルキアは…」
「ん？　あぁ、朽木は九番隊隊舎牢に入れられておる。霊圧が封じ込められておるが、白哉坊達が減刑を請うたらしくての。牢に入るだけで済んだ。心配はいらん」
「そうか」
ホッと息を吐く。今回ばかりは、極刑と言われてもおかしくないような、副隊長という身分での身勝手な行動だったのだ。予想以上に軽い刑であったことに、安堵する。だが、彼女はきっと心中とても焦っているであろうことは、容易に予想がつく。
「…まぁ、朽木のことは追々どうにでもなるじゃろう。それより、おぬしはどうするつもりじゃ？」
「……一護の記憶を取り戻せる可能性があるなら、実践するまでだ」
「ですが、それにしてもどうやって黒崎殿の記憶を取り戻させるというのです？」
ずっと黙って聞いていたテッサイが口を挟んだ。
思わず恋次は言葉を詰まらせる。実際、何も考えていない。
「やーれやれ、情けないのォ…それで隊長というのじゃから、三番隊の者達がいっそ哀れに思えてくる…」
「うるせぇよ！！　俺はグダグダ考えるのは苦手なんだよっ！！！」
叫んで、腕組みをすると座りなおした。
「さて、どーするか……」
眉間に皺を刻み、唸る。
彼の記憶を取り戻すというなら、まず、一護が短期間で破面となり、記憶も失うという事態が発生した原因を探る必要があるようにも思う。だがそれに関しての情報は一切ないし、皆目見当もつかない。

全員が全員、揃って黙りこくった。
そのとき、ガンガンガンと引き戸を激しく叩かれる音が聞こえてきた。思わず、彼等は顔を見合わせる。今現在の時刻は午後十一時という、夜中に近い時間だ。店が閉まっている時間でもあるし、まさかこの時間帯にわざわざ駄菓子を購入しに来たとは思えない。
警戒しつつ、恋次達は揃って居間から出た。
「はいはい、ただいま」
テッサイも警戒はしているが、あくまで普通に引き戸を開いた。
そこに立っていたのは、四年前と比べて十センチ近く身長が伸びた、ポニーテールの黒髪の少女。
「夏梨…！」
花刈ジン太が驚きのあまり、呟く。
驚いているのは彼ばかりでなく、皆一緒だ。兄・一護の霊力が完全になくなって以降、霊力が強くなり始めた夏梨は、虚に襲われないためと、無駄に整に憑かれたりしないように、しばしば浦原商店の道具を譲ってもらうのでお世話になっていた。ゆえに、浦原商店のメンバーは皆夏梨のことはよく知っており、あまり関わりがないのは恋次一人だ。とはいえ、彼も、彼女が一護の妹であることは知っている上、幾度か顔も合わせているので、驚いていることに変わりは無い。
「浦原さん、いる？」
突然の言葉に、皆が無言になる。
「喜助は、色々あって尸魂界に戻ることになった。ここにはもう戻って来ぬぞ」
夏梨が顔を顰める。
「なんだよ、それ。ちょっとは連絡とれたりできないの？」
「なぁ」
苛立っているようである彼女に、恋次がつい声をかけた。
「何かあったのかよ？　一護の妹」
「あたしは黒崎夏梨！　名前ぐらい覚えろよな、オッサン！」

「オッ…！？　俺の名前は阿散井恋次だ！　てめぇこそ覚えてねーじゃねぇか！！」
「んだよ、文句あんのかぁ！？」
ギリギリと睨み合う二人だったが、恋次の方が呆れ顔で力を抜いた。
「ったく、ホント一護にそっくりだな…。まぁ、浦原さんは今夜一さんが言ったとおり、当分戻ってくることはねぇ」
くそっ、と悔しそうに顔を俯かせる。
彼女の小さな拳が、震えていた。
「…夏梨、だっけか？　お前、なんでこんな時間にここに来たんだ？」
「決まってんだろ。違和感があったから、浦原さんにちょっと話してみようと思っただけだよ。あたしとしては信用なんないんだけど、他に相談できる人もいねーからな」
…酷でぇ、一護の妹。
心の中で浦原に同情しつつ、恋次は首を傾げる。
「違和感って…一護のことでか？」
「…うん。一兄が死んだときのこと思い出してたら……なんか…」
手を額にやり、瞳を揺らす。
「なんか……引っかかって…」
じっと考え込んでいる彼女を眺めて、恋次は夜一達に向き直った。
「夜一さん、俺、夏梨にとりあえずついてっていいか？　手がかりつかめるかもしれねぇし」
現に、手がかりをつかめるかもしれない、というものも、今現在夏梨の言う「違和感」しか存在しない。手持ち無沙汰であった恋次にとって、これは是非調べたいことでもあるだろう。
「分かった。夏梨、喜助はおらぬが、その情けない死神に相談してみてくれ。一護と共に戦った奴じゃからな」
夏梨はチラリと恋次を見やり、
「…うん。分かった。……とりあえず、恋次、だっけ？　一旦あた

しの家に来てくれる？」
「おう。じゃ、行くか」
そして恋次は軽く会釈すると、夏梨と共に浦原商店から出て行った。

We never call him but he answers us.

遅くなってすみませんでした。続きです。

夜光さん、小説では初めて発症。

これからこういうことがあっても、彼女は持病もちなんだと気付いてくださいね。驚かないでください。できれば。↑

そしてやっぱり浦原商店に腰を落ち着けていた恋次ですが、コンもこっちに来てもらいました。何せ彼のことをすっかり忘れていて、居場所がなかったもんで。最初は遊子のところで「ボスタフ」として頑張ってもらおうかと思って下書きしていましたが、あまりにもコンが不憫でならなかったのでやめておきました。

バウント篇の改造魂魄たちですが、途中から一切喋らなくなっちゃってますね。すみません。彼等を操るの、正直のところ苦手なのです。

そしてこの小説では、今までにない人と動く恋次、というのが名物化してきてる気がしないでもない。頑張れ恋次。

さて。最後になりましたが、番外編「ｄｉｅ　ａｎｄ　ｌｏｃｕｓ　＊　ｓｉｄｅ　ｓｔｏｒｉｅｓ　＊」というものができました。本編では語られなかったものを書いて行きますのでよければご覧ください。

亀更新で申し訳ありません。

ちょっと本当に忙しくなってきて、次の話もいつ更新できるか正直

分からないです。気長に待っていただける方は、のんびりとお楽しみいただければと。

それでは、これにて。

感想等、よければお願い致します。

ポケットから鍵を取り出すと、鍵穴にさしこんでドアを開けた。
「ただいまァー…」
言いつつ、真っ暗な玄関の明かりを点ける。
家の中は、遅い時間だからかシンと静まっていた。
「静かだな。まぁ、時間遅せぇし、当たり前か」
「ていうか、誰もいないから」
夏梨の科白に、首を傾げた。
「いねーって…もう一人の方と、親父はどうしたんだよ？」
靴を脱ぎながら答える。
「ヒゲは知り合いの医者んトコに用事があるらしくて、ここ二日戻ってきてないんだ。遊子は一兄が死んでから、ちょっと調子悪くてね。今朝、織姫ちゃんのとこに預けてきた。織姫ちゃんはカウンセラー志望だし」
元々、遊子は夏梨と違って、かなりのお兄ちゃんっ子だった。その彼が死んだのだから、健康面に異常が出るのは必然だろう。
二人がいない理由を口にした彼女は、心なしか淋しそうに感じられた。
「今日はもう遅いから、話は明日でいい？」
キッチンに入って、冷蔵庫の中から一リットルのペットボトルを取り出すと、棚からコップを出してコポコポと注ぐ。
「あ？　ああ、別に…。寧ろお前、学校はいいのか？」
「明日は日曜。休みだからね。部活も適当な理由つけて休めばいいし」
ちなみに、夏梨は女子サッカー部のエース的存在である。
彼女は、麦茶の入ったコップを恋次の前に突き出した。
飲めば？　と目が言っているので、大人しく頂くことにする。
「悪いけど、万一ヒゲとか遊子とか帰ってきたとき、大騒ぎになっ

We never call him but he answers us.

ても困るからさ。とりあえず空き部屋で寝てくれない？」
「おう。分かった」
そして、麦茶を一気に飲み干した。

（はぁー…空き部屋って、ここかよ…）
恋次の口から自然と溜息が出てしまうのも当然の話で、“空き部屋”に案内されたそこは、紛れもなく一護の部屋だった。
たしかに、部屋の主がいなくなってしまったここは、“空き部屋”なのだろうが、それでもつい先日までここに一護がいたのだと思うと、どうしようもなく悲しい気持ちに襲われた。
ベッドから体を起こして、部屋の中をぐるりと見回す。
大学の教材と思われるものが机の上に並んでおり、ブックエンドで無理矢理固定してある。一護の趣味か何かだったのか、ギターが棚の横に立てかけてあるのは四年前と変わらない。ベッドの掛け布団はどういうわけか相変わらずの滅却師仕様のクロス模様。昔、ルキアが住まいとしていたらしい押入れ。
もう一度机に目をやってみると、茶色の写真立てがあることに気付いた。入っている写真は、チャドの家で見たものと同じ、卒業式の写真だ。持ち上げて、よく眺める。
「こういうときでさえ、仏頂面かよ…」
彼らしいといえば、彼らしい。
その仏頂面でも、この写真の中では、そこまで嫌がっているような感じはしない。
この約三年後。一護がこの世からいなくなるなんて、誰が予想しただろう。
「……“ナリア＝ユペ＝モントーラ”…」
彼が名乗っていたものを呟き、舌を打つ。
写真立てをやや乱暴に、机に置いた。
「バカが。テメェは“黒崎一護”以外、誰でもねーだろ…」

奥歯を食いしばる。
苦しいわけでも、淋しいわけでも、怒っているわけでも、ましてや悲しいわけでもない。
――――テメェらこそ、何者だ！？
ただ、心の底から、悔しかった。

朝になって、恋次はベッドから体を起こした。一度大欠伸をかくと、寝ぼけ眼で時計を見た。…つもりだったが、その時計が置いてある方向に夏梨が立っていたので、結果的に彼女を見ることになる。
きっちり十秒固まった後、彼は漸く口を開いた。
「…夏梨？」
「正解。名前覚えたね、オッサン」
その呼び方を耳にして、恋次が眉間に皺を寄せる。
夏梨は悪戯っぽく笑った。
「冗談だよ。おはよう、恋次」
どうやら時刻はもう午前十時を回っているらしく、なかなか起きてこない彼を起こしに来たのだと言う。まあ、昨晩クロサキ医院に来た時間は午後十一時半を過ぎていたし、その後考え事をしていたので、寝坊してしまう事態も当然ではあった。
夏梨は「さっさと下りてきてね」と言い置いて、部屋からいなくなった。
とりあえず机の上に置いた髪紐で、長い髪を高い位置に結って、いつも通り手ぬぐいを頭に巻いた。
一階におりて、リビングに入ると、テーブルの上にカップ麺が一つ置いてあるのが目に入った。
「これ…何だ？」
既に湯が注がれており、若干のびてしまっているそれを見て尋ね

る。
「何だよ、カップ麺も知らないの？　…ま、とりあえず食べてよ。遊子もいないし、あたしはそんな凝ったもんなんか作れねーからな」
その直後、カップ麺の美味しさに、恋次が大喜びしたとか何とか。

一護が事故死した現場へ、二人は歩を進めていた。
この道を歩いていると、夏梨は嫌でもあの日のことを思い出す。遊子とはしゃいで、一緒に歩いていた。後ろを歩く兄に声をかけた。彼は微笑し、何かしら答えてくれた。高校生にもなって、とクラスメイトには笑われるかもしれないが、医学部の勉強で忙しい兄と共に、遊びに行こうと道を歩くのは楽しかったし、幸せだった。急患が入ったせいで来られなくなった父親がいれば、家族全員での久々の外出だった。
『ね、一兄！　どこに行く？』
『え？　あー…近くの水族館は定休日だし……お前等の行きたいとこでいいよ』
『えぇ、またお兄ちゃんそれ！？　たまにはお兄ちゃんの行きたいとこに行こうよ！』
本当は、何処にも行かなくてよかった。ただのんびりと、一緒に話したかった。兄と娯楽の時間も欲しかった。それだけだったのだ。別に、どこか遠くへ遊びに行こうとか、考えていなかった。徒歩なのだから、それは元々無理だったけれど。
「あのね…」
恋次に対し、少しずつ言葉を紡いでいく。
「一兄があたしたちを庇ったときは…正直言って、気が動転してた」
半規管が正常だったのだろう。
夏梨の視界が真っ黒に染まり、ぐるりぐるりと自身が回転しているのを感じた。途中で、一瞬全身が浮いたような気もしたけれど、誰かに体を押さえつけられている感覚があった。

一回、ぼやけていたけど空を見た。多分。
悲鳴が聞こえた。何処から？　分からなかった。
ブレーキ音が耳を突き抜ける。そして、ドッ、と体に衝撃。それで意識が若干覚醒した。
体中ズキズキしてて、頭の中がゆらゆらしてて、まともに起き上がるのにも時間がかかった。
状況把握のために視線を巡らせる。自分でも驚くほど、このときまでは冷静だった。
遠くに、スライド式の携帯が転がっていた。あれはたしか、兄のものだ。…兄？
慌てて、つい先ほどまで自分の頭に手を置いていた一護を見た。夏梨が起き上がるにあたり、無造作に頭の上からどかされた彼の手は、力なく地面の上に垂れていた。
『一兄…？』
声をかける。まだ分かっていなかったから。
『起きろよ…一兄…ほら、遊子も…』
少し二人を揺り動かすと、一護の左手が頭に置かれて気絶していた遊子が、ゆるゆると目を開ける。
夏梨は息を吐き、また一護を揺らした。
その傍らで、遊子が呻きながら起き上がり、徐に兄を見る。
『お兄ちゃん…？』
遊子が呟く。一護は反応を示さない。
やがて、目を見開く。
『お…兄ちゃん…？　ねぇ、お兄ちゃん…！』
夏梨と一緒になって、体を揺り動かした。
一護は目を覚まさない。
『ったく…一兄、いい加減、起き』
『夏梨ちゃん…』
顔を上げる。遊子が、泣いていた。
『ど、どうした？　遊子…あ、ケガ痛いのか！　まっててて、すぐに

一兄を起こして…』
遊子が肩を振るわせる。そして、叫んだ。
『お兄ちゃんが、死んじゃったぁぁあ…！！！』
うわあぁぁ…と泣く遊子を、呆然と見つめる。
彼女の言葉が、ダイレクトに耳に入ってきた。
『一兄が……死んだ…？』
起きないのは、死んでいるから？
一兄は――あたしたちを、庇って…？
『嘘だろ…一兄は…だって一兄が死ぬわけが…！！』
『うえええぇんっ！　お兄ちゃぁ～～～んっ！！！！』
嘘だよ……嘘だよ、こんなの…！
『一兄っ…！　起きて…！　起きて！　起きてよ！　一兄――――――ッ！！！』

夏梨は俯きつつも、足はとめなかった。
彼女の後ろを歩く恋次は、何と言ってやればいいのか分からない。
家族を失う苦しさは知っている。
流魂街時代、共に生きてきた家族といえる仲間は、ルキアを除いて皆死んでいった。
一日、一日と。息を吹かれた蝋燭の火のように。
「でも、そこである違和感があったんだ」
振り向かずに夏梨は言葉を続ける。
「一兄は、あたしと遊子を庇って死んだ。あたしらを護るようにして死んでたんだから、それは言うまでもないけど…トラックにつっこまれる間際、一兄が叫んでたのを昨日、ふと思い出したんだ」
――――遊子っ！　夏梨っ！！
叫ばれて振り向いた。

少し後ろを歩いていた一護が、緊迫した様子で走ってくる。
――――やめろおおぉぉおっ！！！！
そして、すぐそこまで迫っていたトラックが見えた。
何だか意味が分からなくて、夏梨は遊子と一緒になって呆けた。
次の瞬間、一護が自分達に覆いかぶさって――――、
目を開け、顔だけをこちらに向ける。
“やめろ”って、ちょっと変だと思わない？」
恋次が眉間に皺を刻む。
「“危ねぇ”とか“逃げろ”とかなら、まだ分かる。だけど、もしあたしと遊子に向けて“やめろ”って言ったなら、その意味って…？」
ハッとする。
「それは、お前等じゃねぇ相手への言葉だった…！？」
コクリ、と夏梨は頷いた。
「あの日、土曜だったから、たしかに平日よりは人が道を歩いてたんだ。一兄が“やめろ”って言う相手がいた可能性は、あると思う」
「だが、だとしたら一体誰に…」
流れ的に、一護がもし本当に「やめろ」と叫んだのなら、それは「遊子と夏梨を轢き殺すな」という意味合いのもののはずだ。ならば、対象はトラックの運転手か。
「トラックの運転手に向けていたとしても、運転手はトラックを降りて逃亡。まだ足取りはつかめてないって、警察は言ってた」
視線を前に戻し、歩き続ける。
「でも、一兄がもし、あたしたちを轢こうとしたトラックにそう言ったなら、一兄はその運転手を知ってたってことだよね？」
たしかに、そのとおりである。
全く知らない運転手が、自分の妹を殺そうとしていると察するのは少々無茶だ。

「…あ」
「？　どうした？」
夏梨の目を追ってみると、事故が起きたすぐ近くの電信柱のところに、一人の男がしゃがみこんで両手を合わせている。電信柱の下には複数の花束が供えてあった。
男がこちらに気付き、立ち上がる。
「夏梨ちゃん…？」
「洋介さん…」
見たところ、夏梨よりは年上だ。雀斑だらけの童顔で、なんだか年齢がよく分からない。
「誰だ？」
「山吹洋介。一兄の大学の友達だよ」
夏梨が説明すると、洋介は近づいてきながら首をかしげた。
「一人で何言ってるんだい？」
「いや、別に。…それより、一兄のために来てくれたんだろ？　ありがとな」
洋介は肩を竦める。
「正直言って、まだ実感ないよ？　一護が死んだの。医学部のくせに、時折授業サボってたし。今でも、“まぁ時間が経てば来るでしょ”とか、“あいつのためにノートはちゃんととっとかなきゃな”って思っちゃうんだ」
夏梨は苦笑し、腰に手をやった。
「仕方ないよ。洋介さんは一兄と仲良しだったし」
洋介の目の下には、隈が見られた。あまり寝ていないようだ。
「僕の方がまだマシだよ。そっちは大丈夫？」
「あたしはね。グジグジしてても、仕方ないし。…ただ…」
表情が少し沈んだので、洋介は淋しそうに眉を下げる。
「…遊子ちゃん？」
「…うん。今、知り合いのカウンセラーのとこに預けてる。もう少し、時間、必要みたいだから」

「そっか…。でも、早く逃走中のトラックの運転手、捕まるといいね。…と言っても、望みは低いか」
残念そうに肩を落とし呟く彼に、怪訝な目を向ける。
二人の会話を黙ってみていた恋次が、眉根を寄せる。
夏梨が思わず尋ねた。
「どういうことだよ？」
「え、知らないの？　警察が運転手の足取りをつかめない理由」
その痕跡が悉く消されてしまっているからだと思っていたが。
洋介は、供えられている花束を尻目に言った。
「あの日、一護が死んだとき、多少人が集まってきてたのは知ってるね？」
一応、首を縦に振った。
実を言うと、よく分からなかった。あのときは無我夢中で一護に声をかけていたし、また混乱もしていた。状況把握のときも、人々と言う背景に目はいっていなかった。ただ、周りに人がいる、と思ったのは、事故にあって彼に庇われた時、ブレーキ音に混じって悲鳴が聞こえた覚えがあるからだ。
「警察は、そのいたと思われる人たちを重点的に聞き込みしてるらしいんだけどね。トラックの運転手を目にしている人は、未だに誰もいないんだ」
頭の中が揺れた気がした。
目にした人がいない？　だが、一護たちを轢いて、トラックに誰も乗っていなかったなら、車から降りて逃げたはずだ。それを見ている人がいないはずがない。
「あっ、僕、バスの時間だ。そろそろ行くね。元気、出しなよ？」
時間がないはずなのに、心配そうに覗き込んでくる洋介に、夏梨は微笑む。
「大丈夫だって。ありがと、洋介さん」
一人頷くと、洋介は花束の前にまで改めてくると、ポツリと呟く。
「また、来るからな。一護」

彼は腕時計に視線を落とすと、顔を強張らせる、そして、大急ぎでその場を後にした。
洋介を見送って、夏梨は声を落とす。
「…ねぇ、恋次」
「ああ…どうやら、既にかなり、めんどくせぇことになってるらしいな…」
一護が夏梨と遊子を助ける時に叫んだ、“やめろ”という言葉。
誰にも目撃されていない、轢き逃げのトラックの運転手。
「一兄は…死んだんじゃなかった…」
ギリ、と奥歯を食いしばる。
恋次も苦虫を噛み潰したような顔をした。
「一兄は……殺されたんだ…！」
怒りで拳が震える。否、怒りを通り超え、悔しくて切なくて、涙が出そうになる。
夏梨の頭に、恋次の手が置かれた。
「泣くんじゃねぇぞ、夏梨…泣いたらオメーは、自分自身に負けたことになっちまう」
言って手を離し、その掌を見つめる。拳を作って、恋次は押し殺した声で、
「一護を殺りやがった野郎を許せねぇなら…ぜってぇ泣くんじゃねぇぞ…！！」
夏梨は無言で、小さく頷いた。
天を仰いで、恋次は目を細めた。
まだ、昼でもない。空は青い。少し雲が多いので、近々雨が降るのかもしれない。

――――雨は、嫌いなんだ。

一護がそう言ったのは、いつだっただろう。
今、雨だけは降ってほしくない、と、何となく思うのだった。

石田が、病院の中でカルテを持って歩いていた。本当は医学の勉強をやるつもりだったが、身に入らなかった。そこで、父がいないのを確認し、彼の部屋からこれを持ち出したのだ。他でもない、黒崎一護のカルテを。

彼が救急車で搬送された先は、この病院だった。最も、できたことは、一護の死亡確認のみであったが。

カルテに、何かしら情報があるのではと、石田は考えている。無論、可能性は低い。

「…ん？」

ふと、わずかな霊圧を感じて、足を止める。何処からだろうと周囲を見た。

（２０５…空き病室…？）

そっと近づき、戸をわずかに開ける。

２０５号室内に見えたのは、父・竜弦と、患者用ベッドの上に腰をおろす、一護の父・一心の姿だった。ちなみに、何があったのかは分からないが、一心は死神化した状態だ。

（どうして黒崎の父親が…？）

「断る。お前は、ここを何だと思っているんだ？」

「そこをどうにかできねーかって話で…ああっ、くそ！　話のわかんねぇ奴だな！」

辛うじて聞こえたのは、二人が中途半端に大声になったそれだけだり、他の会話は上手く聞き取れない。

（…気にすることはないか…黒崎の家も病院だし、患者を預かってくれとか、そういう用件だろう…）

実際石田は、何回か黒崎家から電話がかかり、設備の整っているこちらに患者を移させてほしい、という申し出に対して、竜弦が嫌そうな顔で承諾しているのを何回か目にしている。一護においては「じゃあそっち連れてくからな！」と一方的に言って電話を切るの

で、何度喧嘩したことか。まだ正式な医者でもないくせに…と言ってやりたくなるが、それはこちらも同じだった。

開けたときと同様に、二人にバレないようにそっと戸を閉める。

石田は、カルテを持ち直して再び歩き始めた。

We never call him but he answers us.

案外早めに投稿できました続きです。

今回明かされた、一護は医学部だったという話。
まぁ彼なら、死神じゃなくなっても人を護ったり救える仕事がしたいと考えるんじゃないかな、と思い、さらに自宅が病院なんだから、医学部しかないだろうということになりました。
でもあんな常に眉間に皺を寄せてるお医者様って…ちょっと、ヤダ（笑）

初めて一護が死んだ瞬間のようなものを書いた気がします。
書いていて正直辛かった…遊子ごめん…なんか二代目雛森になりそうで君怖いよ…織姫頑張って。↑

進展の少ない小説ですみません。
しかも亀更新…今回は多少はやめでしたが、多分次は来月になるかな、と思ってます。

お気に入り登録数１００件越えに衝撃。ありがとうございます！
もしよかったらこれからも見放さないでみててやってください。

あと、今更ですけど「ｄｉｅ　ａｎｄ　ｌｏｃｕｓ　＊　ｓｉｄｅ　ｓｔｏｒｉｅｓ　＊」といって、番外編を複数読むことができたりしますので良ければご覧くださいませ。

それでは、またれいによって次はいつになるか分かりませんが、こ

の長編小説をお楽しみいただければ幸いです。

感想等あったらお願い致します！

We never call him but he answers us.

「え――――っ！？　まだ隊長戻ってきてないの！？」
桐生の絶叫に、二人の男は揃って呆れ顔で頷いた。
「一回連絡はとったんですけどね…“もう少し待て”と…」
ちなみに、零番隊隊長の黒崎一心が“もう少し”を言い始めて、早一ヶ月である。
黒髪の男が片手を額にやり、唸った。
「信じられねぇ…あの人、俺達のこと過信してんの？　それとも単なるイジメ？」
「龍桜（りょうおう）なら、たしかに任せられそうだしね」
「本っ当に勘弁してクダサイ…」
泣きそうな心境である。
桐生も、腕組みをして溜息を吐くしかなかった。
「まぁ、隊長のことだから、絶対正当な理由があるんでしょうけど…こっちも余裕ないってのに…」
龍桜が軽く首を傾け、
「あー…十四郎さん？」
と尋ねれば、彼女は首肯した。
「昨日、陛下とお会いしたって聞きましたけど…本当なんですか？」
金髪の男は、桐生がまた頷いたのを見て、うわぁ…と声を漏らす。
“霊王”は『崩玉』を封印して以来、王家の者達と面会する数もめっきり減っていた。実際、好き好んであの堅苦しく呼吸困難に陥りそうになるような“霊王”と面会する者などいないのだが、それでも衰弱しているのは明らかだった。
それで、どうして浮竹が“霊王”と面会できたのかといえば、他でもない“霊王”が会いたがったからなのだろう。
「浮竹さんって、体弱いんでしたっけ。霊圧にアテられちゃったとか」

「ふざけるのは止してちょうだい、蘭(らん)」
「ごめんなさい」
蘭は慣れた動きで土下座した。いつものことだ。
「でもまぁ、そりゃあ怒るだろ、十四郎さんなら」
龍桜がアッサリと言うので、桐生は恨むような視線を送る。
「あのね…浮竹が本気で怒っちゃったの。私じゃどうにもできないの。というか、今は彼に近づきたくないわ。眼力だけで殺されそう」
「桐ちゃんが怒った時の方が、僕は怖いです」
「蘭……」
「ああっ、そんな目で見ないでください！　冗談です！　一割！！！」
涙目で土下座する蘭の頭を足で踏みつけ、二回ほどつま先をぐりぐりとひねって、桐生は溜息を吐いた。
「ただでさえ人手不足なのに、あれじゃ浮竹、話も聞いてくれない気がする…」
龍桜が肩を竦めた。
「俺、十四郎さんが怒ったところ見たことないんだけど、そんな怖ぇの？」
桐生は真顔で、こう言い放つ。
「本気で怒った総隊長と卯ノ花隊長を足したのよりも怖い」
「成程、すげぇわかりやすいな。十四郎さんヤベぇ」
やがて三人は顔を見合わせ、がっくりとうなだれた。
頭を踏みつけられた状態で、「あ」と蘭が声をあげる。
「桐ちゃん、そういえば、時間大丈夫ですか？」
「え？」
「あ、ほんとだ。お前、そろそろ行かないとヤバくね？　間に合わなくなるぞ」
一瞬停止してから、桐生もようやく思い出したように目を見開くと、慌てて走り出した。
「龍桜、蘭！　浮竹のご機嫌とり、頼んだわよ！」

そう言い置いて、さっさと瞬歩で消えていった。
残された二人は、揃って沈黙した後、龍桜が歩き始める。
「というわけだ。蘭、頼んだぜ」
「面倒事全部僕に押し付ける癖、なんとかしませんか？」
しかし、その言葉が言い終わる前に、さっさと龍桜も姿を消していた。いつものことながら、蘭も今回ばかりはなかなか嫌な仕事であった。
さて、どうやって浮竹の機嫌をとろうか…。

四番隊綜合救護詰所に入れられていた日番谷と狛村は一日で仕事に復帰したが、夜光は三日目の今日も相変わらず病室のベッドに横になっていた。表向き、“まだ気分が悪いと本人が訴えた”ことが原因で、退院を先延ばしにしたことになっているが。
「やってらんない…」
うんざりと呟き、息を吐き出す。
実際は、背中の傷の痛みが増している等から、昨晩密かに受けた精密検査の結果待ちなのである。
五番隊の仕事を全面的に任せる形になってしまっているので、早々に隊に戻りたいのだがそうもいかない。
ふいにノックの音がして、「はい」と答えた。
入ってきたのは、四席にまでなった山田花太郎だ。もっとも、気弱そうなところは一切変わっていないけれど、そこが彼の良いところでもある。ちなみに、七席のとき兼任していた第十四上級救護班班長は一昨年、六席の死神に移されて、今では第八上級救護班班長を兼任している。
「瑠璃谷隊長、傷の具合はどうでしょうか？」
苦笑して、首を横に振る。ズキズキと痛み、体を起こすのも困難だ。
花太郎の手を借りて、漸く上半身を起こす。体が鉛のようである。

「ごめんね、花」
「い、いいですよ！　それより、また処置しますから、こっちに背中を向けてください。包帯はあとで虎徹副隊長が替えてくれると思うので、今は上から鎮痛しますから」
夜光は言われたとおりに背中を向けて、白い着物を上半身だけ脱ぐ。きつく、幾重にも巻かれた包帯が露わになった。
花太郎は気を引き締めると、両手を包帯の上からかざす。掌が、薄く光り始めた。
「そういえば、頭の方はどうですか？」
夜光は、破面化した一護が現れたとき、卍解状態で派手に狛村と衝突するという事故に遭った。あちらも卍解、こちらも卍解では、当然衝撃は恐ろしいもので、脳震盪を起こした上に出血もあったのだ。
「うん、大丈夫。狛村隊長とぶつかっただけだし、おでこのは一日で治ったよ」
わざと得意気に笑ってみたが、花太郎は「よかったぁ」と呟きつつも、顔は能面のようであった。
…やっぱりか…。
「ね、花。訊きたいことあるんだけど」
「……」
「…おーい、花～…」
「……」
多分、意図的な無視ではなく、本当に気付いていないのだろう。だが、これだけの至近距離だと、少し不快だった。
「…花…」
「……」
「山田花太郎第四席！！！」
「わぁ！？　す、すみませんごめんなさい！！！」
「あ、いや、謝ってほしいわけじゃ…」
花太郎は、四席になっても七席の時と同様に、三席の伊江村八十

千和にしばしば怒られている為、未だに謝罪癖は直っていない。
「え？　あ、す、すみません！！！」
このままだと、花太郎は謝罪スパイラルに迷い込んでしまう。
夜光は咳払いをして、口を開いた。
「あのさ、訊きたいことがあるんだけど、よろし？」
「なんでしょうか？」
視線を前に、背中の傷の鎮痛処置を受けながら、はっきりとした声でこう尋ねた。
「余命、かなり短くなってた？」
瞬間、花太郎が息を呑んだ。
質問攻めにはせず、夜光は彼の返答を待つ。
妙に喉が渇いたので、あとで何かを飲みに行こうかな、と考え始めたとき。
「な…何言ってるんですか？」
と、花太郎が中身のない笑いを漏らす。
「瑠璃谷隊長は、この怪我を負ってからちゃんと治療を続けてますし、そんなことありませんよ！　寧ろ、あと一年弱っていう余命も延び始めてるくらいです！」
「……」
「心配することなんかないですよ！　卯ノ花隊長だって、瑠璃谷隊長の容体は、少しずつ」
「花」
別に、大きい声ではなかった。でも何だかよく聞こえて、花太郎は口を閉じる。
夜光が、ベッドのシーツを少しつかんだ。ややあって、
「ありがと。それ聞いて、安心したわ」
ふわりと笑う。
彼は俯き、かざしていた手をゆるゆると下げた。
僅かな間、無音の時が流れた。夜光は花太郎にそれ以上何も問わず、花太郎も花太郎で、無言を突き通す。

それから数分、再び、病室の戸が叩かれた。
「はーい」
答えると、戸を開けて入ってきたのは、勇音だった。
片手のおぼんには、包帯や薬品がのっており、もう片手には分厚い紙の束があった。
「山田四席、鎮痛処置は終わった？」
問いかけられて、花太郎は立ち上がると小さく頷いた。
「じゃあ、あとは私がやるから。あと瑠璃谷隊長、精密検査の結果、出ました」
夜光は「ふぅん」と相槌をうつ。
「あ、あの…虎徹副隊長、あとはよろしくお願いします！」
花太郎が深く頭を下げると、彼は小走りで病室を後にした。
勇音はベッドに近づき、その傍らに置いてある机の上に持っていたものを全て置き、夜光に向き直ると、彼女に巻いてある包帯に触れた。
「取り替えますね」
ただ、頷く。
スルスルと、手慣れた様子で包帯が取られていくのを感じる。
「あのさ、勇音さん…」
「はい？」
包帯をとりながら、答える。
相変わらずの酷い背中の傷に、つい顔が歪む。ここまで酷い怪我を拝むことになるのも、正直言ってそうそうあることではないだろう。
「……あたし死んだら、桃は怒るかなぁ…？」
思わず、手が止まる。が、何事も無かったかのように再び動かし始め、「え？」と聞き直した。だが、それに対し夜光は、
「ごめん、なんでもない」
と返し、黙った。

処置が完了し、夜光は再びベッドに体を倒す。
「それで、精密検査の結果ですけど…」
「ああ、あの、それ、いいや」
ひょいと彼女が手を挙げたので、結果を読み上げようとしていた勇音が瞳を瞬かせる。
「花から“良好”って聞いたから。それでいいし、難しいこと言われても、あたし分かんないし」
そのとき、勇音の手が小さく震えたのを、夜光は見逃さなかった。
「あら、そうでしたか。山田四席もわざわざ先に言っておくなんて、随分気が利くようになりましたね」
突如聞こえた声に、夜光と勇音は同時に戸の方を見る。いつの間にか、卯ノ花が立っていた。
「卯ノ花隊長…！」
「それならば、もうここはいいでしょう。勇音、隠密機動の方々の治療が追いつきません。行きますよ」
え、え…、と勇音は夜光と卯ノ花を見比べていたが、卯ノ花がさっさと病室を後にしてしまうので、慌てて彼女も夜光に会釈をすると、薬品類を抱えて急いで病室を出て行った。

勇音は廊下を早歩きで進み、卯ノ花に追いつく。
「卯ノ花隊長、いいんですか、あれで？　夜光ちゃんの容体が良好だなんて、そんな…」
「いいのですよ」
歩調は緩めず、静かに瞳を閉じる。
「彼女自身……もう、分かっているでしょう…それに、彼女は今日の夕方、退院させます」
それは、まぁ、そうですけど…。
納得のいかない様子で唸る勇音を尻目に、卯ノ花は一瞬足を止め、夜光の病室を振り返る。

「…彼女には、やるべきことがある――――」

やはり、四番隊の治癒の力というのは伊達ではない。先ほどまで激痛だった背中の傷が、嘘のように大人しくしている。

（…夕方には退院する…）

ムクリと体を起こし、掌を見つめる。

夕方の退院については、精密検査が終わった直後に卯ノ花から言われていた。言われたときは結構突然だったので驚いたが、これ以上入院したところで手の施しようがないことも重々承知していたので、それならさっさと退院したいと思っていたがゆえに、丁度よかった。もっと早く鎮痛処置を受けられたなら、今朝退院しても良かったくらいだ。

――――やるべきことを、おやりなさい。

（『やるべきこと』……ね…）

たしかに、これ以上五番隊の仕事を、雛森や他の隊士に任せるのは良くない。すぐにでも仕事に復帰するべきだ。隊長印の必要な書類もかなりあるだろう。

やがて、夜光は少しを眉を上げた。

「…あれ、桃？　いるの？」

合間があり、カチャッと扉を開けて入ってきたのは、やはり雛森だ。

「いつもよく分かりますね、隊長…」

「まぁ～、正直得意なの、これだけだからね」

にしし、と夜光が笑うと、彼女もクスリと微笑んだ。

ベッドのところに歩み寄ってきて、小首を傾げる。

「隊長、大丈夫なんですか？」

「大丈夫だよ。夕方には隊舎戻るしー、なんていうか、気分が悪い

のは寝すぎたからだよ」
「それは、仕方ないですよ。だって隊長は、余命一年弱なんですから、もっと寝たほうがいいくらいなんじゃないですか？」
雛森の言葉。
それに、夜光は固まった。たしかに今、有り得ない言葉が混じっていた。知っているのは、乱菊と四番隊の者だけであるはずのことが、何故雛森の口から出る？
彼女は険しい顔つきで、夜光を睨んでいた。
「……あたし、隊長から直接聞いた覚え、ありませんけど？」
「……なんで…知ってんの？」
「隊長が詰所を抜け出していた間に、日番谷くんが違和感に気付いて、勇音さんから聞き出したんです…事件のことも、傷のことも…余命のことも」
いずれ、ばれるだろうとは思っていたが、予想を絶する早さだ。
つい、溜息が漏れた。
「……それで？」
「どうして言ってくれなかったんです？　あたし、そんなに頼りないですか？」
「別に。ただ、言ったらお前等はすぐにあたしを気遣い始める。それは正直、嫌なんだよね」
「言われなかった身にもなってください！！」
叫ぶ雛森に、
「あたしの意志はあたしのもんだ！！」
と、夜光は叫び返した。
「……悪かったとは思ってる。でも、あたしは余命がどの程度だろうが、知らない。生きられる時は生きるし、死ぬ時は諦める」
天井を見上げる。
「あたしはあの小っこい虚を死ぬほど可愛がったよ。その結果、流魂街の人たちは沢山死んだ。なのに、この程度であたしが“死ぬのは嫌だ、怖い”とか喚いたら、それこそ怒られるよ」

小さく、呟く。
「それに…死んだ、あの中には…」
そして言葉を飲み込み、手をひらりとふり、「まぁ、これはいいや」と話を強制終了する。
雛森を向くと、自嘲気味に笑った。
「あと、あたしは実は、マジで往生際が悪い。そうそう死なないよ」
彼女が下唇を噛み締め、一度俯く。震えた声を発する。
「隊、長……っ…」
瞳が潤んできていることに気付き、夜光は呆れ顔で雛森の頭をポンポンと撫でた。
「あ〜もう、泣くな泣くなー」
幾度も頷き、雛森は涙を拭って顔を上げる。
漸く顔上げたかと思えば、
「そ、そういえば、隊長に、渡したいものがあるんです！」
彼女は懐をゴソゴソと探る。
「……あたしに？」
キョトンとした様子で言う。
「はい！　えっと…これ、なんですけど…」
そこで雛森が差し出してきたのは、花の髪留めだった。薄緑色の蜻蛉玉がいくつも連なり、装飾してある。それはその花の葉の部分ともとれた。また、その花本体は白い貝で作られており、光に反射すると鈍く虹色に輝いていた。
「おお、綺麗…！　花…だよね？」
「そうですよ。待雪草（まつゆきそう）の髪飾りです」
「待雪草……って、十三番隊の隊花の？」
自分は五番隊だが、と思わず突っ込みそうになる。五番隊の隊花は、馬酔木（あしび）であって、断じて待雪草ではない。
雛森は決まりが悪そうに笑った。
「あはは……す、すみません…でも、隊長に差し上げる花を選ぶなら、これしかないと思って」

既に傾き始めている太陽の光にあてるように、髪飾りを翳しつつ、夜光は目を細める。
「待雪草がねぇ…何でまた？」
雛森が、微笑んだ。
「……隊長、待雪草の花言葉は御存知ですか？」

待雪草の花言葉は――――――

ひらり、と一羽の地獄蝶が舞ったのは、雛森が病室を退室して間もなくだった。

――――これより一時間の後、緊急隊首会を招集いたします。尚、阿散井恋次三番隊隊長
は未だ帰還されておりませんので、隊長代理吉良イヅル三番隊副隊長を招集いた
します。以上…

We never call him but he answers us.

遅くなりました。続きです。
久々なのに話の進展がなくて申し訳ありません；
でもこれもないといけない話のなのです。追々困る↑

今回進まなかった分次回ではかなり進むはずです。

そういえば花太郎は四席にまでなってました。大出世！（笑）
夜光の余命はどの程度なのかはここでは明かしませんでした。どこかで明かします。ええ、必ず。

あと待雪草は次回だからいいんですけど、馬酔木は花言葉をわざわざ書くところがありませんので参考までに。
馬酔木の花言葉は「犠牲」「危険」といったものです。長いのでは「あなたと二人で旅をしましょう」とか。

少しだけ今だけは余裕があるので、次回はちょっと早めに更新できるかな、と思っていますので。頑張ります。

感想等よければお願い致します！

We never call him but he answers us.

薄暗い道場の中、たつきは一人、空手道着を着たまま座り込んでいた。今日は稽古の日ではなく、生徒は誰も来ていない。ただ、彼女が気分転換にと訪れ、気分転換にと突きの練習をサンドバック相手にして、気分転換にと型を練習した。やがては疲れて、座り込むに至った。否、疲れたというより、気分が晴れなくて体を動かすことに嫌気がさした、とでも言えば語弊は少ないだろうか。

汗を拭う為のタオルを頭に被り、密かに息を吐く。

「有沢？」

聞き覚えのある声に、たつきはゆるゆると顔を上げた。

道場の中を覗き込むようにしていたのは、啓吾だった。

「浅野…？　何してんだよ、こんなトコで」

まさか啓吾が、今になって空手を教えてくれと言いに来たとは思えない。

「いや…姉ちゃんにまた使い、頼まれちゃってさ。すぐそこのコンビニ行ってきたんだけど」

彼ももう大学二年生という年だが、未だに姉のみづ穂には頭が上がらないようだ。“恐妻家”ならぬ“恐姉家”である。

「前通ったら、何か誰かいるような気がして、覗いてみた」

言ってから、啓吾はボソリと「霊圧ってヤツかも」と独り言ちた。その科白が、自分は普通の人間ではない、と言っているようにも感じられて、無条件に気分が沈む。

顔だけを覗かせていた彼が、道場にいるのはたつきだけであることに安堵したのか、躊躇うことなく中に入ってきた。別に、それに対し彼女は拒みもしない。

道場の中を眺めてから、啓吾が目を細めた。

「…一護が、前にここに来てんのは見たけど…」

彼は幾度か一護が、大学生になってからここに来ているのを目撃

していた。
たつきがまた、俯く。
「まぁ、ね。一護のやつ、あたしに空手習いに来てたんだ」
少し、驚く。
アルバイトの話題があがったとき、たつきが「道場の師範代をやっている」と明かしたら、一護は「絶対に習いたくない。お前を先生などと呼びたくない」と零していたのだ。その後、彼がたつきに殴られたのは、言うまでも無い。
「あいつと組手するの、滅茶苦茶久しぶりでさ。正直、びっくりしたよ。動きが俊敏すぎるっていうか、人間離れした動きっていうか」
啓吾が、脳裏に四年前の出来事を思い出させる。
訳の分からない事態だった。町中の人が寝ていた。皆、起きなかった。やっと会えたたつきから、町ごとどこかに転送されているようだ、ということを聞いたとき、何だこれは、現実か、と何度疑ったか知れない。
藍染に初めて会った時、体中が重くなった。今思えば、一護が全て終わった後に解説してくれたものにある、「霊圧」と称されるものが原因だったのだろう。
あれほど怖いことはなかった。自分は何もしていない。なのに確実に殺される。相手は自分が死を恐れ、友達と一緒になって逃げ惑うのを面白おかしく眺めている。
こんなに怖いことがあってたまるか、と怒鳴りたくなった。勝てるわけが無い、と喚きたかった。どうしてこんなことになった、と誰かに問いをぶつけたかった。皆が皆、そういう状況であったから、そんなことはできなかったけれど。
そして、いよいよ死ぬんだ、というとき、黒崎一護は少し成長した姿で現れた。
後から、一護から全てを聞かなくても、あの光景を目撃しただけで、不思議なほど自分は理解していた。

勝てるわけが無い。どうして自分が死の危険に晒されないといけない。恐くてたまらない。どうしたらいいか分からない。怖い。恐い。こわい。

その中、彼は立っていた。刀を握り締めて、決意のある瞳で。
『…みんな、そこにいてくれ』
穏やかで、しかし、強かった。そう、思った。彼はクラスメイトだけど、自分なんかより遥かに強いと、そう思った。
『そのまま、じっとしててくれ』
自分たちがあれほど恐れていた藍染から、一護は逃げ惑うなどと無様なことはしなかった。ただ静かに、会話を交わしていた。
『場所を移そうぜ。俺は空座町(ここ)では戦いたくねぇ』
彼がそう言ったのを聞いたとき、嗚呼、と声を出しそうになった。

護りたいんだ、あいつは。
俺達を。
この町を。
大勢の人を。

あの人間離れした者達と、一護は幾度も戦ってきた。死神といっても、彼は人間であることに相違ないはずなのに、だ。
当然、その辺にいるような人間にできない動きができるはずだ。
彼は、全てを護る為に、それを習得してきていたのだから。
「インハイ行くあたし程度じゃ、話になんないはずだよな」
たつきは疲れたように笑う。が、失敗した。結局変な風に顔を歪めてしまい、泣くかのような表情になってしまう。
「でも、いきなり、動きが鈍くなったことがあったんだ。勿論あたしは必死だから、瞬間的には気付けないわけ。で、一回、派手にあいつの首、回し蹴りしちゃってさ。倒れて動かなくなるもんだから、さすがに焦ったね」

話を聞きつつ、啓吾は道場の端に置かれている透明のボックスケースに歩み寄った。中に複数のトロフィーや賞状が入っている。たつきのものは、なかった。多分、高校の部室の方に置かれているのだろう。
「心配になって、覗き込んでみたら、一護はなんか…不思議な目で、あたしを見てた」

『……いってぇ…』

「泣きそうに、してた気がした。あたし、“どうした？”って訊いたんだ。そしたら…」

『…辛れぇ、な…』

「辛い？」
啓吾が眉を顰める。たつきは肩を竦めた。
「意味わかんないだろ？　だからあたしも、こう返した。“何が？”って。もう戦う事もなくなって、命が危ぶまれるようなこともないのにさ。でも…」

『もう…俺にユウレイは見えねぇ…どんなに体を鍛えても…どんなに体が強くなっても…俺は皆を護れねぇ…』

「……あたし、多分本当は、分かってた。あいつは、死神だったときの戦いを、苦に思ったことなんてきっとない…」
啓吾は、たつきの言葉を背に聞きながら、窓越しに空を見上げた。
空はすっかり暗雲に覆われて、今にも雨が降ってきそうなほど重くなっている。
「……っ…」
奥歯を食いしばって、黙り込むたつき。

「有沢…」
啓吾が、彼女の前に百円玉を二枚置いた。
「これで、一応ビニール傘、そこのコンビニで買っとけ。俺、金欠なんだから、今度返せよな」
そして、彼は足早に道場を去った。
たつきは、目を固く閉じる。曇りであるゆえ、とても光の弱い西日の差し込む道場で、あのとき一護は、倒れたまま、ただ呟いていた。自分はそれを、聞いてやることしか出来なかった。
「一護……」
幼なじみなのに。
「一護っ……！」
ずっと彼に助けてもらっていたのに。
「…一護っ……！！！」
自分は……！
「あああああぁぁぁぁあああぁぁあっっ！！！！！！！！」
慟哭する。
これまで堪えていた分を、吐き出すように。

『俺は……無力だ……』

無力？　バカじゃないの。無力ってのは、あたしみたいなヤツのことを言うんだ。
道場に誰もいないことをいいことに、幼児のように泣きじゃくった。どこかで、自分はこうして、吐き出す場所が欲しかったのかもしれない。一護が、死んだときから。一護が、無力だと呟いたときから。
でも、吐き出す場所が、一護と初めて出会った道場であることは、何かを意味を感じるような気もすれば、皮肉な気もした。
ただでさえ薄暗かった道場が、さらに暗さを増した。

空から雨が、一滴ずつ落ち始めた。

＊　＊　＊

一番隊隊長兼総隊長・山本元柳斎重國総隊長を初め、二番隊隊長・砕蜂、四番隊隊長・卯ノ花烈、五番隊隊長・瑠璃谷夜光、六番隊隊長・朽木白哉、七番隊隊長・狛村左陣、八番隊隊長・京楽春水、九番隊隊長・檜佐木修兵、十番隊隊長・日番谷冬獅郎、十一番隊隊長・更木剣八、十二番隊隊長・涅マユリ、十三番隊隊長・浦原喜助が整列し、一番後ろ、列と列の真ん中に三番隊隊長代理の副隊長・吉良イヅルが跪いていた。

「これより、隊首会を行う！」

元柳斎の荘厳な声が響く。

「まず初めに、卯ノ花烈」

「はい」

卯ノ花が列を外れ、前に歩み出る。

「破面化した死神代行・黒崎一護の奇襲を受け、傷を負っていた者達の容体は？」

「隠密機動の方々は回復に向かっていますが、未だ意識を取り戻す兆しも無い方もおり、暫くの間は機能しないかと思われます」

チッ、と舌打ちが聞こえた。

もしかしなくとも、砕蜂であろう。

「また、治療を行いました、日番谷十番隊隊長、狛村七番隊隊長、瑠璃谷五番隊隊長は、ご覧のとおり、本日夕方において、全員無事復帰いたしました」

その科白に、日番谷が無言で夜光を見つめた。

彼女は、妙に彼からの視線を痛く感じて、思わず目を背ける。

そういえば、自分の背中の傷や、余命のことを詮索したのは、日番谷だったっけ。

変な広まり方をしたので、少々気が滅入る。

「よろしい。では、本題に入ろうかの」
卯ノ花は一歩下がり、列に戻る。
「昨日、中央四十六室より決定が下った。破面化した死神代行・黒崎一護の残留霊圧を測定。また二番隊並びに十二番隊の報告書から、大罪人藍染惣右介を忍ぶやもしれぬ数値が弾き出された」
「藍染を忍ぶ…か…」
日番谷が眉間に皺を寄せる。
「たしかに、彼は破面化したことで強くなっていることは感じていましたが、それほどとは…」
狛村は、卍解を用いて一護の放った虚閃を真っ向から向かい打ったが、その威力は大虚や巨大虚と比べたら、歴然の差だった。
「よって、現世、尸魂界を危険に侵す者として、場合によっては全面戦争となろう」
ギク、と浦原の顔が強張った。
予想をしていなかったわけではない。だが。
――――…まさか…。
「黒崎一護を、敵と見なす。拘束の必要もない。発見次第即刻に、処刑せよ！」
会場の空気が、揺れる。
皆が一様に動揺した証拠だ。何度も尸魂界を救い、そして手を貸してくれた一護の処刑命令は、あまりに突然だった。
「でも山じい？　僕たちは、一護くんに大きな借りがあるんじゃない？　いくら何でも、まだ事情もはっきりしてないのにさぁ」
京楽は、腑に落ちない様子でそう言った。それは、他の隊長格の胸中を代弁しているようでもある。
「だが、我らに刃を向けたのは、紛れもない事実。更に、莫大な力までもを秘めておる。事が起きてからでは間に合わぬ」
拳を握り締め、歯を食いしばる。次いで、夜光が無意識のうちに、眉間に皺を寄せた。
「そして、未だ現世に滞在している阿散井恋次には継続し、強制帰

還を要請。尚も抗うようであるならば、三番隊隊長を排斥、瀞霊廷からの追放処分とし、副隊長・吉良イヅルを隊長に任ずる」
瞬時に、跪いていたイヅルが立ち上がり、叫ぶように言った。
「お待ちください！　僕はそんな！！！」
ゴァン、と音がした。
元柳斎が杖で床を叩いたのだ。
「異論は聞かぬ！！！」
怒鳴り声が、響く。
音の無い空間となって、数秒。
「うざ」
ポツン、と、夜光が呟き、それに気付いた全員が、彼女を見る。
「……何？」
元柳斎が聞き返すが、彼女はそれ以上言葉を紡がなかった。
「これにて、隊首会を閉会する」
同時に、全員が瞬歩を使って消えていく。
と、そのとき。
「浦原喜助」
彼に呼び止められ、瞬歩を使おうとしていた浦原が、きょとんとした顔つきでこちらを向く。
「おぬしには話がある」
ああ、と思い出したように、浦原は元柳斎に歩み寄る。そこで、シュンッと彼の目の前に、一人の死神が現れた。
「あなたは…！」
浦原が、目を見開いた。

（ムカつくムカつくムカつくムカつく…！！！）
完全に腹が煮えていた。
もう、許すことなどできなかった。元柳斎に対して、でもあり、自分に対して、でもあった。もっと言ってしまえば、何もかもに対

して許せない思いが渦巻いている。
　瀞霊廷の中をズンズンと大股で歩いていると、花太郎にばったりと出くわした。
「花！」
「瑠璃谷隊長っ…！？　お、お疲れ様です！」
　会釈する彼に、“うん”と頷いてみせる。
「あっ、隊首会、終わったんですね。今回は…また、一護さんのことですか？」
「ああ～…まあ、そうっちゃそうなんだけど…」
　たしか、花太郎は一護の治療を幾度もしたことがあり、逆に救われたこともあると聞いている。当然、心優しいこの四番隊四席は、口では言わなくとも話を聞きたいと思っているはずだ。
　どう説明しよう、と思案したところで、夜光の頭に妙案が浮かんだ。
「花」
「はい？」
　ニッと笑う。頭の待雪草の髪飾りが、チャラッと揺れて、白く光った。

　――――やるべきことを、おやりなさい。

「ちょっと、頼まれてくれる？」

　狛村は無言で、墓の前に佇んでいた。
　二つの墓。片方はよく知る者で、もう片方はよく知らないが、大切にすべきである者。
　サクッ、と草を踏む音がしたと思えば、彼の傍らにやってきて、檜佐木は狛村の真似をするかのように言葉もなく墓を見下ろした。
（…東仙…）

この墓に永眠るのは、東仙要。かつての九番隊隊長であり、市丸ギンと同じで尸魂界の裏切り者だ。死に物狂いで戦い、心から理解しあうことができたとき、彼は一瞬にして、藍染に息の根を止められてしまった。たとえ裏切り者でも、狛村と檜佐木にしてみれば、東仙はかけがえのない死神だった。愚かな事も、大事な事も、全て教えてくれた死神だった。

「狛村隊長は…」

檜佐木が徐に切り出す。

「黒崎一護の処刑命令を、どう、受け取ってますか」

「……」

脳裏に蘇るのは、人間なのに死神となって、命を懸けて世界を救ってくれた姿と、あの、真っ直ぐな瞳。

「…元柳斎殿の苦渋の決断ではなかったのかと、思う。だが…儂も、些か戸惑った」

墓から視線を外さず、

「さっき、隊首会が終わってすぐ、俺は朽木に伝えに行ったんです…」

未だにルキアは、隊舎牢に入れられている。

毎日のように、霊圧を制御されては放つことのできない鬼道を放とうとしながら。

「…凄かったですよ。隊長の俺が、っていうか、もう全面的に、ボロクソ言われました」

言って、苦笑した。

ルキアの怒り方は、相当なものだった。

『我々死神の思考は、一体どうなっているのですか！！』

目を血走らせて、鉄格子にしがみつき、

『あれだけ一護に頼っておきながら、都合が悪くなれば処刑する！？　これが護廷十三隊ですかっ！！！』

仕方ないだろう、と返した檜佐木に、牢自体が吹っ飛ぶのではないかという大音声で。

『それが死神の誇りですかっ！！！　それでもあなたは隊長ですか！！！』

檜佐木は、その言葉を思い出して頬を掻いた。

「いやぁ…なかなかあれは、こたえました」

「檜佐木……」

「正直、分からないんです。阿散井の強制帰還や処分を聞いて、俺も心のどこかで何か納得がいってなくて。阿散井は隊首羽織を脱いで現世に行きました。でも、もしかして、隊長の在り方って、命令に忠実の他に、もっと沢山あるんじゃないかって…最近は思うんです…」

狛村は目を閉じた。

「……東仙は、愛する者が好きだった世界を護り続けた。だが、東仙自身は愛する者を奪った世界を憎んでいた…否、東仙は自身の弱さを憎んでいたのだろう…だからこそ、自ら虚の力に手を出した」

一度、彼の墓の隣りにある東仙の愛した女の墓を見やってから、檜佐木の方を向いた。

「正義を一言で語ることは、できないのではないか？」

二人の死神を前に、日は彼方へと沈んでいった。

夜中の月は、呆れるほど美しかった。

小窓からそれを見上げていたルキアは、溜息を吐く。

隊舎牢に入れられて、もう五日ほど経つ。現世で恋次はどうしているだろう。一護に関する情報は手に入れただろうか。夏梨や遊子のことも気がかりだ。そもそも一護は今頃、虚圏でどうしているだろうか。

『黒崎一護に護廷大命が下った』

実質、処刑命令。

どうするべきだろうか。このままでは尸魂界は、一護を敵として処理する。そんなものは見たくない。

チラリ、と見張りを見たが、律儀にも居眠りせずに番をしている。手錠も外せそうに無い。かといってじっとしていることも難しい。
（どうしたら…）
毎晩、気持ちばかり急いて、こうして遅くまで考えているが、結論は出ない。自分は白打もあまり得意とは言えないし、大体、そんなものでこの厚い壁や鉄格子を破れるとも思えない。第一、手錠の鎖を引きちぎるなんて、非現実的だ。“出せ”と訴えたところで無駄であるのは、最初の二日間でよく分かった。
――――コツッ。
「！？　誰だっ！？」
見張りが物音に気付き、警備用の武器に手をかける。
（…上…？）
ルキアは天井を見上げた。見張りも同様だ。今の音はたしかに、上からした。しかしそこには何も見られない。
気のせいか、と見張りが肩から力を抜き、座り直した、瞬間。
ポトッ、と、水滴が二滴ほど、その見張りの額に落ちた。
「…へ…？」
一瞬にして、見張りがその場に崩れ落ちる。
「何だ…！？」
思わぬ事態に、ルキアも思わず、牢の中で身構える。
タン、とした音は、まるで天井から飛び下りたような音だ。しかし、やはりそこには誰もいない…かと思われたが、ゆるゆると足元から、その姿が露わになった。
ルキアが思わず、目を見開く。
「や…夜光殿…！？」
「ちっす、ルキア」
軽い調子で手を挙げてみせる。
「ごめんねー驚かせて。見えなくて焦ったっしょ？」
「ど…どうやって…」
そこでルキアは、夜光から少し離れた後方で、手を構えている雛

森の存在に気付いた。
彼女が小さく笑う。
「縛道の二十六番、“曲光(きょっこう)”です」
“曲光”。対象物を覆い、視認できなくする鬼道である。どうやら、今回その“対象物”が、雛森と夜光だったらしく、それで見えなかったようだ。
「本当、桃って鬼道の達人だよね。マジすごい」
夜光の褒め言葉に、雛森が会釈する。
ルキアが、倒れた見張りを見つめていることに気付いた。
「あ、それ、“穿点(がてん)”だから大丈夫。花に頼んで、四番隊から持って来てもらっちゃった」
ちなみに、“穿点”は麻酔系薬物の一つである。
今一つ現状がわからないルキアは、戸惑うばかりだ。そうこうしているうちに、夜光が見張りの懐を探って取り出した鍵を用い、牢を開け、斬魄刀を抜くと彼女の手錠を壊して外した。手錠の鍵は見張りは持っていなかったのだ。
信じられない思いで、ルキアは自分の手首を見下ろす。
「これ」
さすがに天井にはりつきながらの荷物は厳しい、と呟きながら夜光が差し出してきたのは、ルキアの斬魄刀・袖白雪だった。
「これは…」
受け取って、瞳を瞬かせる。尸魂界に連れ戻された時、気を失っている間に没収されてしまった自らの斬魄刀が、ここでこうもあっさり、手元に戻ってくるとは思っていなかった。いつも携帯しているものであるはずなのに、まるで斬魄刀を手に入れて間もない死神のように、まじまじとそれを見つめてしまう。
「あ〜、あと、これと、これね」
続いて夜光が懐から取り出したのは、九番隊の副官章と、風呂敷で包まれた少し大きめの物体。受け取って、これもまたジッと見つめた。

「それ、三番隊の隊首羽織。現世で恋次に渡して。勿論、ちゃんと着とけ・って言っといて」
「夜光殿…何故、あなたが…このような、命令違反を…？」
ルキアは、自分が連れ戻されたのは夜光が命令に従ったからということを分かっていた。そして、彼女がいかに命令に忠実なのかも知っていた。だからこそ、余計に信じられないのだ。ここで恋次が来れば、「遅かったではないか」と怒鳴り散らしていた…つまり、絶対に来るだろうと予想していただろうが。夜光というのは、全くもって予想しえない人物だった。
抜いていた斬魄刀を鞘におさめて、笑って答える。
「まぁ、色々あった。ずっとルキアを連れ戻してからモヤモヤしてたし」
ここまで来て、夜光は漸く気付いていた。ずっと、隊士に八つ当たりしたりして、イライラした気持ちを抑えていた。原因は何なのだろう、と思っていたが、これだったのだ。
「自分でもよく分かんないけど、いいんじゃん？　これで」
ふと、ルキアが、夜光の頭に見慣れない髪飾りがあることに気付いた。しかも、その花は、自分がかつて所属していた十三番隊の隊花。
「…待雪草…ですか…？」
「うん。桃がくれた。何でも、花言葉的にこれが良いらしくてねぇ」
待雪草の花言葉――――…
ルキアが、ふわりと微笑む。
“希望”…ですね」
「正解。さすが元十三番隊隊士」
そのとき、倒れ伏していた見張りが、小さく呻いたことに気付く。まだ効力の時間的に目は覚めないはずだが、念のために夜光は彼の頭を豪快に足で踏み潰した。
「ルキア、早く行って！」
夜光に言われて、少し、呆けた。まだ、現状が飲み込めていない

のかもしれなかった。
「ああもう！　ルキア！　行けっつーの！」
苛立った口調で言われて、我に返る。
そうだ。夜光殿は、私を逃がしてくれようとしているのだ。
ルキアは気を引き締める。腰帯に斬魄刀を携え、副官章を左袖に通すと、風呂敷に包まれた隊首羽織を抱えて走り出した。
「霊圧も消すの、忘れないでくださいね！」
雛森は早口で言うと、走るルキアに向けて手を突き出した。
「縛道の二十六、“曲光”！」
“曲光”がルキアを覆うと、たちまち彼女の姿を視認することはできなくなった。

ルキアは穿界門に全速力で向かっていた。ずっとじっとしていたからか体が重いが、構ってなどいられない。九番隊においてきた夜光と雛森は大丈夫だろうかと、少し不安になる。しかし、それで足を止めたら、それこそ二人に顔向けできない。
走っていて、ずり落ちてくる副官章を手で上に引き上げる。
途中で一度、転んだ。そのとき、ふいに改めて、一護を助けたい、と思った。
すぐに立ち上がり、走る。風呂敷を持つ手に、力を込める。恋次に何事も無いことを祈る反面、何事かはあってほしいと感じた。良い方面での進歩はあってほしい。
やっと、穿界門が見えてきた。
真夜中で人は少なく、また姿も“曲光”で覆うことで消えている。おかげで、何事もなくここまで辿り着けた。
義兄・朽木白哉の顔が、頭に浮かぶ。しかし、何も変わらなかった。自分の決意はそれほどに強いのか、と自分でも驚く。義兄を敵に回してもいいと思っている自分が、衝撃的だ。
瀞霊廷を振り返る。そして、持っている三番隊の隊首羽織が入っ

た風呂敷を、見下ろした。
（…有難う御座います…雛森副隊長…そして…夜光殿…！）
ルキアは、穿界門に飛び込んだ。

We never call him but he answers us.

～死神図鑑ゴールデン（もどき）～

たつき「そういえばさ、浅野、なんであんとき、二百円貸してくれたの？」
啓吾「そりゃあ、ビニール傘買う為だろ？」
たつき「そうじゃなくて、なんであたしが傘持ってないって」
啓吾「ああ、それは道場の傘立てに一本もなかったからだぜ♪よく見てるだろ」
たつき「あたし、折り畳み傘持ってたんだけど」
啓吾「……。」

ようやくルキアさん、牢屋脱出です。
長いこと彼女を退場させていて申し訳ありませんでした。
それで予告どおりかなり早めに更新です。

ところで、一護にとうとう処刑命令が下ってしまいました。みんな一護に対して大きな借りがあることはよく分かっているので余計に動揺しています。ただ剣八はどうしたもんかな…（笑）

次回は久々の虚圏のターンです。
でもまた忙しくて下書き全然できてないので、次回は例によっていつになるか全く分かりません。一ヶ月後になってしまうとかあると思います。
できるだけ頑張りたいと思いますので、もし読んでくださる方は是非気長にお待ちください。

長編で分かりにくい話なのに、亀更新で本当にすみません。

それでは、これにて。

感想等がありましたら是非お願いします！

We never call him but he answers us.

――――ベシャッ。
彼は転がり込んでくるようにして、その場に現れた。
ゆっくりと顔を上げる。
ぬかるむ地面。静かな林。全てが、暗い色。
どんよりとした、重く黒い雲が天を支配し、そこから落ちる無数の雨粒。

ザァァァァッ…。

傘をさしていない彼は、見る間にずぶ濡れになっていく。
マントを纏い、フードも被っているのに、その意味はほとんどなく、容赦を知らず雨は横から吹きつけて来て、中まで浸み込む。
オレンジ色の髪から、滴となって落ちる。
これから夏になるというこの時期でも、雨は冷たい。
彼は怯えた瞳で、もう一度周囲を見回した。
一人の影を、その視界に捉えた。

＊　＊　＊

全てが、セピア色だった。
色々なものが、中途半端なところで濃色により塗りつぶされていて、正直、全体を鮮明に映すことはない。
『…――――…――――――……？』
声が、聞こえる。ノイズがかかっていて、聞き取れないけれど。
自分は口を開きかけて、止まった。何を言えばいいのか、分からない。しかし、ふいに自分の声が、頭に響く。
『…あ……当たり前だ！！　あるのか方法が！！』

何が、“当たり前”なのか。
一人の女が、ふらついた様子で柱に背を預ける。よく分からないが、多分、彼女から滴っている黒いものは、血だ。
『一つだけ……ある！』
まだノイズは消えていないが、何とか聞こえた。
そのとき、女は何かを、自分に向けてきた。
視界が霞んで、よく見えない。
『貴様が……――になるのだ！』
「っ！！！？」
かっと目を開き、勢いよく体を起こした。
「はっ…！　はっ…！　はっ…！」
大きく動悸がし、体が震える。彼の額には脂汗がじっとりと浮かんでいた。
「ど…どーした！？　ナリア！」
ガレットが慌てて近づいてくる。
一護は暫し瞳を彷徨わせると、漸く彼を見た。
「……ガレット…」
「だ、大丈夫か？」
「俺…なんで…？」
「いや、お前、疲れたから寝るっつって、寝たんだろ？　だからユウも世話係に任せてるんで、この部屋にいねーんだし。…にしても、すげぇ顔だな。寝て余計に疲れましたって感じだぜ？」
起きたばかりだからか思考が回らず、一護は少し頭を振った。
先ほどまでのは、夢。今が、現実。
「…一体、何の夢みてたんだ？」
尋ねられ、答えようとしたが、答えられない。
“何の”と言われても、あれはほとんどモザイクがかかっているようなものだった。自分でも、何だったのかよく分からない。とにかく、分かるだけ言ってみよう、と思えば。
「……女と…喋ってた」

「うん、簡潔すぎて全くわかんねぇわ」
ガレットが苦笑する。
「悪りぃ。でも、これしか俺にも分かんなくて」
「女と喧嘩する夢、とか？」
「いや、喧嘩っていうより…、何だ？」
「ナリアさん、俺が訊いてんの。お前が訊いちゃダメ」
そうだよな、と一護も苦笑する。
「本当に大丈夫かよ…」
ガレットが頭を掻いた。
一護の難点といえば、他人に頼らないことが代表として挙げられる。仲間なのだから、もっと共に考え、悩めばいいと思うのだが。
そのとき、部屋の扉を乱暴に叩かれて、二人は揃って肩をびくつかせた。
「開けるわよ！？　いいわね！？」
最早、怒鳴り声だ。
露骨に嫌そうな顔をするガレットを見、こちらもまた呆れ顔をしつつ、一護は「おー」と答えた。
その「おー」にほぼ被さるようにして、扉が大きく開かれる。そこに立っていたのは、熟睡したユウを抱えた、ツインテールの女性破面、Ｎｏ．３５のロリ・アイヴァーンだった。
「起きたなら、この餓鬼、さっさと引き取りに来なさいよ！」
物凄い剣幕で言われ、一護は少々ムッとしたが、先に口を開いたのはガレットだ。
「ナリアは今起きたんだっつーの！　ギャイギャイ怒鳴んなよ、うるせーな！」
ロリがガレットを睨む。
「じゃああんたが、ユウの遊び相手すりゃいいじゃないの！」
「仕方ねーだろ！　忙しかったんだからよォ！」
「忙しかったぁ？　じゃ、何してたわけ？　言ってみなさいよ、ホラ！」

そこで、ガレットが、う、と詰まる。
実は、破面Ｎｏ．１０７のガンテンバイン・モスケーダと、集会場を使って大富豪をしてました、とは言えなかった。というか、大富豪に途中参加してきたバートンから、「遊んでたことは、秘密だ」と言われてしまったから、それを明かすなどできるはずがない。しかも大富豪でボロ勝ちして、ユウのことなど忘れて意気揚々と一護の部屋に遊びに来ただけで、魘されて目を覚ましたのを見たのは本当に偶然であった、とも言えない。
これはこれで、言ったら一護に殴られる可能性は高い。
「…だ、大体、テメーはバートンに拾われてなかったら、どうなってたか分かんないんだぜ！？　恩返しに、遊び相手でも何でも仕事をするのが筋ってもんだがなぁ！」
「五月蝿い！！」
言って、彼女は抱えていたユウをガレットに投げつけた。
内心慌てたが、見た目ほど強く鋭く投じられてきたわけでもなく、彼は無事少年を抱きとめる。
随分気分を害している様子のロリを見て、それでも疲れてユウが寝てしまうまで、相手をしてくれていたのだな、と思った。一護は彼女を見上げる。
「ありがとな」
「お礼言うなら、もう二度とあたしに、あんたが寝てる間のユウの世話を任せないで！！！」
叫ぶように言ってから、ロリはさっさと部屋を出て行った。その背に向かって舌を出しているガレットが、何とも幼稚だ。
ロリ・アイヴァーン。四年前、藍染の下で働いていた破面の一人だ。実を言うと、もう一人、ずっと共に動いていた破面に、Ｎｏ．０３４のメノリ・マリアという者がいた。だが、メノリはＮｏ．０のヤミーに殴り飛ばされ、そのまま絶命した。元々、メノリはロリと比べると全ての能力において劣っていたが、それでもそこにいたロリ自身、生き残ったのはほぼ奇跡だった。また、その奇跡の裏に、

悔しいことに滅却師の力と人間の力があったことも否定することはできない。
そして、全ての戦いが終わり、虚夜宮（ラス・ノーチェス）は崩壊して、一人きりで虚圏を彷徨っていたところをバートンに発見され、保護されたというわけだ。
（…にしても…）
一護は首をひねる。
（あいつ…俺のとこに来ると、いっつも嫌そうな顔するけど……俺、何かしたっけか？）
初めてロリと会ったときもそうだった。
彼女は目を見開き、後退り。
『どうして…あんたが…！？』
その先は続かず、即座に逃げていってしまった。
一度、ロリとは落ち着いて話し、何が“どうして”なのかを聞き出したいと思いつつも、上手くいかない。何より、自分と仲の良いガレットは、彼女と犬猿の仲だ。一護がロリと話せば、ガレットも快く思ってはくれないだろう。
そういえば、保護されたといえば、ガンテンバインもその一人だ。彼は四年前、虚圏に乗り込んできた人間――チャドのことである――によって倒され、その後侵入者討伐と戦闘での敗者の止めを刺す役割を担っていた葬討部隊（エクセキアス）に息の根を止められる間際、皮肉にも死神の、四番隊隊長・卯ノ花烈と、同隊副隊長・虎徹勇音によって命を救われた。
とくに成す事も無く、傷が完治したガンテンバインは虚圏を放浪していた。そこで会ったのがバートンだったのだ。
「よく寝てんなー、コイツ」
ガレットが思わず頬を緩める。
投げられたユウは、変わらず寝息を立てていた。
「ユウはロリのこと好きだしな。いっそ任せてもいいんじゃねぇか」
一護の言葉に、彼は「とんでもない」と叫ぶ。

「ユウが可哀想すぎる！」
「そーでもねぇだろ。たしかにあいつは性格はキツイけど、ユウはある意味、ドM…だ…し…」
『＊＊はドMだもんで、ちょっと泣くぐらい追っかけてもらわねえと楽スくねぇんス！』

「…あ…？」
一護が目を見開く。
…誰だ？　今の声は？
「ナリア？」
「え？」
「どうした？　またボーッとして…疲れたか？」
彼は困り顔で頭をガリガリと掻いた。
確かにここのところ、自分の頭の仲に混乱が生じるのはよくあることだ。やはり、疲れだろうか。
「ん～…よく、分かんねぇ」
「あんま、心配させんなよ」
ガレットが溜息を吐く。
一護はベッドを下りると、ガレットからユウを受け取って、そこに寝かせてやった。そのまま傍にいてやるのかと思いきや、彼はスタスタと扉の方へ向かう。
「お、おい、ナリア？」
「散歩行って来る」
「はぁ！？　またかよ！？」
「気分転換だよ。ここんとこ毎日行ってるし、別に良いだろ？」
悪びれた様子もなく、一護が肩を竦めて見せる。
ここのところ、先ほど言ったとおり、彼は放心状態に陥ることが異常に増えた。その都度、気分転換にと一護は散歩に行くようになった。外にあるのは、せいぜい砂漠と、その中に潜む小虚と、灰色

の空と月だけだろうに。
　ガレットは渋い顔をする。
「ったく…じゃあ、今度は俺がユウの相手か…ずっと寝ててくれると有難いんだが…」
「ぅ～…おはよぉー…」
「早っ！！！」
　のろのろと体を起こしたユウを見て、彼は悲鳴に近い突っ込みを入れる。
　ガレットは少年を可愛く思っているが、ぐずり始めるとなかなか機嫌が直らないので、一護がいないときの世話を任せられると焦ってしまうのが常だった。その点、ロリは一体どういう遊び相手の仕方をしているのか気になるが、勿論尋ねてみる気は毛頭ない。
「ユウ…悪りぃけど、俺一人で行っちゃダメか？」
「ダメー」
「だから早ぇって！！！」
　彼は一瞬呆れ顔になったが、ベッドの方へ戻ってくると、未だに眠そうであるユウの頭を撫でてやった。
「ごめんな？　でも、これでお前が我慢してくれたら、戻ってきた時いっぱい遊んでやるから」
「…本当？」
　口角を吊り上げてみせる。
「おう！　だから、何で遊ぶか考えとけよな」
　屈めていた腰を伸ばして、一護が扉の方を向く。
　すると、ガレットが横からマントを差し出してきた。
「…これ、現世に行くわけじゃねぇんだから、いらなくねぇか？」
「砂埃が酷でぇから、それを避けるためだよ。着てけ」
　ぷっ、と一護が吹き出す。
「おまっ…！　ずっと虚圏にいて、どんだけ苦手なんだよ、砂埃！！！　本当に破面かよ！」
　ガレットは、現世で言う潔癖症に近い。

破面で、ずっと虚圏で過ごしているというのに、砂漠といったものを異常に嫌う。最初に一護が砂塗れで散歩から戻ってきて、そのまま部屋に入ったときは激しく怒られたものだ。よく、虚圏でやっていけてるな、と彼はいつも思っている。
ガレットの顔が赤く染まり、噛み付くような勢いで、
「う、うるせぇな！　砂埃を避けて何が悪りぃんだよ！」
「別に誰も悪いとは…」

――――これは…虚圏は砂埃がひどいから持っていけと渡されたのだ…

「…え…？」
フラッシュバックのように、頭の中で画が回る。
マントを着た者が、二人見える。ただ、また少しモザイクがかかっていて、よく見えない。何か、怒鳴っている。それは、小さい方……恐らく、夢の中で自分に何かを向けていた、あの血まみれの女だ。

――――たわけっ！！！　何故勝手に虚圏へ入った！
――――何故私が戻るのを待てなかった！？

そっと、自分の顎に手をやった。次いで、頬にも。何故か、ヒリヒリする…。
「ナリアっ！！！」
ビクッと肩が跳ね、幾度か瞬いた。
「お前…本当に大丈夫か？　今日、いつもより酷でぇぞ」
一護がしかめっ面をすると、目を閉じて眉間を軽く揉んだ。
「ああ…平気だ」
ガレットからマントを受け取ると、それを纏った。
「行ってくる」

「無茶すんなよ」
「歩くだけだぜ？」
白い歯を見せると、彼は外へと出て行った。
ベッドの上にちょこんと座っていたユウは、いつの間にか再び体を倒して、そのまま眠り込んでいた。

やはり、歩いてもあるのは虚圏の殺風景なものばかりだった。
一護はひたすら歩く。いつもそうだ。気分が優れなければ、景色がどんなものであろうととにかく歩いて、どうでもいいや、と気持ちを切り替える。いつも以上に妙な気分なら、それだけ長く歩いてみればいい。
「砂埃、凄げぇ…」
呟く。破面としては、この程度大したことはないのだけれど、たしかにマントは効果があった。フードを被っていなければ、オレンジの髪が砂の色に変わっているところだ。
ガレットに感謝だな、と一人密かに笑った。
と、そこで、遠くに影が見えた。
「ん…？　人型…？」
ということは、破面か人間か、死神か？
あまりに遠距離で見えにくく、一護はそちらへ駆けてみる。すると、それは四人ほどいて、全員が破面であることが認識できた。当てもなく彷徨っている風である破面ということは、ロリやガンテンバインと同じ境遇のものであろう。バートンのところに案内するべきだ。
「おーい！」
声を張り上げてみれば、彼女等は振り向いた。
こんなに揃いも揃って女性とは珍しいな、とどうでもいいことを思う。一護が知っている女性破面は、ロリと、ユウのもう一人の世話係ティファニー・リック・コムと、以前からバートンが「もし発

見したら教えてくれ」と言っているネリエル・トゥ・オーデルシュヴァンクだけだ。
「あんたら、ひょっとして昔、藍染の下についてた奴等か？」
「あぁん？　何だよ、お前！」
「やめな、アパッチ。いきなり喧嘩売んじゃないよ」
破面Ｎｏ．５４のエミルー・アパッチが、
「売ってねぇだろ、ミラ・ローズ！　何だよお前っつっただけだろ！」
自分を止めた破面Ｎｏ．５５のフランチェスカ・ミラ・ローズを睨みつけた。それを真っ向から受け止め、叫び返す。
「だからそれが売ってんでしょうが！」
怒鳴りあいを始めた二人に、おしとやかそうな女性破面が、醒めた視線を送る。
「おやめなさいな、二人とも。あなた達がいると寧ろ場が乱れるのが、まだお分かりでないの？　そろそろ自覚してくださらない？」
「「うるせぇよ、てか場を乱すのはお前もだろスンスン！！！」」
破面Ｎｏ．５６のシィアン・スンスンはすまし顔で、二人の抗議を流した。
（…仲悪りぃな、こいつら…）
どうにも居心地の悪い一護は、微妙な表情でアパッチら三人を眺める。
やがて、後ろでずっと黙って立っていた、頭角らしい女性破面が前に歩み出てきた。
「あんたは…」
「元十刃の破面Ｎｏ．３、ティア・ハリベルだ」
三人とは違い、随分落ち着いた様子だ。
「そっか。俺は」
「知っている」
ハリベルが、一護の言葉を遮る。
彼は面食らったように口を閉じた。知っている？

「だからこそ訊きたい。私はお前を、藍染の出した映像でしか見ていないが、何故だ？」
自分を見た？　藍染の出した映像で？
「…あんた、何言ってんだ？」
「何故お前が、虚圏に、その姿でいるのかと訊いている」

『貴様、その格好は…どういうつもりだ』

――――ドクン…。
また、だった。
尸魂界へ偵察に行ったときと同じで、また心臓が妙な脈の打ち方をする。「その格好」「その姿」…どうして、皆揃って、自分のそこを指摘する？
「どういう…意味、だよ…？」
足元がふらつくので、必死に力を込める。そうしないと、倒れそうだった。
「……虚圏に、お前がいていい理由が、私には分からない。私に戦意はないが、ここはお前のいた世界とはまるで違う上、争いばかりだ」

――――俺のいた世界？

訳の分からない言葉ばかり増えていく。
…否。訳の分からない言葉に、どうして自分は動揺している？
「たしか、お前の名前は…」
ヒュッ、と。息を、吸った。
「黒崎一護だろう？」
その言葉を聞いた瞬間、一護はその場から転がるようにして走り去った。
「何だったんだ？　あいつ…」

アパッチが首をかしげ、ミラ・ローズも肩を竦めた。
「さぁ。でも、あいつ、一応破面だったけど」
スンスンが逃げるように走る彼の背を遠目に眺める。
「何か、変な方でしたわね」
ハリベルは無言で、瞳を細めた。

「っ…！！　何っ、だよ…！？　何で…！？」
何度も足がもつれつつ、走った。
信じられなかった。ずっと、死神の戯れ言だと。聞いて流せばいいと思っていたのに。あの女性破面は、動揺も何もせず、さらりとその言葉を吐いた。

――――クロサキ　イチゴ

（何で…破面の口からも、それが出るんだよ…！？）
必死になって、走り、走り、走る。
訳が、分からない。自分とその言葉に、一体、どういう関係があるというのだ。どうして皆がそう、自分を呼ぶのだ。自分は、ナリア＝ユペ＝モントーラという名前を持っているというのに、どうしてだ。
『気にする必要はない』
偵察結果を伝える時、バートンに話してみた。だが、彼はそうとしか言わなかった。自分も気にするだけ無駄だと思った。
だけど、ダメだ。破面の口から出た以上、きっと、もう自分は、あの言葉を無視することはできない。現に、自分はバートンのところへ案内しようと思っていた彼女等を放置して、こうして逃げている。
一番動揺するのは、違う名前で呼ばれているにも関わらず、自分自身を否定された気持ちには全くならないことだった。それはまる

で、自分が「クロサキイチゴ」の名を、受け入れているような気がした。
そんな自分が、激しく嫌だった。
誰でもいい。誰でもいいから、「クロサキイチゴ」が何なのか、教えてくれ。
無我夢中で走る。走っても、気分転換にはならない。寧ろ、恐さが増している。何も分からない自分への、不安と、恐怖。
「一護(いつご)！？」
そのとき、どこからか声が飛んできて、一護は慌てて足を止めた。
視線を巡らす合間もなく、「超加速！」という声が聞こえたかと思うと、緑色の髪をしたユウくらいの少女が、自分の腹目掛けて飛んできた。
「グフォ！！？？？」
勢いづいていたので、空気が口から一気に漏れ、危うく意識が遠のきかける。咳き込みながら、ヨロリと起き上がると、自分に抱きついている少女を見下ろした。
「な、なんだ、おまっ…」
「久スぶりだぁ！！！　一護だぁ！！！」
改めて呼ばれた名前に、顔が凍りつく。
――――久しぶり？　一護？
自分の腕を、ぎゅっと掴まれている。
邪念はない。だが、彼は硬直して、動けなかった。
「一護、久しぶりでヤンス！」
ドンドチャッカが、嬉しそうに近づいてくる。
「久しぶりだな、一護よ！」
その傍らのペッシェが、手を挙げる。
困惑した表情を浮かべる。本当に彼等は嬉しそうで…しかし彼等は躊躇うことなく、口々に言ったのだ。自分のことを、「一護」と。
そしてもっと困ったことに、自分は、彼等のことを、知らない。
「…あれ？」

ネルが涙ぐみながらも少し体を離し、一護を見上げた。
「……一護…どうスて…ネルたつと一緒っスか…？」
「え……？」
ドンドチャッカとペッシェも、何やら近づいてきて、自分をしっかりと見て、様子が変わった。嬉しそうな表情が、消えていた。
「どうスて……破面になってるっスか…？」
ドクンッ！！！
「破面に……『なった』…？　俺が…？」
自然と、唇が震える。
尸魂界でもたしか、小さい隊長格の死神に、同じことを言われた。
『何故テメェが、破面になってやがる！？』

瞳が揺れる。頭が痛い。
「黒崎…」
ハッとすると、グリムジョーがこちらに歩み寄ってきていた。
「あんたは…」
「ふざけてんのか、てめぇ」
別に、ふざけてなどいない。しかし、グリムジョーは、自分に対しての怒りを露わにしていた。ゆえに、たじろぐしかない。
「餓鬼の言うとおりだ。何だってテメェがそんな格好してやがる？」
狼狽しつつも、答える。
「そりゃ…俺は、破面……だからだろ…？」
「ああ！？　もう一度言ってみろ！！！」
どうして、怒るんだ？
「だから！　俺は破面だから、こんな格好してんだろ！？」
自棄になって、怒鳴り返す。
すると、グリムジョーは自分を嘲るような顔になった。
「てめぇが、破面だと？　どこまで戯れ言言やぁ気が済むんだよ？なぁ？」

戯れ言？　自分が破面であるという、ことが？
「何を」
「一護は破面なんかじゃないっス！！！」
ネルの声に、目を見開く。
俺は破面じゃない…？　どういうことだ？
「一護は、人間っス！！！！　だのに、何を言ってるっスか！！！！」
俺が、人間……？
改めて見下ろしてみると、少女の目には新たな涙が立ち込めていた。それは、先ほどのような喜びの涙ではない。…淋しそうな、ものだった。
「な、何言ってんだよ…だって、俺は見ての通り……」
「一護はネルたつを護ってくれたっス！！！」
俺が……お前等を護った…？
「人間なのに、死神んなって、滅茶苦茶な力使って…！　でも一護は、ネルたつを必死に護ってくれたっス！　そんな一護が……」
涙が、零れた。

「どうスて破面なんて、そんなくだらないもんになってるスか！！！！！！！！」

「っ！！！！！！！！？？？」
一護はネルをどかし、再び駆け出した。
「一護っ！！？？」
慌てて叫ぶ少女に、グリムジョーが面倒臭そうに声をかける。
「やめろ」
ビクッとし、ネルは恐る恐る振り向く。
グリムジョーは、心底不機嫌そうな様子で、ポケットに手を突っ込んだまま一度舌打ちすると、逃げていく一護を見て、呟く。
「俺ぁ、今の黒崎には興味ねぇ」

限界だった。どこかに、逃げたかった。
あの少女に、偽りはない。だからこそ、その言葉の真実の度合いを感じて、体が震えた。
自分が破面ではない？　そんな馬鹿な。だって、自分は……！
走りながら、一護は一人、息を呑む。

――――俺は、一体いつ、虚になったんだ？

正規のルートで破面になったとしたら、当然虚のときの記憶はあるはずだ。なのに今、気付いた。

自分には、破面以前の記憶が、一切、ない。

ダメだ。もう、逃げたい。否、逃げなければならない、きっと、どこかに。
一護は勢いのまま、手に力を込めると、適当な空間に触れた。
“解空（デスコレール）”によって裂け目を生み出すと、夢中になってその中に飛び込んだ。

＊　＊　＊

――――ベシャッ。
彼は転がり込んでくるようにして、その場に現れた。
ゆっくりと顔を上げる。
ぬかるむ地面。静かは林。全てが、暗い色。
どんよりとした、重く黒い雲が天を支配し、そこから落ちる無数の雨粒。

ザァァァァッ…。

傘をさしていない彼は、見る間にずぶ濡れになっていく。
マントを纏い、フードも被っているのに、その意味はほとんどなく、容赦を知らず雨は横から吹きつけて来て、中まで浸み込む。
オレンジ色の髪から、滴となって落ちる。
これから夏になるというこの時期でも、雨は冷たい。
彼は怯えた瞳で、もう一度周囲を見回した。
一人の影を、その視界に捉えた。その影が、自分を凝視して、呟くように言う。

「……一、護……？」

もしかしなくても、分かった。その声の主は、あの夢の、血まみれの女であると。

We never call him but he answers us.

～死神図鑑ゴールデン（もどき）～
ロリ「ガレット！聞いたわよ、あんた、大富豪やってたらしいじゃない！」
ガレット「は！？な、なんで知って…あ、いや、その」
ロリ「冗談じゃないわよ！ユウのことあたしに任せて、信じられない！」
ガレット「うるせぇな！だから、テメェの仕事だろうよ、それが！」
ロリ「何でガンテンバインとバートンでガッツリやってんのよ！」
ガレット「バートンは途中参加だボケ！！！！」
ロリ「やるならあたしを誘わなくてどーすんの！？ほんとムカツク！」
ガレット「……誘ってほしかったのか…」

「死神図鑑ゴールデン（もどき）」をまたやってほしい、という要望が案外複数来ていたので今回もつけてみました。

というわけで、どうにかこうにか、個人的には結構早めに更新。いえ、勉強やろうと思ってたんですけど。「We never call him but he answers us.」の章がもう終わるとこまで来てたので、なんか気分が曖昧で。勉強するときもなんとなく考えてしまっていたので、ケジメつけようと思って更新しました。一応ここで区切りなんです。次からまた章が変わります。

さて、久々虚圏組でしたがいかがでしたでしょうか。

ロリとガンテンバインは原作の方でも死んでいなかったので保護された、という形にしてみました。「ハリベル達って生きてるの？」と疑問を持たれた方。ウルキオラが表紙の「ＵＮＭＡＳＫＥＤ」を買っていただければ分かると思います。
あと今更ながら、一番最初の「Ｎｏ　ｍａｔｔｅｒ　ｈｏｗ　ｈａｒｄ　Ｉ　ｔｒｙ，Ｉ　ｃａｎ'ｔ　ｂｅ　ｓａｖｅｄ．０」が関連づいてきました。ネルたちを出すのが随分遅くなりました…。
そして、漸く一護が現世に一人やってきました。
さらにそこに出くわしたのは、こないだ牢屋を脱出したばっかりのあの子です。

先ほども言いましたように、次回から章が変わります。
でも忙しいのは変わらないので、次の更新もいつになるか分かりません。すみません；是非、気長にお待ちいただければと思います。

感想等、良ければお願い致します！

Strawberry demanded that Death should

実を言うと、自ら口に出してみて、そこに私のよく知る者がいることを確認できても、信じられなかった。“驚いた”などという感情は、優に超えていた。

夜光殿と雛森副隊長の手助けにより、私は脱獄して穿界門に走り、現世へと出た。そのときに焦ったのが、その様だ。時刻は真夜中というときに、空座町上空の穿界門を開けば、いくら太陽が昇っていないとはいえ異常に暗い上、かなりの大雨であった。雛森副隊長のかけてくださった“曲光”も効果が切れ、闇夜の中、私の姿が露わになる。傍から見れば、一人でポツンと、頭から雨をまともに浴びている状態は、恐ろしくみすぼらしいだろう。

しかし、そこで私は息を呑んだ。

感じたのだ。あやつの霊圧を。

恐るべきタイミングであったし、牢で霊圧を封じられていたために、僅かに弱体化した私を狙ってきたのか、と思った。無論警戒心は持っていたが、それで放っておけるはずもない。私は霊圧を探り、その原点へと急いだ。

そして、着いたところは墓地であった。いや、墓地というより、そこを少し抜けたところの、広くなっている場所だ。手入れも行き届いていない、周囲が林で囲まれた…そうだ、忘れるはずはない。ここは、あやつとその母親の仇が、戦ったところだ。そういえば、あのときも、雨が降っていた。

その中央に、マントを纏い、フードを被った男が、四つん這いになって何とも情けない様子で、いた。そやつは、暫く虚ろな瞳を巡らせたかと思うと、私に向けて、固まった。暗く、雨も降っていて、視界はとても悪いのだが、よく見なくとも誰だか分かる。

「……一、護……？」

一護の瞳が、ゆっくりと見開かれる…。

どうしてだ…？
一護は誰にでもなく、心中で問いかける。
どうして、この、女が、こんな、ところに…？
また夢か、と思ったが、今回はモザイクがない。雨も冷たい。これは、現実だ。
彼には、夢の中で飽きるほど会った女が、見えにくかったにも関わらず、今ここにいる彼女であると確信していた。そして知ったのだ。女は死神で、しかも一度、前に現世に来たときに、親しげに“イチゴ”と呼んできた者であったと。
虚圏でも恐ろしく感じた、不安の濁流が再び流れを起こす。
ほとんど衝動的に、一護は勢いよく立ち上がり、彼女に背を向け、足に力を込める。
「まて！！」
そう叫ばれ、無意識のうちに走り出すのを躊躇した。
その間に、彼はルキアに右腕を掴まれた。
眩暈がした気がした。たまらなくなり、固く目を瞑って、必死の思いで声をあげる。
「放してくれ…っ！！！」

――――……放せ。死神。

ルキアが、眉を顰める。
前に会ったときと、様子が違う…？
「何なんだよ…っ！　どうなってんだよっ……！！　俺は、破面だっ！　ナリア・ユペ・モントーラだ！！！　それなのに…！」
ギリッと歯を食いしばる。
何かが、自分の中で渦巻いているような、奇妙な感覚。

幾度も幾度も腕を振るが、ルキアの手は離れない。しっかりと、しかし痛くは無い程度に掴んでいた。
雨が気持ちを掻き乱す。苦しい、辛い、恐い……嫌だ…！
「俺は…！　俺は一体何なんだよっ！！！？」
まるで今にも泣き出しそうなほどに、顔を歪め、叫ぶ。
確固たる自分など、最早どこにもいなかった。自分も周りも、不明確なものばかり。居場所が見つからない。正直、自分がどこにいるべきなのか、分からない。だが、自分の中で、居場所があることを知っている。ただそれが、どこなのか、分からない。気持ち悪い。いつから自分は、こうなった？
苦しむ彼を見て、ルキアが一瞬、手の力を緩める。
「……一護…」
「やめろぉっ！！！」
一護が彼女の手を振り払い、向き直った。苦痛の滲んだ顔で、目の前の死神を見る。
彼の顔は、涙を流したせいか、それとも濡れたことによっての錯覚か、疲れているようにも思えた。
「……やめてくれっ…頼む……」
後ずさりながら、瞳を彷徨わせながら、祈るように、痛みに堪えるように、言う。
しかし、その言葉の意味がいまひとつ、理解できない。
「…？　どういう…ことだ？　一」
「やめろっつってんだろッ！！！！！？？？」
喉が裂けるような声で、ルキアの言葉を遮断した。
呆気にとられたが、嫌でも気づくことができた。彼は今、「一護」の名前を呼ばれることを、全面的に拒絶したのだ。
「…お願いだ…っ…！　頼むから、頼むから…やめてくれ……それで、呼ばないでくれ……俺は……俺は、違う……俺はっ……違うっ！！！」

「たわけ！！！！！」

呼吸が止まる。

“たわけ”

直感的に思った。この叱咤を入れられるのは、今が初めてではない。この感覚は、多分、『久しぶり』だ。

ルキアは、興奮した様子で怒鳴り散らす。

「ならば私は、貴様を何と呼べば良いのだ！？」

彼女が霊圧を閉じていると気付くのに、時間を要した。

霊圧が飛ばされているように、ルキアのその表情と声で、ここ一帯の空気が震えているような気がしたのだ。

「それは」

“ナリア・ユペ・モントーラ”と呼べばいい。

そう思ったのに、言葉が続かない。

「ナリアと呼べばいいのか！？　笑わせるな！　誰がそんなふざけた名前で貴様を呼ぶか！！！」

俺の知らない「イチゴ」がまともで、「ナリア」はふざけた名前…？　何を馬鹿な。

そう、笑い飛ばしたい。なのにできない自分が、煩わしくてたまらない。

怒鳴り疲れ、肩で息をするルキア。数秒の後、呼吸が整うと、雨音にかき消されることはなく、しかし小さい声で、紡いだ。

「…一護…」

スッと顔を上げたルキアは、心なしか泣きそうに瞳を揺らしていた。

随分と久しぶりに、彼としっかり、目を合わせる。

「私達は……仲間だろう…！」

――――私達は、仲間だろう！？

「っ…」
ズキッ…。
一護は頭を押さえて、目を瞑る。
痛む…頭が、でなく、その中が……。
――――私達は…仲間だろう、一護…！
――――こんな下ら――こと、二―と私に―認させ―な！
「ぐ…ぅ…っ！」
――――貴―が苦しむなら、その―しみを―け取っ―やる！
――――私達は、仲間だろう！？
一護はしゃがみこみ、歯を食いしばった。
何だ、これは。おかしい。見覚えがないのに、懐かしい。
「一護…？　どうした！？」
慌てて駆け寄り、覗き込む。
彼は目を閉じていたが、やがて開き、ルキアを見た。
「……名前…」
ゆっくりと、喋る。
激しい頭痛がする中、できるだけ、簡潔に。
「…あんたの、名前……」
聞いて、ルキアは一瞬表情を曇らせたが、すぐに答えた。
「朽木ルキアだ」
「朽木……ルキア……」
復唱してみる。
知らない、名前だった。

――――“死神”ではな―。“朽―ル――”だ。
「うっ…ぐぁ…！」
「一護！？　おいっ！？」
前のめりに倒れこみ、頭を抱えたまま、暫し悶える。
「一護！　しっかりしろ！」
――――貴様が……――――になるのだ！
頭が、胸が、体中が熱くなり、激痛が走る。
――――“死神”…？
意識を失う間際、彼はそんなことをぼんやりと思った。

少女は溜息を吐くと、うーんと長い伸びをした。
「ねーねー、桐生さんいないんでしょ？　あたしたち、もう休もうよ。疲れちゃった」
「蘭に伝えたらだ」
頬を膨らます彼女に、隣りを歩くもう一人の少女は冷ややかに答える。
「だって、その蘭くん、いないじゃん、さっきから捜してるけど。いいじゃん、もう」
「王土を捜せば絶対にいる」
「いや、まぁ、そーだけどさ……」
それを言ってはおしまいだ。
少女はうんざりしたように肩を落とす。
蘭に、調査結果を伝えに行くこと自体はいつもやっていることだからいいのだが、そしてそれが王土で当たり前であることも重々承知しているのだが、それでも納得をしたことは一度だってない。
桐生においては尸魂界と現世と王土、地獄、あと微妙だが虚圏の

五つの世界の橋渡しの役を担っているので、彼女に連絡をすることは理にかなっているようには思える。それに、この橋渡しの役は、はっきり言ってしまえば、一般で言う“雑用係”で、同情してしまっている、というのも否めない。

それに比べ、蘭はただ、王家の生まれであるというだけだ。ゆえに実は、次期“霊王”になるべき存在でもあった。それをこともあろうか、「え、僕、絶対無理です」の一言でばっさりと拒否したのだ。本来ならそれで済む話ではないのだが、幸い渋々ながらも“霊王”となることを了承した者がいたから良かった。それが、蘭の遠い親戚に当たる死神であり、現在の“霊王”である。

ちなみに、（恐らく面倒臭いという理由で）“霊王”になることに拒否の意を示した蘭は、憎たらしいことに戦闘能力や学力は申し分なく、王属特務でも三席・四席あたりのレベルだ。普段からは、全く想像もつかないけれど。ただし零番隊では、護廷十三隊のような席官で分けていないので、あくまで予測だ。　隊長・黒崎一心との力量を比べれば、どう頭を捻っても雲泥の差だろう。

「あ」

「え？　どうしたの？」

突然立ち止まったので、ふてくされていた少女が驚いたように彼女の視線を目で追う。するとそこに、眠そうな顔で石段に腰かけている、蘭の姿が見えた。

「蘭くーんッ！！！」

叫ぶと、彼はこちらに気付き、ちょっと手を挙げると立ち上がった。

二人は駆け寄り、顔を引き攣らせる。

「……どうしたんだ？」

ぽかんとしている少女の隣りで、もう一人の方が尋ねる。蘭はボロボロだったのだ。

「浮竹さん、ハンパ無かったです。泣きそう…」

「浮竹って…えーっと、たしか、こないだ護廷から上がってきた人

だよね？　優しそうだな、とは思ってたんだけど」
「陛下にお会いしたんですよ…」
「……怒らないほうが、おかしい」
「ははは……」
ゴシゴシと目をこする仕草をすると、蘭が改めて二人を見る。
「それで、何か用でも？」
「ああ。近況報告」
懐から書類を取り出し、差し出す。それを受け取ると、彼は微笑んだ。
「たしかに、受け取りました」
「あ～～～っ、疲れたっ！　これで部屋に戻れる！　もう、あんま寝られないよー」
くるりと踵を返し、少女は小さく言った。
「……蘭くんさ…」
「はい？」
書類をペラペラと捲りながら、答える。
「陛下のすることなら受け入れるしかないと思う？」
「……」
その問いに蘭は答えず、先に歩き始めた少女が、彼女の横を通り抜ける瞬間に一言、
「それは、違う」
そう告げて、瞬歩で消えた。
後を追うように、少女も瞬歩で消える。
一人になった蘭は、書類を眺めつつ、
「やむをえないんじゃないんですか」
と呟いた。聞いている者は誰もいない。

ちゃぶ台を囲うように、恋次と、テッサイ、ジン太、雨、りりん、蔵人、之芭、コンが座っており、壁に背を預け、無言で立つ夜一が

いる。
ガラリ、と襖が開く音がすると同時に、彼等はそちらに目を向ける。
後ろ手で閉めつつ、ルキアの口から息が漏れた。
「どうだ？」
「とりあえずは落ち着いた」
恋次の隣りへと行き、腰を下ろす。
「一人にして、大丈夫なのか？」
夜一の問いかけに、
「今は眠っています。妙に消耗しているようで、少なくとも明け方までは目を覚まさないかと…」
「しっかし、驚いたな。お前が脱獄して戻ってきたこともだけど、まさか、一護が現世（こっち）にこんな形で来るなんてよ」
恋次の言葉に頷いた。
「私も、現世に戻ってきて最初に会うのが一護だとは思わなかった」
頭を押さえて倒れた一護は、雨の中で突然、意識を失った。
ルキアは狼狽し、どうしたらいいのか分からなくなったが、彼の霊圧を感じて恋次が来てくれたので、何とか冷静になることができた。
二人は一護をこのままにしておくわけにもいかず、休ませるには妥当な浦原商店へと運んだ。時刻が真夜中なので、開けてくれるかどうか不安だったものの、すぐに夜一とテッサイの二人が出てきてくれ、現在に至る。
「で、お前はどうやってこっち来たんだ？　釈放とかじゃねぇだろ？」
「雛森副隊長と、夜光殿のおかげだ。あのお二方が、私を牢から出してくださったのだ」
飲んでいた緑茶が器官に入り、咳き込む。
そして、ルキアを凝視した。
「や、夜光が！？　マジかよ！？」

「ああ。それで…」
傍らにおいていた風呂敷包みを差し出す。濡れているが、あの豪雨では仕方なかった。
「貴様に、これを預かってきた」
首をかしげながら、恋次が風呂敷を開く。
息を呑んだ。
「こいつは…」
「隊首羽織だ。三番隊のな」
そっと、自分の左袖に手をやり、そこにある副官章に触れた。
「付けていろと言われた。その隊首羽織も着ていろと」
「けど…」
勝手にこんなことをしている自分が、隊長の資格など、あろうはずもない。だからわざわざ、抜いてきた。
「…渡されて、分かったような気は、するのだ」
その目には、何か強さがあった。
「私達は何処にいても、それぞれ三番隊、九番隊の、隊長、副隊長の任を担った死神なのだ」
恋次は無言で、隊首羽織を見つめている。
ルキアは襖越しに、そこで眠っているだろう一護に目をやり、拳に力を込める。
「私達は、死神として、隊の者達を預かる身として、そして仲間として、一護を助けねばならぬ」
「……ああ…」
彼も顔を上げて、笑う。仲間の一護を助ける。何が何でも、必ず、絶対に。
――――そう、己の魂に誓う。

＊　＊　＊

隊の者を凝視し、確認をするように口を開く。

「朽木が脱獄しただと…！？」
「はい！　昨晩の遅い時間から早朝にかけてのどこかでいなくなったものと思われます。まだ明らかにはなっておりませんが、どうやら手錠は斬魄刀で壊されたようで…」
檜佐木は眉を顰める。
彼女の斬魄刀・袖白雪は、牢屋の外の、見張りの控室に厳重に保管されていたはずだ。
「牢からはどうやって出たんだ？」
「それが妙なことに、外から開けられたようで、壊された様子はありません。恐らく朽木副隊長お一人の力ではなく、何者かが脱獄の手助けを…」
「だったら残留霊圧を十二番隊に頼んで測定してもらえ！　見張りが気を失っていたんなら、手っ取り早い方法で“白伏”を使った可能性が高いだろう！？　鬼道を使ったなら、その霊圧が微量でも誰だか判別可能のはずだ！」
隊士は困り顔で首を振る。
「いえ、実は、それを考慮に入れてか、四番隊で盗まれたらしい“穿点”か“崩点”の麻酔系を使われたようで、霊圧は少しも残っていなかったのです。痕跡はないに等しく…」
頭を掻き、考え込む。
まさかこの期に及んで、ルキアを脱獄させる者がいるとは思わなかった。今は、最早黒崎一護という敵のせいで、瀞霊廷はかなり緊迫しているというのに。
釈放許可の出ていない者へのこの行為は、中央四十六室も絡んでいて、立派な重罪ものだ。それを知っていて彼女を助けようと思うのは、一体誰だ？
真っ先に浮かぶのは恋次だが、彼は未だ現世だ。不可能である。麻酔系を容易に持ち出すことのできる花太郎か？　しかし、隊舎牢に死角はなく、そうそう見張りに近づいてそのようなものを使う、ということはできない上、非戦闘力の彼ではできようもはずもない。

では白哉が？　いや、彼は義妹の罪がこれ以上重くなることを拒んでいた。ルキアのためを思い、意思に沿ってやるようなことはしないだろう。まさか浮竹？　しかし、彼は今、王土にいる。尸魂界にいきなり戻ってくるようなことは、まずできないとみていい。小椿や清音か？　だが、十三番隊は、浮竹の昇進によって今でも落ち着きがない。そんなことができる余裕もあるようには思えない。

（……ああ～、くそっ…）

ゴン、と頭を叩く。どうにも頭が働かない。

多分、自分の副隊長が脱獄したことに動揺しているのだ。四年間、上手くやってきていたのに。

（朽木とよく喋ってたヤツ…朽木とよく喋ってたヤツ…）

既に滅茶苦茶な推理だ。

喋っていたからといって、脱獄の手助けをするほどの関係であるとは限らない。

「……」

ふと、顔を上げる。

頭には、瑠璃谷夜光の姿があった。記憶が正しければ、彼女は恋次やルキアとよく馴染み、気楽に話せる関係であったはずだ。

『うざ』

隊首会の席で、不快感を露わにしていたことを思い出す。

もしかして、夜光がルキアを…？　檜佐木はかぶりを振った。

（…ねぇか、さすがに）

彼女が命令違反をするとは思えなかった。何せいつも、宴会のときでさえ、乱菊や自分に「仕事を怠るといけないから、飲むのはほどほどに」と注意していたくらいだ。忠告を無視して飲みすぎたときなど、彼女の前で正座をさせられて、一時間にわたり説教されたことだってある。

そんな夜光が命令違反と知っていながら、ルキアを逃がすなど有

り得ない。
「あの……檜佐木隊長？」
報告が終わっても、一応まだそこにいたのだろう隊士は、考えを巡らせている隊長に戸惑いながらそこで跪いている。
「ああ、悪りぃ…もういいぜ。また何か分かったら、連絡してくれ」
「はい」
そして隊士は襖を閉めると、廊下を歩いて隊長室からは慣れていった。
「……くっそー…」
頭を抱えて、しゃがみこむ。
一体誰が朽木を？　どうして？　何故？
そして、脱獄した朽木の罪は？
（…どうすりゃいいんだ…？）
顔を上げた先の机に、山積みになっている今回の事件の書類。
記入していないにも関わらず、無性に破り捨てたくなった。

瀞霊廷の端の方で、十一番隊第三席・斑目一角は、いつものように斬魄刀を担ぐような形で持ちながら歩いていた。かつての処刑場に近いところである。
「たーしか、この辺だったよなぁ…」
すっかり綺麗に修理されていて、その面影はないが。ここに、あのときオレンジ色の髪をした死神が、空から降ってきたのだ。共にいた男の妙な術で地面に大きな窪みを作って。
「あれ、一角？」
後ろから声が聞こえ、振り向く。同隊第五席・綾瀬川弓親だ。
「おう。どーした？」
「それは僕の科白だよ。どうしたの、こんなところで？」
「別に、ただ、ちょっとな」
ていうか、お前だって何でここにいんだよ。

そうは言わなかった。とぼけながらも、お互いに分かっている。
どうしてここに来たのかなど。

日番谷は双極の丘から、尸魂界を眺めていた。
「……」
……また、なのか？
自問し、目を閉じる。

――――なぁ、もし……俺が……

「草冠……」
無意識のうちに、故人の名を呟く。昔の、大事な友達。

――――…シロ……ちゃん……どう…して……？

「雛森……」
無意識のうちに、流魂街時代、姉弟のように育った幼なじみの名前を呟く。護るべき人。
……また、なのか？

……また、俺は、仲間を刺すのか……？

脳裏に、オレンジ色の髪をした死神を…人間を、思い出す。
いくら思い出しても、命令が変化することはないと、分かっていたけれど。

時は、ただ刻まれていくだけだった。

何とか…続きです。新章です。
一護、やっとルキア達とちょっとだけではありましたがまともに言葉を交わしました。長かったなぁ、ここまででも。まだ全然ですけど。

檜佐木は本当に本当に苦労人ですね。ごめん檜佐木…（苦笑）
でも尸魂界でも、ちょっとずつ一護の処刑に関して皆が悩み始めていました。最初は「命令だもんな」ですけど、やっぱり時間が経つと困るものですよね。きっと。
ずっと出したかったけど出せなかった一角と弓親を出しました。十一番隊メンバー好きなのに出しどころが分かりませんでした…。きっと活躍してくれることを祈ってます。うん（笑）

次の更新はいつになるか分かりません！；
全然下書きしてないので…それにまたテストやらもあるので忙しさがまた増大します。楽しみにしていただいている方は、是非気長にお待ちいただければと思います。十二月にはきっと一回は更新しますので。はい、きっと。

それでは、これにて。
感想等いただければ嬉しいです。

Strawberry demanded that Death should

見覚えのない天井が視界に入り、自分の状況がいまひとつ飲みこめない。ただ、頭の下はフワフワして、体の上には何かがのっていて暖かいということから、自分は布団の中で眠っていたのだということは理解できた。

鉛のように重い体を何とか起こし、周囲を見回す。

畳の部屋で、とくに何もなく、せいぜい自分ののる敷布団の傍らに、着ていたはずのマントが丁寧に畳まれて置いてあるくらいだ。

俺、どうして…？

寝ぼけているからか、あまり考える姿勢になろうとしていない脳を、無理矢理働かせる。

自分は虚圏ではなく、どうしてここにいるのか…

そこでハッとし、慌ててマントに手を伸ばした。体に羽織ったとき、襖が開く。

あの、「朽木ルキア」という、死神だった。

「…目が覚めたか？」

一護は勢いよく後ろへと下がり、困惑した様子でルキアを見つめた。

マントを着ている彼を見て、眉根を寄せる。

「逃げようとしておったな？　貴様」

「ち、違げーよ！」

思いもせぬ即答に、今度はルキアが困惑する。

答えるにしても、それは「逃げようとした」「ここからいなくなろうとした」の、肯定の意のものであるだろうと思っていたのだ。

「では、何故マントを着ておるのだ？」

言うべきか迷うように、彼は瞳を彷徨わせた。しかしすぐに妥協したようで、はっきりと言う。

「このマントは、現世以外の世界から霊圧を察知できねぇようにす

るもんだ。尸魂界から死神が大量に来たりしたら、さすがに分が悪いだろ。だからだよ」
舌打ちし、俯く。
「っつっても、気を失ってた間、ずっと脱いでたんだから、手遅れだろうけどよ…」
ルキアは一人、納得していた。
前に一護は、ユウという少年の破面を引き連れて、かなりの霊圧のまま現世に現れた。しかし、彼女が九番隊隊舎牢に投獄されていたとき、檜佐木はこう言っていたのだ。
『だが奴の足取りは一切つかめてないんだろ？　技術開発局の霊圧探知にも、一応局の連中が注意して見てるらしいが引っかからないらしいしな』

どうやらあれは、彼がマントを着ていたから、ということらしい。おかげで十二番隊の霊圧探知に引っかからなかったのだ。
「それならば、案ずるな。テッサイ殿が、尸魂界から貴様の霊圧を感知されぬよう、昨晩からこの辺一帯に結界を張ってくださっている」
一護は眉間の皺を深める。
「何でテメェらが、そんなことすんだよ…」
警戒心を滲ませる彼に、ルキアは呆れ顔だ。
「たわけが。何を警戒しておる。貴様を殺すなら、気絶しているうちにやっておるわ」
一向に、二人の距離は縮まらない。心理的な意味でも、物理的な意味でもだ。
ルキアが一歩、部屋に足を踏み入れると、一護も一歩、下がった。
やはり、こうなると胸が痛む。彼の瞳には、今も自分はただの、敵である死神、という風にしか映っていない。
と、そのとき。

スターン！　とルキアが開け切っていなかった襖を一気に横に押しやり、赤髪の隊首羽織を着た死神が、ズカズカと部屋に入ってきた。
「なっ…！？」
「よう！　一護！！！」
「れ、恋次！　貴様…！」
そう、恋次である。
彼は、唖然とする一護にお構いなしで近づいていき、その首に腕を回した。
まだ記憶を取り戻していない一護は、攻撃だと勘違いしたのだろう。反射的に、斬魄刀の柄に手がのびる。が、
「何だよ！　意外と元気そうじゃねぇか！！」

――――おーす！　元気か、――！

「っつーかよ、いきなりテメェが現世に戻ってきて、すげぇ」
「やめろ！！！」
斬魄刀を抜きはしなかったが、彼は恋次を強引に押しのけ、また後ろへと下がると壁にぶつかり、そのままズルズルと座り込んだ。息は切れて、肩でしている。
一方、恋次は、一護に押しのけられて尻餅をついた体勢のまま、とくに文句も垂れず、先ほどとは打って変わり、静かに彼を見上げていた。
「……っ…くそ…」
唇を噛み締め、辛そうに自らの頭をおさえる。
「悪い……」
恋次の方を見ずに、ポツリと言う。そしてまた、
「……悪い……」
繰り返し、そう謝罪した。だが、彼が一体何に対して謝っているのかは、分からなかった。

「莫迦者！！！！！」
派手な怒声に、思わずその部屋にいた誰もが身を竦ませた。無論、その「莫迦者」である恋次も、顔を引き攣らせている。
「貴様は何を考えておるのだ！　一護にあのような振る舞いをしおって！　このたわけが！！！」
「だ…だってよォ…」
恋次は頭を掻く。
「記憶がねぇなら、前と同じようなことすりゃ、戻んじゃねぇかって思ってよ…」
一応、彼は彼なりに考えて出た行動だったらしい。
…結果は、大失敗だが。
「そうもいかぬ。昨日の夜も、私が“一護”と呼ぼうとすれば、先ほどの貴様と同じように“やめろ”と拒絶されたのだ」
障子の方に目をやり、息を吐く。
「今の一護にとって、我々は『敵』で、まだ『知り合って間もない』存在なのだろう…もう少し、あやつには時間が必要だ。すっかり混乱しておるしな…」
淋しいとは思う。すぐそこにいるのだから、何があったのか聞きたいし、いい加減、自分達が『敵』ではないことにくらいは気付いて欲しい。しかし、今の彼ではどうしようもなかった。
「…姐さん」
ずっと黙っていたコンが立ち上がり、ピョイッとちゃぶ台の上に跳び乗る。
「どうした？　コン」
コンが、拳を握り締める。
「…さっき、言ってたことは……本当なのか？」
りりんが、蔵人が、之芭が、顔を上げる。
彼等も確認したかったらしい。

「一護に処刑命令が出たってのは…」
「ああ。……本当だ」
すぐに、答えた。嘘をついてどうする。テッサイに無理を言って、結界を張ってもらった大きな理由だ。一護の霊圧が尸魂界の霊圧探知にかかれば、護廷十三隊は総出で彼を捕らえに来るに決まっている。そして処刑だ。それは絶対に避けなければならない、最悪の展開である。
ルキアはコンから目をそらし、恋次も目を閉じた。
酷すぎる。一護に助けられた尸魂界が、彼を処刑する権利など、本当に持ち合わせているのだろうか。
「……あたし、死神、嫌ーい」
りりんが仏頂面のまま、しかし淋しそうに言う。
蔵人と之芭は、困ったように顔を見合わせた。
「……」
コンは自分の首の後ろに手をやり、そこに引っかかっているものをとった。
ライオンの、鬣が外れてしまっている、出来損ないのストラップだ。四年前、霊骸の事件があったとき、仲間として共に過ごした改造魂魄・九条望実の欲しがっていたもの。結局彼女は消滅してしまった。だけど、望実はこのストラップを見て、“ありがとう”と言ってくれたのだ。あのとき、コンは自分が無力であることを悔いた。一護やルキアのように戦う力も、護る力も何も無い自分を恨めしく思った。
今回も、そうだった。自分は一護に救われた。だから、本来なら破棄の対象である改造魂魄の自分が、ここにいる。なのに、彼の処刑命令が決定したことを聞いて、それを悲しむことしか自分にはできない。
「ちっくしょうッ！！！」
コンは、やり場の無い怒りをストラップにこめて、畳にたたきつけた。

＊　＊　＊

雪がちらりちらりと降り、積もったその中へと入っていく。灰色の空から舞うそれは、妖精か何かではないかと錯覚してしまうほど美しい。

ザクッと、雪を踏む音。

周囲を見回して、何だか懐かしいような気持ちになる。

ボロボロの小屋に目を留め、少し躊躇ったものの、その戸に手をかけ、開いた。

「…っ……」

中には、ヒビの入った椀に草を入れ、磨り潰している銀髪の少年がおり、こちらに背を向けて座っていた。

思わず目を見開き、息を呑む。やがて、彼の名を口にしようとしたとき、一人の少女が自分の脇をすり抜けていった。

『ギン、ギンっ！』

はしゃぐ少女の声に、少年は振り向きもせず答える。

『おかえり、乱菊』

『ねぇ、ギン！　見て見て！　そこでお花を見つけたのよ！　春よ、春！』

幼い自分の手には、たしかに黄緑色の、花と思しきものが握られている。

すっかり霜焼けになっている足や手の先を、とくに気にした様子もない。

『へぇ、そうなんや。けど、春はもうちょい先と違う？』

『もう〜！　ちゃんと見なさいよ！　ほら！』

激しく肩をつかんで揺らされ、自分の作業に没頭するのは不可能であると考えたらしい幼いギンは、ひょいと振り返った。

その顔に、乱菊は胸が締め付けられるような感覚を覚えた。

彼は、幼い乱菊の持つものに目をやって、

『乱菊、それ、ふきのとうや』
『フキノトウ…？』
『うん。春の初めに出る植物。なるほどなぁ、たしかに、春が来てる言うのも、嘘やないらしい』
雪、降ってるけどな。
そう付け足して笑う彼は、どこか静かで。
『えへへー、あたしのお手柄よ！』
『うん。そやね』
ヘラリ、と笑っているだけのはずなのに。
『ほんま、おおきにな。乱菊』
そのとき、幼い自分はほんの僅かな瞬間、表情を失っていた。
今思えば、自分はこのときから、ひょっとしたらギンはどこかへ行ってしまうのではと不安感を持っていたのかもしれない。
《あ～あ…また、来てもうたん？》
「！？」
慌てて後ろを向く。
そこには、死覇装を着、その上に隊首羽織を纏った、三番隊隊長であったギンがいる。
声が、出ない。
《あかんで。もう、来ちゃダメや。こないなところ、乱菊が来てええとこやない》
ギンが踵を返し、歩き始める。
乱菊は叫んだ。
「待って、ギン！！」
去っていく彼の背に向けて、手を伸ばす。
「お願い！　待って！　ギン！！！」
泣きそうで、唇が震えた。
――――残念やなぁ　もうちょっと　捕まっとっても良かったのに
――――さいなら　乱菊　ご免な

「行かないで！！！」

目を覚ますと、自分はソファの上で体を横にしたまま、右手を伸ばして空を掴んでいた。

「……夢……？」

ゆっくりと体を起こす。

（……なんで、今更…）

目を細める。

（…ギン……）

何気なく時計に目をやると、一時間以上は普通に寝てしまっていたことが分かった。無論、仕事中の時間である。

きっとイライラした様子で、デスクワークをこなしているのであろう隊長に声をかけようと、腰をひねって机の方に目をやった。

「…あら？」

しかし、予想に反して、そこに日番谷の姿はなかった。さらに驚いたことに、いつもはこういったことがあっても書類は全て片付いているというのに、今日はまだ未処理のものが山積みである。

「…隊長…？」

視線を執務室内全体で巡らせたが、彼の姿は何処にもなかった。

慣れている、いないの問題ではない。

ただ、緊急時にはよくあることだと思い、仕方ないからそうしよう、といったところだ。つまり、何を言いたいのかといえば、この「自由」はいらない、ということ。

…「帯刀許可」は、別にされたくもなかった。

（あー…めんどい…）

そう考えるに留めている。「面倒臭い」の一言で現状を片付けな

いことには、例によってまた苛々して、どうにもならなくなるのだ。
（…でも、やるしかない）
歩みは止めず、大股で歩いていく。
（やれるだけ、やるんだ）
待雪草の髪飾りが揺れる。
気を引き締め、どんどん歩く。しかし走りはしない。急く気持ちのまま動けば、失敗は多くなる。隊長位に上りつめるまでに学習したことだ。
ふいに、気配を感じて足を止めた。
無言でそのままでいると、前方に瞬歩で砕蜂が現れる。
「砕蜂隊長？　どうしたんです？」
「何処へ行く？　瑠璃谷」
彼女は答えず、問い返す。
夜光が肩を竦めた。
「何処へ・って。何でそんなこと訊くんですか」
砕蜂は険しい顔つきで口を開いた。
「いいから、答えろ」
「大霊書回廊ですよ。隊長格による使用は、一部を除いて可能ですから」
「何のために？」
「破面化の資料を少し。あの“黒崎一護”がおかれた状況を調べてみようかなって」
スッと、彼女の瞳が剣呑に帯びる。
「奴の処刑命令を忘れたのか？」
「まさか。それで黒崎一護の弱点らしきものを見出そうってことですよ。彼は尸魂界を脅かす存在。殺して当然です」
二人は互いを見つめる。
「…信じていいのだな」
砕蜂が、確認するように言う。
たしかに、夜光においては、死神であったときの一護との関わり

がなく、わざわざ彼を助けようとか、そういう思考が働く可能性はないようには思う。
夜光は再び歩き始め、彼女の横を通り過ぎる瞬間、
「ご自由に」
いい加減な返答をした。

砕蜂から離れ、歩く夜光の心臓は、破裂しそうなほど激しく動いていた。
下唇を舐め、歩きつつも深呼吸をする。
（び……びっくりした……！）
そっと、胸のところに手を添える。
（砕蜂隊長、やっぱ鋭い…！　だから苦手だ、本当にっ…！）
情けないことに、ルキアの脱獄に手を貸してから、彼女はちょっとしたことで跳ね上がるほど驚くようになった。今の砕蜂とのやりとりも、よくもまぁ平静を装えたものだと自分を褒めたい。
そもそも、夜光はこれまで、命令違反らしいことをほとんどしていなかったのだ。あの、小虚が凶暴化した事件だけだった。そして久しぶりに犯したのは、重罪ものである、脱獄の手助け。ビクビクしているのも当たり前だが、それを隠すだけでも一苦労である。
（…とにかく。何でもいいから、見つけなきゃ）
ルキアが必死になって捜し、恋次が処刑も厭わないほどの絆で結ばれている、「黒崎一護」。
（死神代行の処刑命令を覆す、何かしらのものを…！）
夜光は、走り出した。

線香の煙が、ゆっくりと波を打ちながら天井へと昇っていき、やがて霧散して空気に紛れていく。
その背景に、一人の女が憂いをもった笑顔で写っている写真がある。ただの写真ではない。「遺影」というものだ。彼女はもう、随

分と前に死んで、自分の前からいなくなってしまった。
「……」
仏壇の前に無言で佇んでいた白哉は、亡き妻であり、ルキアの実の姉であった朽木緋真の遺影からは目をそらさず、徐に口を開く。
「…兄が我が朽木邸を訪れるとは珍しい」
しかし、とくに驚いた様子はなかった。
「何の用だ？」
くるりと振り向けば、日番谷は白哉から十歩ほど離れた、縁側に近いところに立っていた。
「…朽木ルキアが脱獄した」
「聞いている」
「それを手伝った馬鹿が、尸魂界にいる」
「だから、何だというのだ」
本当に、凄い男だ。
義妹が脱獄し、彼女の罪が重くなることは、真央霊術院の生徒でも分かること。しかし白哉は、心中穏やかではないだろうに、そういったことは表に出さない。淡々とした物言いには、舌を巻く。
「…あんたじゃねぇことは分かってる。当然、俺でもねぇ。今回は全く見当もつかない」
「……」
そんなことを確認しに来たのか。
彼は密かに溜息を吐くと、踵を返して改めて緋真の遺影に向かった。
「……朽木」
日番谷が一歩、足を踏み出す。
磨かれた床が、キュッと音を立てた。
「単刀直入に訊く。朽木の脱獄に手を貸した馬鹿は、本当に馬鹿なのか？」
一瞬、勝手に体が反応を示し、ピクリと動いた。

――――…悪い……やっぱり、俺には分かんねぇや…

ゆっくりと、もう一度振り向く。
日番谷はやはりそこに立っていて、再び言った。
「命令に背くことは、愚かだと思うか？」

――――俺が…俺が、もし…あんたの立場だったとしても…

白哉が、目を細める。
「…兄らしくもない問いだ」
僅かに、彼の口角が上がっている。

――――やっぱり俺は、掟と戦うと思う

「……ふっ…」
日番谷は肩を竦めると、白哉の顔を見る。
線香の、僅かに甘いにおいが、鮮明になったような気がした。
「あんたに、頼みがある」
「何だ」
「できれば、急いで欲しい」
毅然とした様子で、口を開いた。
「総隊長と直接、掛け合ってもらいたい」
予想通りであったらしい。
白哉は口許にまた笑みを浮かべる。
「成程」
線香の煙は、相も変わらず波打っていた。

＊　＊　＊

テッサイの張った結界は尸魂界からの霊圧探知に留まらず、現世

での感知も容易に通りはしないほど強力だ。それゆえか、一護の霊圧を感じて、浦原商店に織姫や石田、チャド、夏梨、遊子、一心などが駆け込んでくる気配はなかった。幸いにも彼が現世に現れ、ルキア達に保護された時間は真夜中であり、皆は眠っていたため気付かなかったと思われる。

夜一は再び、情報収集のため外に出ていて、雨とジン太は身分上、一応今は高校二年生と中学二年生なので、学校に行った。

テッサイは結界に気を配りつつ商品の整理をしており、りりん、蔵人、之芭もそれを手伝っていて、コンは恋次とちゃぶ台に向かい合わせに座っている。実は二人は交代で、何度か一護とまともに会話をしようと部屋に入っていったのだが、「知らねぇ」「やめてくれ」「分かんねぇよ」などなど、愛想もなく返され、柄にもなく揃って凹んでいるらしい。もっとも恋次はブツブツと独り言ちているが、やはり怒りよりも悲しい気持ちが大きいようだ。

ルキアは、緑茶の入った湯呑みと、餡子を上からかけた白玉がのった皿をお盆におき、それを持って襖に近づく。

「入るぞ」

断ってから、開ける。

マントを纏ったまま、布団の上で胡坐をかいていた一護は、ルキアを認めるや否や、掛け布団につんのめって転ぶなどと無様な姿を晒しつつ、一気に部屋の端まで逃げていった。

どういうわけか彼は、ルキアを一番嫌がっているようだ。

「何だ、その態度は」

不快そうに尋ねると、一護は険しい顔つきのまま、

「何でもねぇよ。何しに来た」

「腹が減ったのではと思ってな。見ろ、布袋(ほてい)屋の最高級白玉だ」

そう言って部屋に入ると、お盆を置く。

チラリと、一護を見た。

「…まだ何も、思い出さぬか？」

「思い出すも何も、まず、俺は破面だ」

ルキアは眉間に皺を寄せた。
「お前等死神の、敵だ」
自分に言い聞かせるように、紡いだ。
「違う」
即座に返すと、一護は僅かな戸惑いの色を見せたが、すぐに気を取り直した。
「じゃあ、訊くぜ、朽木ルキア」
恐ろしく他人行儀なその呼び名に、ルキアは自分の中のどこかに、穴が空いたような感覚を覚えた。
「テメェは、俺の何を知ってんだ？」
言ってみろよ、と腹立たしげに促す。
「……貴様は…」
目を閉じる。
数え切れない思い出が、頭の中で流れる。
「本当に、莫迦者だ。そして」
息を吸い、改めて、部屋の端にいる彼を、その瞳に映す。
「大事な、仲間だ」
一護は眉を顰め、俯く。「またかよ…」と、口の中で呟いた。どういうわけか彼女は、自分のことを幾度も“仲間”と言う。自分がなんらかの記憶を失っていたとしても、さすがにそれはないだろうと思うが、どうもしっくりこない。
しばしの沈黙。
ところが、次の瞬間、彼が弾かれたように顔を上げた。かなり突然であったので、ルキアがたじろぐ。
「な、何だ…？　どうしたのだ？」
一護は天井を振り仰ぎ、目を見開く。息をごくりと、飲み込む。
そして、うわごとのように、呟いた。
「……来る…！」

Strawberry demanded that Death shoul

テスト前ですが、勉強を本格的に、というのは明日から、と思っていたので、かなりギリギリで辛うじて更新です。

保護された一護は、まだルキア達を受け入れることはできません。現時点ではまだ、自分のことを何とか信じたいと思っています。何せ、自分が本当は破面ではない、ということを信じてしまえば、その瞬間にあれほど仲良くしていたガレットやユウは敵ということになってしまうからです。

ぶっちゃけた話、かなり焦っているのは恋次とコンです。で、ルキアは「焦るな」と二人の首根っこを掴んでいる感じですかね。

尸魂界でも、いよいよ死神が動き始めたようです。彼等の活躍に、乞うご期待？（笑）

すみません、時間がないもので。
一ヶ月は更新できません、本当にごめんなさい。
今回もかなり無理してこの話の進まなさ加減…ありきたりな感じ。
もっと精進しないとダメですね…；

読んでくださっている方は、気長にお待ちいただければと思います。
それではこれにて。

感想等いただけたら嬉しいです。

Strawberry demanded that Death shoul

「……来る…！」

一護がそう呟いた直後、上から重くのしかかるようにして現れた霊圧に、ルキアはつい膝をつきそうになった。

虚でも大虚でも巨大虚でも、ましてや破面や死神や仮面の軍勢のものでもない、どす黒くて汚く、強大な霊圧だ。

ルキアが「貴様はここにいろ」と言い残し、足早に部屋を出る。居間にいた恋次とコンは既におらず、商品を整理していたテッサイとりりん達も店にはいない。

急いで引き戸を開けて浦原商店から出ると、雨はすっかり止んでおり、その空の下、全員が緊張した面持ちで、店の前に立っていた。

「恋次！　何だ、この霊圧は！？」

「分からねぇ！　こんだけバカでけぇと、場所の把握すらできねぇよ！！」

必死に探るが、何処も今一つピンとこない。

霊圧の集中したところに向かえばいいのだろうが、それが分からなかった。尸魂界に連れ戻される要因の一つになるのでは、と恐れて、伝令神機を持ってこなかったのが大きな仇となった。

「この結果意を突き抜けて、これほどの霊圧とはっ…！　霊力のある方には、健康面に異常の出る方もいらっしゃるかもしれませぬぞ…！？」

テッサイの言葉は最もだが、今は皆、学校や大学、バイト先などに散らばっていて、安全確認もできない。霊圧を感じることができればよいが、この強大すぎる霊圧のせいでほとんど判別できそうにもない。とくに心配なのは、織姫や石田、チャドらよりも弱く、しかし霊力のあるたつきや啓吾、水色、千鶴、夏梨、遊子だった。倒れたりして、そこにこの霊圧の主が襲い掛かったりなどしたら、笑えない。そもそも彼等は、戦う手段を持っていないのだ。

…ガラッ。
「！？」
浦原商店から、ふらりとした足取りで出てきたのは、マントを着た一護だった。
「貴様……出てくるなと言ったではないか！」
ルキアが怒鳴るが、彼は空を見上げて、呆然と呟く。
「これは……」
「何だよ、一護！？　知ってんのか！？」
恋次の言葉にも無反応で、沈黙する。
心臓の鼓動が早い。汗が頬を伝う。
（何だ…この感じ…）
一護は、右目を覆う、虚の仮面に手を触れる。
俯いて、小さく息を吐いた。目を瞑る。

――――…け……

薄く目を開いた。そうすると、体中が一度、ドクン、と激しく脈打つ。そして、自分の中から、声が聞こえた。

――――行け！　一護！！

「一護！？　おい！！？」
「何処に行く！？　一護！　一護ーッ！！！」
一護は走り出し、テッサイの結界をくぐり抜けて、空座町の中を駆け抜けていく。
何処に行く、と、ルキアに叫ばれた。しかし、自分も何処へ向かっているのか、よく分からない。ただ、行かなければ、と思った。
マントを靡かせて、滝のように落ちてくる強大な霊圧の中、走る。
…走れ。俺。

＊　＊　＊

技術開発局の中は、けたたましいブザー音に満たされていた。のっしりとした体をぐりっとひねって、フグのような顔をこちらに向かせ、技術開発局通信技術研究科霊波計測研究所研究科長・鵯州（ひよす）が面倒臭そうに言う。

「何だ？　リン」

壺府（つぼくら）リンは片手で機械をいじり、もう片手に三色団子をもって食べつつ作業をしていたのだが、今は傍らの「壺府」と書かれた自分の皿に団子を置いて、必死にキーを叩いている。

「現世・空座長に、巨大な霊圧反応を確認！　でも…未登録の霊圧です！　判別できません！！」

「そんなことあるはずねぇだろ！？　俺達ゃ、死神や破面は勿論、あの地獄にいる咎人（とがびと）や、クシャナーダっつう番人も、霊圧の種として登録してあんだ！　なぁ、阿近（あこん）！？」

鵯州が、左側頭部ついている小型ハンドルを回し、左目を飛び出させて画面を睨み付けていた。そうして阿近に同意を求めるが、彼も首をかしげた。

「…いや、全部該当しねぇ。この波形に合うもんがねぇな」

「あの、黒崎一護さん絡みでしょうか…？」

女性局員が尋ねると、阿近は肩を竦める。

「さぁな。そう考えるのが普通だが…とりあえず、すぐに涅隊長に報告…」

ビー！　ビー！　ビー！

「今度は何だ！？」

また鵯州が言うと、リンは物凄い速さで画面を切り替えていく。

「新たな霊圧、出現！　破面です！　数は一！　場所は…」

ゴクリ、と息を呑んだ。

そして、震えながら、振り返った。
「尸魂界の、穿界門近辺です…！」

瀞霊廷の中を、走っていく。
（もーっ…！　もう少し調べたかったのに…！）
連絡を受けたのはついさっき。隊長格で、穿界門近辺に現れた破面を迎撃しろ、ということだった。
ふと屋根に目をやると、そこを走る小柄の死神が目に入る。
（日番谷だ…）
走りつつも声をかけようか迷い、どうせ同じところへ向かっているのだからと思いなおして、そのまま進んだ。
しかし、彼が屋根を蹴って下りた時、必然的に二人は互いの顔を見ることとなった。
「……結構な霊圧だね」
結果的に一緒に走る形になったので、少し前を走る日番谷に話しかけてみる。
「そうだな。こんなときに現れやがって…」
心底イラついている様子だ。
“こんなとき”って…何かしてたの？」
「ちょっとな」
「ふーん」
それから走り続け、そろそろ破面が見えるであろう辺りまでやってきた時、彼がぽつりと尋ねる。
「……いいのか？」
「何が？」
走る速度は、緩めない。
「そんな体でお前、戦っていいのか？」
少しの合間があり、
「……うん」

夜光は一人頷く。
「いい」
横目で彼女を見てから日番谷は、「そうか」と呟いた。

夜光と日番谷がついたときには、既に元柳斎、浦原、卯ノ花、恋次以外の隊長格が集まっていた。そして上空には、見たことのない女性破面。
「なーな、はーち、きゅーう、と…」
彼女は、隊長ら一人一人を指差して数え、腕組みをして唸った。
「ナリアとガレットに聞いてたより、少ないなぁ…」
狛村が、大声を発す。
「貴公は何者だ?」
「何って、破面。ティファニー・リック・コムだよ。よろしくお願いします」
茶髪でショートの女性破面は、そう名乗ると律儀にもペコリと体を曲げた。
「てめぇが、黒崎に何かしたのか?」
日番谷が斬魄刀の柄に手を添え、ティファニーをにらみつけながら声を落として訊く。
彼女は、灰色の瞳を瞬かせた後、小首をかしげた。
「“クロサキ”って、誰?」
「黒崎一護だヨ」
ある種の恐怖を煽りそうな笑みを浮かべ、マユリはティファニーを見上げる。
「彼は元々、人間であり死神だ。だが、こないだ破面として、黒崎一護はこの尸魂界に現れた。私も、破面化の研究はまだまだでネ。是非聞きたいものだヨ」
一度腕組みをして、ふと何かが思い当たったような顔で、そこに集まっている死神一同を見回す。

「ひょっとして、あなたたちが言ってるのって、ナリアのことかな？」
瞬時に表情を険しくする彼等を見て、「あ～、やっぱりそーだ！」と嬉しそうに手をたたいた。しかし、ティファニーは表情を曇らせる。
「あんまり、テキトーなこと言ってナリアを苦しめないでよ。彼、ずーっと辛そうなんだよ？　おかげで僕たちもちょっと今、大変なんだから」
「お言葉なんだけどねぇ、お嬢さん」
間髪入れず、京楽が編み笠に手を触れながら歩み出る。隊首羽織の上から羽織る、艶やかな女物の着物が揺れた。
「女の子なんだから、“僕”はやめようよ。あと…」
彼の瞳が、剣呑に帯びる。
「一護くんを苦しめてるのは、君達の方じゃないのかい？」
「！？」
ティファニーが眉を顰める。
「…それ、どういうことかな？」
檜佐木が、斬魄刀を抜いた。
「黒崎一護に俺達は救われた。だが、現状は黒崎の処刑をしなきゃならねぇ。そうなった原因はお前等だ！」
切っ先を向ける。
脱獄した、朽木ルキアを脳裏に浮かべる。処刑するなんてとんでもない、と怒鳴った彼女が、まだ目に焼きついている。
「一体何があったのか、処刑するにしても、それくらいは聞かせてもらう…！　『刈れ！　“風死（かぜしに）”』！」
檜佐木の斬魄刀・風死は、一対の鎌状に変化し、始解が完了すると同時に地面を蹴り、宙に上がった。ティファニーの真上をとり、容赦なく風死を投じる。
彼女は無言で斬魄刀を抜くと、スッとその風死に向ける。
「あ。鎖でつながってるんだ」

言って、少し刀を傾けて、鎌の高速回転を容易く止めると、片手で鎖を一気に引っ張った。当然、檜佐木の体が大きく傾く。
そのとき、ティファニーの正面に瞬歩で現れた京楽は、始解した花天狂骨で斬りかかった。
仕方なく、彼女は鎖から手を放し、響転でそれをかわす。
「『霜天に坐せ！　“氷輪丸”』！！！」
下から斬魄刀・氷輪丸を振るうと、刀身から氷の竜が飛び出した。
ティファニーは目を細めると、掌を氷の飛竜に向ける。そして、凄まじいスピードで、虚閃を小さく固めたようなものが飛び出し、相殺した。
「…虚弾（バラ）か…っ！」
舌打ちしつつ呟く日番谷に、ティファニーは親指を立てる。
「せいかーい！　さすがによく知ってるね」
「『希め！　“星陰冠”』！」
夜光が斬魄刀・星陰冠を始解し、真っ向からティファニーに斬りかかった。
斬魄刀同士がかち合い、火花が散る。
「…勢いはあったけど、あんまり上手ではないね？」
柄を両手で握り締めなおす。更に力をコメ、ティファニーの刀を押した。
「元々、剣の才能はないんだ。でも…！」
パープルに彩られたレイピア状に変化していた星陰冠の全体が、改めて白く輝き始める。
彼女は眉間に皺を寄せた。
「自分の刀の使い方ぐらいは知ってる！　『踊れ、“星陰冠”』！」
瞬間、刀身から２０００の、光の針が噴出し始める。
「わぁお」
感嘆の声をあげつつ、彼女は夜光の刀をはじくと、響転を使って間合いをとる。
斬魄刀を振りかぶり、ポソリと呟く。

「虚閃」
刀を振るうと、斬撃が視覚化されたような具合に、鋭い虚閃が放たれる。それは勿論、星陰冠による光の針などは容易に無効化し、威力を殺さずに迫ってきた。
顔を顰めて、彼女は身構えた。
そのとき、瞬歩で砕蜂が目の前に現れ、隊首羽織を脱ぎ捨てる。夜光はあわてて、その羽織を受け止めた。
「瞬閧(しゅんこう)！！！」
死覇装の肩部分が弾け飛び、刑戦装束となった砕蜂は、霊圧を込めて虚閃へと叩き込む。
瞬間、なかなかの爆発が発生したが、彼女はすぐに持ち前のスピードで安全地帯にまでおりてきた。しかし残念なことに、ティファニーも爆発に巻き込まれるほどマヌケではなく、その場から離れていた。
「ふー…やれやれ。大体、分かったかな」
ティファニーが頬を掻く。
と、その背後に、ピンク色のものが間近にまで迫っていることに気付いた。
「おっと！？」
とっさにかわし、虚弾を撃ってそれを打ち消す。
ピンク色のそれらは方向を変えて、きた場へと戻り、白哉の周りに留まった。彼の斬魄刀・千本桜だろう。
「びっくりした～。すごいね」
「……解せぬ」
険しい瞳を向け、白哉は言う。
「何故、我々を倒そうとしない？」
ピク…。
ティファニーが、無表情になる。
「先ほどから、我らの戦いに合わせているようにしか思えぬ」
風が吹きぬける。

「本当の目的は、何だ？」
「余裕ぶっこきすぎじゃない？」
強い声音で、白哉の言葉にかぶせるように放った。
死神達が眉根を寄せると、ティファニーは落ち着いた様子で、
「ほら」
ピッと、指先を向ける。
「後ろ、危ないよ？」
――――！？
彼等が振り向いたと同時に、そこにあったのは、紅い血と、声にならない叫びだけ――。

＊　＊　＊

本当に、突然であったとしか言いようが無い。
学校に行って、気を紛らわしてきた方がいい。織姫にそういわれ、遊子は夏梨と待ち合わせ、共に登校した。
クラスは違っていたが、夏梨も遊子のことが心配で、休み時間が訪れる度に彼女の教室に行った。兄は「死んだ」のではなく「殺された」という新事実を漏らしても、今では逆効果であるとみて、言っていない。
鬱病の状態に近い遊子が弁当を作れるはずもなく、昼食は昼休みに、揃って購買部へと足を向けた。そして、教室でその買ったパンを食べている最中に…、

それは、突然に起こった。

まずは強大な霊圧が瞬間的に辺りに満ちて、霊力の高まってきていた遊子と、元々一護と同じくらいの霊力をもつ夏梨は、表情を急変させた。
戦う術をもたない二人は、四年前、一護と一心からこう説明を受

けていた。“虚は霊力の高い人間を狙って喰らう。周りの人間を護りたければ、とにかく逃げろ。そして、どんな手を使ってもいいから、その地区担当の死神が助けに来るまで逃げ切れ。その虚がどんなに弱そうでも、無茶をしてはいけない”・と。

窓ガラスが割れ、「何が起きたんだ！？」と慌てる同級生達を見ながら、夏梨と遊子は思った。

――――逃げなきゃ…！

先生に言い訳もせず、二人は恐るべき勢いで教室を出て、空座第一高等学校を飛び出し、走りつつ後ろを確認して、そこにいる「物体」に震え上がった。

虚には見えない。首長竜とでもいえばいいのか、そんな形のバケモノが、一歩一歩、ゆっくり、しかし確実に追いかけてきていたのだ。

「夏梨ちゃんっ…！」

泣きそうな声で遊子が言う。

夏梨は前を真っ直ぐ見つめたまま、双子の姉の手を引っ張った。

「喋ってる暇があんなら、走れ！」

ポケットをあさり、球状のものを取り出す。

何かのアニメのキャラにいそうな、とぼけた顔のデザインが施されている黄色のボール。浦原商店の商品「ゼタボルたん」だ。

（…何なんだよ、あれ…！？）

舌打ちし、もう一度バケモノを見やる。

『虚に襲われた時の一時避難！　電磁捕縛丸ゼタボルたん！！』

夏梨は「ゼタボルたん」に霊力を少し込める。

「くそっ、よくわかんねーけど…！　それっ！！」

バケモノの方へと、力一杯投げた。
しかしそれは、バケモノにぶつかる前に、どういうわけか粉々に砕け散った。
「うわっ！　使えねーっ！！」
派手に毒づき、再び走ることに専念する。
脳裏に、虚を斬って、色々なものを守っていた、死神代行の兄を思い出す。その次に浮かぶのは、同じく死神の姿で、それに白い羽織を着た小柄な銀髪の少年。
（あたしも…あれくらいの力があればっ…！）
密かに奥歯を食いしばる。
ドタッ！
転ぶような音がしたと同時に、夏梨の左手が引っ張られる。後ろを見ると、遊子が転んでいた。
「遊子！！」
「…夏梨、ちゃん…！　逃げてぇ…！」
「バカ！　そんなこと…！」
そして、ハッとする。あのバケモノは、大きすぎていまひとつ距離感がつかめなかったが、予想以上にすぐそこまで迫っていたのだ。バケモノを見上げて、情けなくも恐怖心で体が震える。
巨大な前足を振り上げたのを見て、夏梨は目をつぶる。遊子と互いに、手を握り合った。思わず、叫ぶ。
「――――っ…一兄…！！！」
――――ドォン！！！！！！！
＊　＊　＊
ピク、と指を動かす。それだけでも体から力が奪われていくようだ。
重い瞼を持ち上げると、自分の血で染まった地面が真っ先に目に

入った。周囲からも、荒い息遣いが聞こえることから、無事な者は皆無らしい。
日番谷は、必死に腕に力を入れた。しかし、どうしても体を起こすことはかなわない。
「ぐっ……」
視界が霞む。息をすることも、最早困難な状況だった。
一体、何が起きた？　どうしてあの一瞬で、自分達はこうも全滅している？　ティファニーはどこへ消えた？　そして、自分達の後ろにいた、有り得ない『アレ』は、何だ？
「…く……そ……」
こんなところで。こんなときに。こんなことになっている暇などないのに。
意志とは真逆に、この苦痛の中、どんどんまどろんでいく自分が恐ろしい。
…ザッ、ザッ、ザッ…
足音がする。近づいてくるのは、死神とは違う、何かの霊圧。破面か。だとすれば、止めを刺しに来たとみて間違いはない。
そうはいくか…！
思い、日番谷は必死に立ち上がろうと足掻いた。しかし、二回、三回と地面を爪で引っ掻いただけで、それきり彼は動かなくなった。

＊　＊　＊

風を切る音がする。体が宙に浮く。
痛みは…ない。
「「…え…？」」
夏梨と湯子は、恐る恐る目を開いた。
自分達は、先ほどいた場所にはおらず、離れた場所にいた。人間の走るスピードでは到底成しえない距離を、あの目を瞑った一瞬のうちに移動していたのだ。

それはそうだろう。実際に移動したのは、夏梨でも遊子でもない。今、彼女等を抱えている、「彼」なのだから。
二人は、目を疑った。
「一……兄…？」
顔にある、右目を覆い隠している割れた仮面と、死神とは正反対の白い服に、違和感を覚えたが、見間違うことなど有り得なかった。
「お兄ちゃん……？」
遊子が、混乱した様子で小さく言う。
一護は、彼女等に目をやると、ゆっくりとその場におろした。そして、二人を背に、あのバケモノと対峙する。
「お前、どうしてこの人間達を狙った？」
「グゥゥゥ〜…」
唸り声。
彼は溜息を吐くと、バケモノを見据えた。その瞳には、静かな光が灯っている。
「俺と霊質が似てたからか？　だからとりあえず、紛らわしいから潰そうとしたのか？」
「グゥゥッ…！」
「お前は俺を捜しに来ただけだろ？　バートンはいっつもそうだ」
一護が、斬魄刀を抜いた。
「悪りぃけど、俺、まだ虚圏には戻れねぇ。そんな気がすんだ」
だから、と付け足す。
「お前に、“俺が現世にいた”ことをばらされるのは、正直、カンベンしてほしい」
「グゥ〜…」
「っつっても…無駄だよな」
響転で、バケモノの目の前に動くと、斬魄刀をゆっくりと差し上げる。
「許せよっ……！」
間際にそう呟き、刀を振るった。

先ほどまでの強大な霊圧が、嘘のように消え去った。あのバケモノは、一護の攻撃をまともに受けて、あっという間に霧散した。
後から追いかけてきたルキアと恋次が、足を止める。
「夏梨……遊子…」
二人も振り返り、夏梨が呆然と言う。
「あ……ルキアちゃん……恋次…」
「あの…あれって…お兄ちゃん…なの…？」
遊子の指差す先には、一護が一人、立っている。丁度、手にもっていた斬魄刀を鞘におさめているところだ。
「一護が…おめーらを助けたのか…？」
恋次の言葉に、頷く。
信じられない。何せ彼はまだ、記憶を取り戻してなどいない。妹のことも、分かっていないはずなのだ。
そんなことを思っていると、一護はマントを翻し、彼等のところに近づいてきた。夏梨と遊子の正面にまでやってくると、腰をかがめる。
二人は、やはり違和感のある兄に対し、警戒心があるのだろう。少し、戸惑った様子だ。
「わっ！？」
「きゃっ！？」
しかし、次の瞬間、一護は二人をまとめて抱きしめた。
それを見ている恋次とルキアも絶句である。彼の突然の行動に、意図が読めない。また、抱きしめられた二人は苦しいのか、幾度か腕の中で身じろぎをした。
「……お兄ちゃん…？」
そこで、ふと気付く。兄の肩が、小刻みに震えていたのだ。
苦しそうに、声が漏れる。
「う……あ……！」
抱きしめる手に、力がこもる。

夏梨と遊子を自分の腕の中におさめたまま、深く俯いて、震える声を発す。
「ああっ……うあぁ……！」
暫くはされるがままの二人だったが、やがて、夏梨は呆れたように微笑み、抱きしめる彼の腕の下から、自分の腕を何とか通すと、広い兄の背を、赤ん坊をあやすような具合で、ポンポンと叩く。
「何…泣いてんだよ、一兄…」
分かった。
一護は、自分達を「妹」だと認識することはできていない。でも、安心しているのだ。ただ、彼は、訳もわからず、自分達が無傷であったことに対し安堵し、意味も分からず泪を流している。やりようのない感情を、押し殺すようにして。
「お兄ちゃん……」
戸惑うばかりであった遊子も、夏梨と同じようにして手を回し、一護の背を軽く叩く。事情をほとんど知らない彼女なりに、現状を受け止めたらしい。そして、彼が本当に、自分の大好きな兄である、ということも理解できたようだ。
「泣かないで…？　ね？」
ギュウッ…
さらに二人を強く抱きしめ、一護は感情の全てをさらけ出すように、
「っうあああぁぁぁぁ……！」
破面になって初めて、ただ、泣いた。

Strawberry demanded that Death should

遅くなってすみませんでした、続きです。

一護が助けに行ったのは遊子と夏梨の二人でした。やっぱりずっと生まれたときから護り続けてきた家族、ってことで、何か感じるところがあったのだと思います。
ここだけの話ですが、助けに行く道のりの途中、ドン・観音寺に会う、という設定もあったのですがやめました。
いやだって。シリアスなのに。彼が出てくるだけで一瞬にしてギャグ章に変貌する（苦笑）

一護が現世に来る前、虚圏でハリベルやネルに会うところありましたよね。そこでチョロッと、名前だけ出した「ティファニー・リック・コム」がここにきてドーンと出てきました。いきなりの奇襲（笑）
戦闘シーンを書くのは久々でしたがどうでしたでしょうか。前より上手く…はないですよね。うむ…。いやね。苦手なんですよ。いずれまたバトルバトルバトルなところが出てくるので、そのときまでにはもうちょいマシになってるといいな、と思います。
そして日番谷くんたちピンチです。彼等がどうなるのかは乞うご期待↑

続きはまたいつになるか分かりませんが、何とかまた更新したいと思います。いつもながら恐ろしく亀更新で申し訳ありません。
遅い更新でも、よかったら是非これからも読んであげてください。
アドバイスや感想・誤字脱字の指摘など、いただけたら嬉しいです。

それでは、これにて。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0447v/

die and locus

2011年12月23日01時46分発行